

## 廃名の研究について総括的に述べる

廃名（1901～1967）に対する研究は大体三つの段階に分かれている。1925年から1949年にかけて第一段階である。この段階には、研究文章は30編余り、研究者（研究した人）が主に魯迅、周作人、劉西謂（李健吾）、沈从文、孟実（朱光潜）、鶴西（程侃声）などである。1950年～1967年は第二段階になる。この段階には、研究文章は10編余り、ほとんど廃名がやっていた魯迅研究、杜詩研究、美学研究に対するの批判意見である。1978年以後は第三段階である。論文の数にかかわらず（論文が約270編になる。平均毎年10編くらい書かれる。）研究する人の人数もこの前の二つ段階より大いに増えた。

新時代以来、文学内部や外部の環境は大きな変化があったので、たくさん（ごみを覆い隠し・垢だらけ？）の作家は再び人々の視線以内に入ってきた。そして、この作家たち（及び作品の地位）は、周辺地域から中心位置に転換したことによって、一つ一つ研究ブームが巻き起こった。たとえば、「周作人ブーム」、「沈从文ブーム」などなど。生前死後ずっと「寂しかった」廃名もこの一つ一つブームが巻き起こるうちに、しだいにしだいに読者や研究生たちの青眼を引き起こされた。したがって、廃名に対する研究もだんだんにぎやかになっていった。この段階には、初めての重要さもあり、影響力もある論文は、沈从文を研究する専門家凌宇が『十月』に発表した『「桃園」から廃名の芸術風格の得失を見る』である。ちょうどこの事実に基づいて、本編総述は1981年から述べることにした。

### 一、廃名の意義

現代の文壇において、廃名は独立な精神人格を持つ作家で学者である。彼の創作は（ほとんど小説の創作は）探索性・実験性をきわめて備え、前衛意識や個人化の味わいを多く持っている。さかのぼって20世紀30年代に、劉西謂はかつて「現存する中国文芸作家の中に……彼より通俗的・偉大的・生き生きとしている・新奇とともに流行している人がたくさんいるが、しかし彼よりもっと自分らしい（自分が自分に所属する）人は少ない……彼は本当に創作している。」と言った。（劉西謂：《〈画夢録〉——何其芳先生作》、《咀華集》、文化生活出版社1936年版）東洋と西洋の文化がぶつかった年代には、伝統や文化に反対するのが往々として普通の社会心理状態である。廃名は一般のものとは異なる。彼は身の向きを変えて、故郷に後ろへ退き、宗法制の農村文化に対して冷静に観察するような認める態度をとる。彼は彭家（火皇）、台静農、王魯彦、許傑など作家のように批判的な視線で生の苦・死の痛を描写するのと違って、悲しい傷をできるだけぼかし、田舎おじいちゃんおばあちゃんの生活から自然状態の人生美と人情美を探すとともに展示しようとしている作家である。したがって、廃名の小説は時代とともに発展していない、文芸の潮流に乗らないので、いかにもすべての社会主流の話とまったく相容れないに見える。これこそ、ある人たちは廃名的小説にある「現代性と反対する」主題がかすかに含まれていると認定する。（逢増玉：『廃名郷土小説隠含的反現代性主題及其叙事策略』、『東北師大学報』1999年第3期）実は、廃名の価値は現実意義に対するの掘り起こすことや詳説することから見られるものではなく、彼の価値は文書自体に対するの造ることや創造することから見られるものだ。換言すれば、廃名的小説の価値は内容ではなく、「意義がある形式」を持っているものだ。この「意義がある形式」から、廃名が現代性についてたゆまない追求するのをよく現れるに違いない。アメリカ学者の史書美（日本語がどういけばいいかわからない）は廃名が「伝統中の現代」だと評価するのはすこぶる道理があることだと認められた。（〔美〕史書美著、岳耀欽訳：『廃名：伝統中の現代』、『殷都学刊』1994年第4期）

創作の実際の成績から見ると、凌宇も楊義都も廃名が「大家ではない」（凌宇：『「桃園」

から廢名の芸術風格の得失を見る』、『十月』1981年第1期)「大家だと呼ばれることに足りない」と認める(楊義:『廢名小説の田園特色』、『中国現代文学双書』1982年第1期)。しかし、彼が芸術形式において試したのは開拓者の使命を尽くしたことだといえる。それは中国文学の発展に対して特有の貢献をしたと認められる。廢名の現代叙情小説の発展について研究することは、「五・四」以後の小説の全貌及び当代小説の芸術多様性の発展を如実に描写することに対して、とても役に立つことである。「われわれは、廢名という名前を無くすことができないというべきである。」(同上)

格非は以下のように考えている、「中国現代の叙情的な小説を研究するならば、廢名的小説が欠かすことのできないものだ。」廢名が文体、事柄を叙述する方式など方面において探索したことは、中国現代小説史上に最も重要な資源の一つとして存在している。この資源の意義は三つの方面から考察することができる。(一) 廢名と中国小説の事柄を叙述する伝統的な関係。廢名は自らシェークスピア、セルバンティスなど西洋の作家から影響を受けたと述べているが、それより中国伝統的な事柄を叙述する資源の陶冶や滋養によってもっと益を得たと考えられる。「廢名は中国文化と事柄を叙述する特徴を受け継ぐ同時に、彼の多少極端に達している試みや探索はこの伝統を豊かにした。」(二) 廢名は現実と時代との関係。廢名の作品は直接に社会の現実を表すものが少ないが、彼の作品は相変わらずに現実そのものと重要な隠喩と象徴の関係を構成している。彼は極力に現実生活を個人の心で統轄する範囲に繰り入れようとしている。記憶と「反？」を通じて全体から社会現実を表す。したがって、「廢名の作品は表すことに偏重しているものであるが、簡単に複製あるいは再現するものではない。これは私たちが創作と現実、または創作と時代精神の関係を再び考察することや、機械的な反映論の束縛することを振り捨てること、および作品の簡単化・功利性を避けることに対して、相当的な啓発する作用を持っている。」(三) 廢名文体と漢語創作の関係。廢名の事柄を叙述する風格や文体形式は非常に複雑である。そして一定の限界性もある。しかし、彼がこれらの分野での探索は「漢語創作の形式表現技法、修辞手段を豊かにすることに有益的な試みをしていた。」(格非:『廢名の意義』、『文芸理論研究』2001年第1期)

## 二、遺著の整理

長い間、相当の人たちは資料の収集と資料の整理を研究の仕事として見られていない。資料の収集と整理は一切の研究形式の基礎と前提である。原始、真実、正確の資料と離れて研究を話すと、必ず虚妄の話、でたらめな話になる。資料の収集と整理は研究仕事の有機的な一部分であり、その自身でも一種の研究である。1983年1月16日に、呉小如は香港『大公報』に学术界と出版界へ「先生の親族(先生の娘は南開大学中文系の卒業生)の協力によって、廢名先生の遺著を早く探し集めて整理して出版されてほしい。」と精一杯にアピールした。(呉小如:『廢名先生遺著亟待整理』、『大公報』[香港]1983年1月16日)しかし、廢名の資料を探し集めるのがかなり難しい。まるで廢名のおい子馮健男が言ったように「小説の収集はあまり問題がない、作家は五つの小説文集を残したから。『莫須有先生が飛行機に乗った後』をまだ本として出版されていないが、連載したものとして残されている。しかし、詩と散文の収集の問題がたくさんある。作家の蔵書や原稿はほとんど散失した。しかも、彼が発表された詩文の草稿を保存されたものも少ない。残留されているわずかの手稿あるいは新聞の切り抜きには書かれた年代と発表された日付をあまり記録していない。いつ書かれたかというようなことをまた確認する必要がある。」(馮健男:『馮文柄選集』編後記、『馮文柄選集』人民文学出版社1985年版)

1984年、人民文学出版社は真っ先に廢名の詩論『淡新詩』を出版した。これは廢名が

20 世紀三、四十年代に北京大学で教員になったときに書いた授業の教材である。その前十二章は外国の侵略に抵抗する戦争の前に書かれたものだ。かつて『淡新詩』という名前を書名になって、1944 年に北平新民印書館で印刷されたことがある。外国の侵略に抵抗する戦争が勝利した後に、廃名は再び北京大学に戻って教員になった。以上述べた本の後ろの部分、つまり第十三章から第十六章までは当時に続編した授業の教材である。人民文学出版社は前後の二つ部分を合併して、さらに外国の侵略に抵抗する戦争する前に書いた「新詩問答」という一編と組み合わせて出版した。1985 年、人民文学出版社は馮健男を誘って、再び『馮文柄選集』を編集、出版した。この選集は小説、詩、散文と論文四つの部分と分かれている。廃名が違う時期に書かれた代表作を収められ、基本的に廃名著作の全貌を現せる本である。たくさんの読者はこの選集を通して、廃名のことを知った。そして、ある学者たちはこの選集を原本として廃名に対して研究する。1986 年、上海書店が「中国現代文学史上の参考資料」として短編小説集『桃園』と長編小説『橋』の影印本を出版した。1988 年、四川人民出版社は廃名の学生李葆琰がえり抜き編集した『廃名選集』を出版した。この選集は初めて『莫須有先生が飛行機に乗った後』などを印刷したので、非常に充実している選集である。1990 年、姜徳明は編集主幹として『京派文学作品特集』を作った。その中に廃名の『莫須有先生伝』でも含まれていた。それは上海書店が開明書店 1932 年版によって影印して出版されたものだ。同年、百花文芸出版社は馮健男が選択して編集した『廃名散文選集』を出版した。その中に廃名は 20 世紀二十年代から六十年代の間に書かれた 28 編作品を収められた。これは厳格意義の散文集ではない、本義の散文以外に散文化小説と談詩説文の文章も入っている。1991 年、上海文芸出版社は『中国現代作家名著珍藏版』を出版した。名誉編集主幹は巴金である。その中に廃名の小説をすべて『田園小説』と名前付けた。それは呉中傑がえり抜き編集した。同年、陳振国が集まった『馮文柄研究資料』を海峡文芸出版社で出版された。この資料は全部で七部分を分かれている。その中に、廃名の一生資料、著作年表、著作目録など収められているほかに、廃名が創作を雑談する、文学を論じる文章は 20 編くらいも入っている。この資料は研究者に対して、とても便利なものである。1993 年、長江文芸出版社は一つ『中国新詩庫』を出版した。それは周良沛で選んで編集したものだ。その中の第三集には「廃名巻」を取り入れている。全部で 40 題 53 首の廃名詩を選ばれた。その中の 3 首は廃名の手稿であった。1995 年、新疆大学出版社は「現代名著の中小学校読本」として短篇小説集『桃園』を出版した。1997 年、三つの廃名小説集が相次いで世に問った。一つは廃名、哲嗣（人名なのか？）、馮思純で選んで編集した『廃名短篇小説集』でした。それは、湖南文芸出版社で出版された。この本は比較的廃名の違う風格と特色を持っている小説を完備に収めた。しかし、その中のある作品は廃名の長編小説から選ばれたものであるため、本当の意味の短編小説ではない。もう一つは倪偉で編集した『紡紙記』である。それは『世紀的反響』シリーズの中の一つで、珠海出版社で出版したものだ。この本は『莫須有先生伝』と『莫須有先生は飛行機に乗った後』二つ長編を完備に編集したほかに、廃名が知識人の生活と精神状況を題材にして作られた短篇も編集した。もう一冊は艾以、曹度で編集主幹として作られた安徽文芸出版社から出版した『廃名小説』である。この本には再び廃名が出版されたことがある五つ長編小説を収められたほかに、廃名が『新月』、『学文』など定期雑誌に発表した長編小説『橋』（下部）全部で七章も収められた。そして『莫須有先生は飛行機に乗った後』及びいろいろな古い新聞や雑誌に発表された六つ短篇小説も収められ、すべての作品を上下両巻にして出版した。この本は廃名の作品がよくそろっている本である。1998 年、陳子善が編纂と校訂した『論新詩及其他』を遼寧教育出版社で出版された。この本は 1944 年北平新民印書館の初版本を原稿として、人民文学出版社の

添削本を参考して作られたものだ。その中に序文・跋文と付録を回復して、そして初版本に掲載されていなかった末の四章を「集外」部分に移した。「集外」部分は『新詩問答』及び廃名が20世紀30年代に新旧詩についての編纂と校訂、通信と随筆、全部で九編を収められた。それは比較的廃名の詩論観点を完備に体现した。1998年、程光焯、王麗麗が選んで編集した『廃名集』は瀋陽出版社で出版した。この本は『禅悟五人書』シリーズの中の一つである。廃名の一部の短篇小説と長編小説を選んで収められた。同年、中国現代文学館は『初恋』という廃名の作品集を編集した。それは華夏出版社で出版した。ある人は廃名がただ30首の詩だけ発表したと言ったが、呉曉東は廃名のたくさん逸詩を発見した。彼はその詩を整理して『新発見した廃名の逸詩40首』という文章を作った。それを1998年の第一期の『中国現代文学研究双書』に発表した。1999年、中国文联出版会社が廃名の始めの短篇小説集『竹林のストーリー』と詩文集『招隱集』を影印、出版した。廃名の遺著を整理する仕事に、青年学者止庵はたくさん時間と精力をかかった。2000年東方出版社が出版した『廃名文集』と遼寧教育出版社が出版した『阿頼耶識論』は全部彼が一人で編集、校訂した。前者は1949年を下限にして、廃名の単篇文章117編(二つ訳文も含まれて)を収められた。この文集は『廃名の散文選集』と違い、一つ本当の意味の廃名散文集だといえるものだ。それはこの本によって廃名の小説が彼の散文を替え玉になるというやり方を打破したからだ。後者は一つ仏学研究著作である。それは廃名が外国の侵略に抵抗する戦争の間に黄梅に避難したときに書かれたものだ。そして、彼が『文匯読書週報』で発表した二つ考証文章は、いわゆる『廃名逸文考』(1998年7月4日)と『廃名逸文続考』(2000年2月19日)である。この二つ文章は長くではないが、でも本当にたくさん工夫をしたものである。姜徳明は『廃名文集』をもらった後に、いくつかの文章をその本に収められなかったと気づいて、すると一つ『廃名逸文小集』という補遺文を作った。それを『新文学史料』2001年第一期に載せた。2003年、広西師範大学出版社は廃名小説を集めて二冊本にして出版した。一つは『竹林のストーリー』という名前にした。その中に『竹林のストーリー』、『棗』、『橋』という三つの作品及び『紡紙記』等六つばらばらにしている作品も収められた。もう一つは『莫須有先生伝』である。その中に、『莫須有先生伝』、『莫須有先生は飛行機に乗った後』及び『桃園』という三つ作品を収められた。同年、格非は一つ『廃名小説』を編集した。それは浙江省文芸出版社で出版された。

そのほかの廃名の手稿と印刷された原稿がある。たとえば、『古代的人民文芸——詩経講稿』、『杜甫講稿』、『杜甫論』、『魯迅研究』、『毛沢東同志著作的言語は漢語文法の規範である』、『美学講義』、『新民歌講義』、『称揚篇三百首』など作品が極めて早く整理して出版してもらいたいのだ。ある著作は、たとえば、『廃名小説選』(人民文学出版社1957年版)、『青年に魯迅を話す』(中国青年出版社1957年版)のようなものは、出版されたことがあるが、再び出版される価値もある。廃名の遺著を収集、整理、出版するという事は、短いうちにすることではない、一人だけの力でできることでもない、それは、一つ大きな系統的な工程である。皆さんの共同の努力によって完成できることである。1999年4月28日、呉小如は『中華読書報』に再び「廃名全集が早く出版して欲しい」と呼びかけた。そして学术界と出版界から積極的な反響をもらった。聞くところによれば、関係がある会社と研究者たちは現在『廃名(全)集』を編纂しているそうである。その本が早く出版されて欲しいね。

### 三、作品研究

#### (一) 小説

##### 1、期間を分ける問題

廃名小説の創作は1922年から始め、1948年に終わるまで26年間続いた。彼の小説の分期(類)について、現在に持っている見方は以下のような四つである。

(1) 時間の期間によって、廃名小説を三つの段階に分ける。凌宇はそうだと思っている。彼(凌宇)は廃名小説の創作の第一段階が『竹林のストーリー』を代表として分けられると認める。そのほか、『桃園』、『棗』も含まれている。第二段階は『橋』を標識にして、芸術において自分の表現テクニックをさらに発展できた段階だと思われる。第三段階の代表は『莫須有先生伝』である。しかし、この段階になると、廃名の創作がそろそろ終わると前もって示されている。(凌宇:『「桃園」から廃名の芸術風格の得失を見る』、『十月』1981年第一期)

(2) 人物の像を標準にして、廃名の小説を二つ大きなシリーズに分ける。一つシリーズはチャーホフとセルバンティスの作品の影響を受けて、作られた『四火』、『文公廟』、『莫須有先生伝』などのような作品である。このシリーズの小説はほとんど少し怒りっぽいユーモアや皮肉の書き方で世の中の俗っぽい風景を現す。もう一つシリーズは陶淵明と初期のハーディー、エリオットの影響を受けて書いた小説である。たとえば、『洗衣母』、『竹林のストーリー』、『菱蕩』、『橋』等小説である。この種類の小説はすべて「まだ汚濁している社会で異化されていない」中国宗法制農村のおじいちゃんおばあちゃん及び男女などを書かれている。この種類の小説は廃名の創作個性をもっと強く表されるかもしれない。(楊義:『廃名小説の田園風味』、『中国現代文学シリーズ』1982年第一期) 楊義はこの分かり方の代表人物である。

(3) 作者の名前を標準にして、小説の創作を前期と後期二つに分ける。すなわち「馮文柄」時期と「廃名」時期である。この見方を持つ論者は大体李健呉の観点を受け継いだかもしれない。(李健呉:『「画夢録」——何其芳先生作』、『咀華集』文化生活出版社1936年版)

(4) 年齢を標準にして、廃名の小説創作を二つ時期に分ける。この見方を持つ論者たちは、30歳を限界にして、30歳前に廃名小説が清涼優美な農村光景を表し、風格が一致している。『橋』は代表として、「木陰小説」だといえる。30歳後に風格が大いに異なり、『莫須有先生伝』が代表として、「驢背小説」だといえる。(張可喜:『木陰の下と驢の背上——廃名創作の二つ時期を論じる』、『河北学刊』1996年第2期)

以上の四つ分け方は、それぞれの出発点が違うが、それらの足掛かりが同じである。すべて廃名のそれぞれの段階、それぞれの時期、それぞれの種類の小説の風格特徴をもっとうまく表したいからである。

##### 2、仏と禅の精神

中国現代作家の中に、宗教とそれぞれの関係を持つ人は多くないと思う。たとえば、蘇曼殊、李叔同、許地山、豊子愷、瀟乾、氷心などである。しかし、宗教と関係が緊密であり真実である程度から考えれば、李叔同(弘一法師)以外には、恐らく廃名だということかもしれない。

論者はほとんど、廃名の禅宗意識の形成は地域文化と胡適、周作人から得た啓発、及び自分の脆弱、敏感な心理気質・憂鬱寡黙な性格と関係があるだと思われる。廃名の禅宗思想は前後の進展変化がある。いわゆる「観心看浄」から「無相、無念、無住」の段階までの変化である。(楊厚均:『廃名創作中禅意の形成と遷り変る』、『湘淵大学学报』1999

年第3期) 禅宗意識は廢名小説の審美に対しての一つ重要な(方向・指示)である。(張永:『禅宗: 廢名小説の審美向度』、『文学評論シリーズ』2001年第2期) 禅宗教義及びその宗教思惟は廢名小説の審美理想と審美方式に対して一定の影響があると思われる。廢名の小説は「郷土生活の貧しさと苦しさを表すために書かれた物ではなく、郷土の貧しい生活からある悲しさを超える濟度・英知達観・自然に親しい・人生を楽しむような生活境界を迫及する」ような特徴がある。廢名小説の語句は突き出ていて険しいであり、そして、語の構成法及び文書の書き方など特別な言語風格を持っている。それはちょうど「直感性・暗示性・悟り感」のような文学の思惟方式からの反映である。(李俊国:『廢名と禅宗』、『江漢論壇』1988年第6期) 姜雲飛は廢名の小説の禅学子細が主に以下のようなところで表されていると思う。それは「一即多、多即一」の宇宙意識、直覚悟りの思惟方式及び「橋」を中心となるイメージ符号からの超越と審美である。(姜雲飛:『廢名小説の禅学子細』、『浙江師範大学報』1991年第3期) 陳国恩は廢名小説の創作は禅宗芸術から主に三つの精神影響を受けたと思う。その一、禅宗空諸一切及び「自娛——解脱」という目的である。それは廢名が動乱期に消極・俗世間を離れる願いを満足することができるからである。その二、「万法尽在自心」である。つまり時間と空間を主観化にすることだ。三、言語の面白さを追究するためである。(陳国恩:『廢名小説と仏禅精神』、『貴州社会科学』2001年第一期)

禅宗は廢名が特殊な歴史時代において一人の中国知識人として独特な精神の発見だと見られる。禅宗意識はその小説からの表しは、20世紀20年代に主体価値をあげる個性を解放する思潮が三四十年代になると残された影響と反響である。(この文章はうまく訳せない) 同時に、反動政府からの文化高圧政策の統治において、廢名の独特風格を持つ創作は、比較的な安全の創作策略だと思われる。(張永:『禅宗: 廢名小説の審美向度』、『文学評論シリーズ』2001年第2期)

### 3、事柄を叙述する策略

廢名研究について、作家であり学者である劉勇(格非)は一番力を入れ、貢献していた人である。彼の博士論文『廢名小説の事柄を叙述する研究』は今まで廢名小説を中心になった唯一の専門著作である。彼は当代の事柄を叙述する理論を用いて、廢名の作品について深く入りの解説をしていた。しかし、残念ながら、この専門著作は現在までまだ出版されていない。

劉勇は、廢名の小説は内部と外部二つ事柄を叙述する部分があると述べている。外部の事柄を叙述する部分の仕組みは基本的に伝統的な物語のモデルを踏襲している。例えば、発展する事件の前後順番、物語の因果連続、時間の推進などのあるところから表せる。この点は『柚子』、『工夫を凝らしている封筒』、『竹林のストーリー』のような廢名の初期の作品において明らかではっきりしている。これらの小説の中に、ストーリーそのものは、事柄を叙述する目的であるので、伝統的な事柄を叙述する内在の調和が相変わらずにとれている。『菱蕩』、『桃園』のような一類小説は、内部と外部二つ事柄を叙述する部分が同じような重要性を表し、両者に優劣がないような組み立てを形成した小説である。ストーリーそのものの以外には、元々二次的な地位である叙述の手段はだんだん叙述の目的の一つになる。廢名は小説を叙述する仕組みにおいての「新しい格式」は『橋』、『莫須有先生伝』までようやく一つもっと極端化な形式として出てきた。この二つ作品の中に、外在の叙述仕組みはただ一つの見せ掛け、一つの路標、一つの口実であるとともに、一つの障害にもなる。それはストーリーの進んでいく道自身がもう叙述の主な目的から、背景と手がかりの地位までに下げたからである。廢名小説の内在の仕組みが表現したいのは一つ一つ

詩意を満たす風景の一部分、記憶の瞬間と人生の感遇である。廃名小説の仕組みの配置は根元から伝統小説の話を叙述する形式を転覆した。そして、元からある骨組みも打破し、文体の境域をさらに広く開拓した。したがって、小説の芸術表現手段を豊かにした。廃名の叙述方式の中には、伝統的な線形時間をまだ完全になくされていない。彼はその伝統的な線形時間を縮めただけだった。表面の叙述時間はほとんどじっとして動かないものであるが、ストーリーを組み合わせる場面と細かい点はわざと長く大きく引き伸ばされた。それですべての叙述空間に立ち込めている。廃名は現実と物理時間の創作に対して束縛があることを無くした。それは自由に想像できることに対して便利さを上げられた。廃名にとって、時間というのは根元から一つ混沌の状態に置いているものである。なので、それは従来に叙述に対して全然障害ではないものだ。過去、現在及び将来は明らかな限界一つもない。それらはすべて歴史の中の一つ一つ「瞬間」に属するもので、同じ地位を持っているのだ。しかし、歴史は始めがあって終わりが無いものである。廃名は時間と歴史に対して特別な理解を持つこそ、何の拘束もなく自由にその間で行き交うことができる。劉勇から見ると、一人の文体家として、「廃名が現代小説歴史において特別性を持っている。その特別性は彼が異なる風格を持つことから表されるほかに、さらに重要なのは小説の形式と仕組みにおいて卓越した創作力があることである。」(劉勇:『廃名小説の時間と空間』、『当代作家評論』2001年第2期)

#### 4、文体の特徴

廃名小説文体の特徴は、主に、詩化・互文性・晦渋という三つの方面から表される。

詩化というのは、たくさんの論者たちが廃名小説文体の特徴に対しての共通の認識である。廃名小説が創作した「純粹的な芸術風格」は、詩化的な人生・人生の詩化である。廃名の文章に書かれている生活は「著者が見聞きした実際の人の世ではなく、想像した空想の写像である(写される空想の世界の意味だと思う)」。(灌桜:『橋』『新月』1933年2月1日第4巻第5期)この生活は(空想の世界の生活)彼の心を通して「蒸留」・浄化・美化された生活である。詩化や絵画の境地をいっぱい満たしている。この詩意の人生と対応することができるようになるために、廃名は小説に詩体の形式を与えた。彼は唐の人が絶句を書いた手法を手本として、自覚的に中国古詩の情調と境地を小説に引き入れた。筋と文の流れの間には、跳躍するのが多い、空白のも長い。言語は高度的に簡潔、洗練され、省浄(簡単・短い)、含蓄がある。詩の深みのある味わいや美感を満たしている。(馮健男:『談廢名の小説創作』、『中国現代文学研究シリーズ』1985年第4期。朱亜寧:『論廢名小説の文体特徴』、『四川師範大学学報』1992年第4期)

廃名小説の文体は濃密で強烈である「互文」の特徴を持っている。現代作家はいつも自分の作品が唯一無二の創作性文本として見られるように、自分の作品の互文痕跡をわざとなくしたようである。ところが、廃名は相手の裏をかく。彼は小説を書くときに、いつでもどこでも一つ文書と関係があるもう一つ文書をはめこむ。それは文書と文書の間に関連するような関係を作るためである。それによって、明らかに小説の互文性を現すことができる。廃名が引用した文書の範囲はきわめて広い。その中に、古文・古体詩・外国語・方言・俗語・ことわざ・童謡・演劇のせりふなどたくさんある。本当に東洋と西洋の物寄せ集めのように何でも含まれている。(倪偉:『「乱写」と転覆:「莫須有先生伝」の叙述解読』、『中国現代文学研究シリーズ』1993年第3期)

廃名小説は従来に晦渋、難解という特徴によってよく知られている。周作人は以下のように述べている。「晦渋である原因は主に二つある。それは思想が奥深いと思想の混乱である。しかし、簡潔な文体あるいは珍しい文体こそ刺激(味わい)がある作品になれるか

もしれない。」(周作人：『「橐」と「橋」の序文』、『知堂序跋』、岳麓書社1986年版) 廢名小説の晦澁を具体的に言うと、彼(周作人のこと?)は小説文体の面の原因によって晦澁になったと認める。呉小東は廢名小説がなぜそのような晦澁になったかという、以下のように述べた。それは廢名が小説の中に「個人化」特徴を持つ「意念と心象」を処理しようということと直截な関係があるからだ。(呉小東：『「言語の筏子」を背負う——廢名小説「橋」の詩学解説』、『中国現代文学研究シリーズ』2001年第1期) 全体から見ると、廢名小説の晦澁を形成した原因は、簡省・跳躍・用典・互文など文体の特徴以外に、その小説の思想内容の特徴と関連がある。廢名小説の禅道子細が濃い、地域特徴が鮮やかであり、民族色彩が特に目立つことはすべて廢名小説を理解しにくい原因になる。そのほかに、周作人の美学趣味から受けられた影響と関係もある。しかし、根元の原因は廢名自分の独特な「文学は即ち夢である」という文学観、及びまだまだ「晦澁」である審美感と持っているからである。(陳建軍：『廢名小説晦澁之因探析』、『黄冈師專学報』1997年第2期)

## 5、影響についての研究

ここに述べている影響というのは、二つ方面を含まれている。一つは廢名が受けられた影響である。もう一つは廢名(の作品など)によってあげられた影響である。廢名は魯迅、周作人など同時代の作家から影響を受けた以外に中国伝統文化と古典文学も彼の思想と創作に対して最も重要な資源として存在する。彼は仏経道蔵、六朝文章が好き、そして、陶淵明、庾信、杜甫などの作品も好きである。特に、李(商隱)詩温(庭筠)詞から受けられた影響が一番大きかったかもしれない。同時に、ジョージ・エリオット、ハーディー、シェークスピア、セルバンティス、チャーホフ、バイトライル?など外国の作家、及び彼らの作品でも、廢名に対してとても大きな影響をあげた。廢名(の作品)によってあげられた影響は「とても大きい、とても深い、とても広い」。そして「廢名から影響を受けられた作家たちの名簿もたくさんある。」(汪嘗祺：『「小城にはストーリーがない」序文』、『小城にはストーリーがない』、作家出版社1986年版) 資料からみると、小説のほうは、沈从文、蕭紅、凌叔華、孫犁、汪嘗祺、何立偉などたくさんの作家たちに違う程度の影響をあげた。散文の影響を受けた作家は、梁遇春、何其芳などである。詩のほうは、卞之琳に対しての影響が、多分一番激しかったかもしれない。(馮健男：『夢中彩筆創新奇——廢名の文学生涯と小説芸術』、『廢名小説』[上]、安徽文芸出版社1997年版。江弱水：『廢名』、『卞之琳詩芸研究』、安徽教育出版社2000年版)

以上の二つ影響について、深く細かい研究をした学者が少なくはない。たとえば、廢名と沈从文に対しての比較は、たくさん研究者の共通の話題になる。楊義は元々文化の視角から「廢名と沈从文の文化情趣」について論述、分析した。彼は「沈从文が宗法制の農村文化に対しての取向は廢名と同じ方向を採用している。」と認め、そして両者は全部伝統的な静観の態度によって世界を観察すると述べていた。しかし、沈从文の文化参照系は廢名より少し広めている。彼(沈从文)は農村文化と異化された都市文化を対立するものとして描写した。(楊義：『廢名と沈从文の文化情致』、『文化衝突と審美選択』、人民文学出版社1988年版) 杜秀華たちは、廢名と沈从文の小説の中に、「夢」の成分がしみこんだと認めている。そして、彼らの小説は人性美を充分に展示することを通して、「夢中の田園」が創造した。小説の思想内包からいうと、廢名の田園には「隠れる禅趣」がある。沈从文の田園には「神性を現す」。「夢中の田園」の領土からみると、廢名の視野が比較的狭い、沈从文の題材は比較的広い。二人の夢を書く手法も少し区別がある。それは「一人が『趣』に偏るが、一人が『情』に偏る。一人がわざと『間隔』を作るが、一人が『融通』を追求する。」(杜秀華、許金龍：『夢中の田園——論廢名、沈从文の小説の人性母題』、



『沈陽師範学院学報』1999年第4期)

当代の作家たちの中に、何立偉が持っている内在のものはたくさん廃名と接近する。楊劍龍はこの現象に気づいた。彼はその二人の間に似ている部分を具体的にスケッチした。そして、彼らの相違も確か把握した。彼は廃名も何立偉も「古風で質朴である社会にある平凡の人生を固執に描写する」と認めて、「いろいろな生きるための悩み煩うことに対しての叙述から悲しい息を現れる。」と述べていた。彼らは全部厭世の傾向がある。「一つ『死』の寂しさに対して憧憬する。」しかし、哀愁についての表現は違う。廃名は「相変わらず農村生活の調和と静についての描写に力を入れる。」何立偉は「抑えつける気持ちと困惑する心で小さい都市にいる人々の悲惨命運を描写する。」表現手法から考えると、二人は全部境地を求めた。そして「空白」を重んずる。しかし、廃名は「いつも古典詩詞を引用する。それとストーリーにある情景が互いに引き立てあう。」何立偉は「いつも古体詩の境地を化用する。それに一つ情調の詩意の微光が作品をすっぽり包む。」創作理論では、両者が「夢の真実さと美しさ」まで自覚的に達した。文学は苦悶の象徴だと思う。二人は全部外国文学の影響を受けたが、何立偉がチェーホフ、蒲寧、川端康成、カミュ、カフカからもっと影響を受けた。芸術風格の走行から考えると、二人が全部詩化小説の極致からユーモアと皮肉な方向へ転じて、「詩の味を隠れ、でたらめな色を突出する。」(楊劍龍：『寂しい詩神：何立偉、廃名小説の比較』、『中国現代小説研究シリーズ』1990年第4期)

錢理群は、廃名が中国「五・四」時代以後、西洋の思潮によって呼び覚まされた中国現代知識人から「ドン・キホーテの雰囲気」を発見した人だと述べていた。「廃名は中国現代知識人の『ドン・キホーテの雰囲気』についての発見は、さらに自我に対しての発見或いは自我の覚醒である。』『ドン・キホーテ』から深い影響を受けた『莫須有先生伝』と『莫須有先生伝が飛行機に乗った後』は「中国現代のドン・キホーテ」の「帰ってくる」主題を体現した。この「帰ってくる」というのは、「現代工業文明に対しての追求から中国が農民を主体とする伝統的な農業文明に回復した」方面から表された同時に、「伝統言語(伝統的な思惟方式、心理、意趣、審美習慣……)への帰依」についての言語試験から表される。(錢理群：『廃名：現代ドン・キホーテが帰ってくる』、『精神的な煉獄——中国現代文学は「五・四」時代から抗戦するまでの歷程』、広西教育出版社1966年版)『莫須有先生伝』は『ドン・キホーテ』から深い影響を受けたことについて、学术界が以前から論じたが、しかしほとんど結論のような話であった。夏元明が文章を書いて深く細かく両者が精神と技巧など方面においての異同を述べた。彼は以下のように述べていた。二つ作品は思想内容(「社会と人性に対しての批評の内包」、人物イメージ(「理想型の主人公」)など方面において似ているところがあるが、文体と遊ぶような筆致、「筆を下ろすなり本になる」仕組みは、それらの共通の審美特徴になる。「莫須有先生伝」は20世紀30年代にある中国の『ドン・キホーテ』だと言える。」(夏元明：『「莫須有先生伝」と「ドン・キホーテ」の比較研究』、『黄冈師範学院学報』2001年第6期)

## (二) 詩歌

一つ面白い現象がある。廃名は小説家であるが、しかし、小説より彼は自分の詩歌に対してもっと重視する。彼は新詩を評論する。その中に、自分の詩歌創作について、専門的に紹介したこともある。そして、彼は自分の詩歌と卞之琳、林庚、馮至等詩人の詩と比べる。彼らの詩がいい、「私の詩が及ばない」と認める一方、「私の詩に彼らも及ばないところがある。それは私の詩が自然的な偶然的な全体的な(断片的なものではない)ものであり、書かなくてもまだ詩になるものだ。彼らは詩人だから詩を作る、そして詩を作ることを職とする。それは私が小説を書くと同じなものだ。」と自信を持って述べた。(廃名：『「粧

台』及びその他』、『談新詩』、人民文学出版社1984年版) 廐名は新詩人の姿で文壇に登場したが、でも彼の主な仕事は小説を書くことだ。廐名詩歌の業績について、各人によって見方はそれぞれ違うので、一致した結論に達することができない。卞之琳は廐名が「詩人だといえる」と認めるが、「馮(廐名)の小説は馮詩よりもっといい」、そのほか、「彼の分行新詩には、残存する貴重な文化財でもあるが、しかし、考えの筋道も段落もはっきりしていない。彼の詩には言語の面は、古今のものばかりでなく中外のものさえ混ざっているが、古典、西洋のものを自由にこなせないで、文章がごつごつしてほとんど難読する。自由詩であるにもかかわらず、リズム感や旋律感など詩として持つべきものが見当たらない。」(卞之琳:『馮文炳選集』序文、『新文学史料』1984年第2期) 楊義は「小説は詩と雑談文よりいい、叙情小説は風刺小説よりいい、短編小説は長編小説よりいい」と述べていた。(楊義:『廐名小説の田園風味』、『中国現代文学研究シリーズ』1982年第1期) ところが、蔣成瑀は異論を持っている。彼は「文学史学家たちは一貫として廐名の小説、散文しか紹介していないが、実は、彼の詩は小説、散文より劣らない。もしかしたら、その価値がもっと高いかもしれない。」と述べた。(蔣成瑀:『廐名詩歌解説』、『中国現代文学研究シリーズ』1989年第4期) 台湾詩人の痲弦は「現在にある一番『前衛』の見方によって廐名の詩を読んでも、依然として、第一流のものであり、一番現代のものである」とあくまで主張している。(痲弦:『禅趣詩人廐名』、『中国新詩研究』、台湾洪範書店1982年版)

大勢の人たちは、廐名の詩が少ない、一生の作品が多くても30首余りだと思っているが、実は、この見方は一つ資料不足のせいで引き起された誤解である。呉曉東は廐名の40首逸詩を発見し、そして1992年馮健男から筆者に書いた手紙によると、廐名の詩作は30首だけではないと認められた。一体どのくらいあるか、彼は具体的に言っていなかった。しかし、1931年10月17日、廐名は『「天馬」詩集』という文章には「私は今年の三月に『天馬』という詩集を作った。詩は全部で八十首余りある……そして、今年の五月の『鏡』を作った。その中に四十首くらい詩を入れた」と書いた。

1958年1月26日、彼は『談談新詩』に以下のように述べた。「昔でも、私は新詩を書いたことがある。1930年にたくさん書いた。二百首くらいに達している……」同年、彼は、新しい民間歌謡体で『歌頌篇三百首』を創作した。これによって、廐名は作った詩が少なくとも500首くらいある。

廐名の詩歌創作は、20世紀20年代から始め、終わるのは50年代末であった。全体から言うと、20年代に創作したものは、たとえば、『小孩』、『洋車夫の息子』など、写実に偏っているものなので、分かりにくかった。30年代から現代へ変わっていて、詩がだんだん洪くなっていたから、一番理解し難しかった。外国の侵略に抵抗する戦争が終わった後に、詩風はちらつくようになっていた。たとえば、『鷄鳴』、『人類』、『真理』などのような詩である。解放した後に書いた詩作は、民謡体に近い。内容ははっきりして読解もいらずに分かりやすかった。したがって、みんなは30年代の詩歌を解説する必要があると一致に思っている。この時期の詩歌は廐名の最高な業績を代表することができる。現代派の詩歌の中に、独自の道を切り開いていくものだ

廐名の詩歌は小説と同じように、分かりにくい。30年代のとき、劉半農は「廐名は即ち馮文炳である。彼は短詩が数首くらい書いたが、解説ができるのは一つもない。」と述べたことがある。(『劉半農日記(1936年1月6日)』、『新文学史料』1991年第1期) 半世紀の後に、艾青も廐名の詩が「小説よりもっと推量しにくい」と言った。(艾青:『中国新詩六十年』、『艾青談詩』、花城出版社1984年版) 現在、まだたくさんの論者は廐名の詩歌が「本当に一つ黒箱」だと思っている。(蔣成瑀:『廐名詩歌解説』、『中国現

代文学研究シリーズ』1989年第4期)一つ「夢中にさせ開きにくい『黒箱』」である。

(羅振亜:『夢中にさせ開きにくい『黒箱』——評廃名の詩』、『中国現代文学研究シリーズ』1999年第2期)この黒箱を開くために、孫玉石を中心とする詩を解説する学派は、一つ一つ廃名の詩を解説することを通して、彼の詩にある真実の内包を明らかに示すためにがんばっている。(孫玉石:『中国現代詩導読1917—1938』北京大学出版社1990年版)蔣成瑀は廃名の詩は案としてその全体の「読解学」の理論骨組みに入れた。彼は、廃名の詩を解説するならば、「伝統的な『知人論世』の解説法に限らず、詩歌の本体(即ち言語、仕組み、意象、体式)に対して深く研究する必要がある」と述べた。(蔣成瑀:『廃名詩歌解説』、『中国現代文学研究シリーズ』1989年第4期)馮健男は「廃名の詩を読むと、まず解を求め、そして、徹底的に理解しようとはしない」と述べた。解を求めるのは基礎である。徹底的に理解しようとはしないというのは超越である。(馮健男:『人静山空見一灯——廃名詩探』、『文学評論』1995年第4期)

朱光潜は嘗て以下のように述べたことがある。「廃名は敏感に富んで、苦慮するのも好き。禪家と道人の特色をよく持っている。彼の詩には一つ奥深い背景があるが、この背景は分かりにくい背景である。」(朱光潜:『「文学雑誌」篇後記』、『文学雑誌』1937年6月第1巻第2期)この「奥深い背景」というのは一体何でしょうか?馮健男は「これは禪の静観、心象、頓悟、机鋒と李商隱詩・温庭筠詞の感覚、幻想、色、意象などの現在的な融合になるものである。」と述べた。(馮健男:『人静山空見一灯——廃名詩探』、『文学評論』1995年第4期)現代主義の詩風をもつ詩人の中に、廃名の世界観、詩学観は、ほかの詩人のようにほとんど西洋の現代哲学、美学思想から影響されたと違い、彼は東洋の古い哲学、禪宗や美学から影響を受けた。王沢竜は「禅理、禅趣、禅思から廃名の詩を解説しないと、その詩の奥深いところまで進入することができない。」と述べた。彼からみると、廃名の詩の意義はしっかり観照現実(意味がちよっと分からないの)の濃さによって表すことではなく、宇宙、生命本質の哲理に対しての悟りによって精意を求める。廃名の詩は弱めることを衣として、静寂、清らかで薄暗いの境地美を持つ。同時に、彼は「廃名は禪から詩に入るが、でも、詩を通して禪を書くことではない。伝統的な禪詩のように水中月、鏡中花、理路に関わらなく、不落言筈に追求する境地、詩思という特徴は依然として違う。」と述べた。(王沢竜:『廃名の詩と禪』、『江漢論壇』1993年第6期)

#### 四、廃名研究の誤区と荒区

(廃名研究についての理解がずれているところ・まだ研究されていないところのことだと思ふ)

まとめて言えば、最近20年の間に、廃名研究に対して、深さ・広さに関わらず、観点・方法・数量などそれぞれの方面から、一定的な研究成績があった。しかし、冷静かつ公平に論じると、廃名に対してのたくさん研究はまだ魯迅、周作人、李健吾たちが廃名についての定論を借りる段階に止まっている。実質的な突破が多くない。甚だしきに至っては、誤区に落ちた研究もある。この誤区は主に以下のような二つ方面がある。

1、廃名は禪宗思想の影響を深く受けたことについて、反対意見がない事実である。しかし、その問題は、廃名が禪宗の弟子もではなく、仏教徒でもない(廃名の文章に書かれた莫須有先生は「禪宗大弟子」、「仏教徒」、「大乘仏教徒」だと自称するが、実はそれと廃名も禪宗弟子或いは仏教徒とぜんぜん違う。)彼の小説、詩歌を読むときに、まるで参禅するような感じするが、彼は作品を通して、禪を論じる・禪を話す・禪を論ずつもりではなく、ただ禪宗致知の方式を参考するだけである。そして、それは芸術思惟方式と有機的に結びつけるようになって、文学創作を思考することになる。ある研究者は仏教と禪宗の

教義を無理に適用して、廃名の作品を図解しようとしているが、それはいかにも牽強附会に見える同時に単純化・神秘化しすぎ、俗っぽい嫌疑もあるかもしれない。そのほかに、熊十力の仏学観によって廃名の作品を分析する人でもいる。実は、廃名の仏学観と熊十力の仏学観は完全に対立の観点を知らない。ある人は、「禅宗の角度から入らないと、廃名作品の真諦を見つからない」と断言した。実は、禅宗はただ廃名作品の一つ審美方向である。これによって、廃名が文学史上において地位と価値について比較的な公証的な、客観的な評価を上げられる。

2、廃名の小説を言及すると、たくさんの人たちは「詩化的な小説」、「田園小説」を用いてその芸術風格を概括する。「詩化」或いは「田園化」は廃名小説の「純正な創作風格」を代表する。相当の作品は、たとえば、『浣衣母』、『竹林のストーリー』、『河上柳』、『菱蕩』、『橋』など作品にはこの風格をよく表された。しかし、「詩化」或いは「田園化」は廃名小説の芸術風格のすべてではない。廃名小説の芸術風格は質朴から詩化へまた散文化への変化過程がある。彼の早期作品（たとえば『講究的封筒』、『少年阮仁の失踪』、『追悼会』など作品）の現実性が強いが、詩の息吹が余りない。彼の後期創作は、たとえば『莫須有先生』、特に『莫須有先生が飛行機に乗った後』を書いたときに、『橋』など小説にある詩の特徴をすべてなくして、ユーモアや諷諭的な書き方で人世の俗生活を書く、或いは「実録」の方法を取って人生の原始状態を再現する。言語は簡潔で洗練されなくなり、相当な珍しい書き方になる。したがって、廃名的小説は「詩化小説」あるいは「田園小説」だという観点は、少なくとも片面的な言い方で、廃名的小説を全体風貌を概括できない観点になるかもしれない。

現在、廃名研究の領域はまだ狭いので、たくさん荒区がある。それはこれから研究たちは開墾する必要がある。たとえば：

1、一生の事績。20年間の間に、廃名一生の事績を研究する文章は大体十篇があり、専門著作は二部がある。（郭濟訪：『夢の真実と美——廃名』、花山文芸出版社1992年版。馮健男：『私の叔父廃名』、接力出版社1995年版）これらの文章或いは専門著作はほとんど簡略的に書かれた。その中に、廃名の自伝性作品によって書かれたものもある。それは想像する部分が多いので、廃名の一生の状況について全面的に、詳しく真実に理解するのが難しい。廃名の一生は住んだことがあるところが主に四つがある。（1）黄梅（1901年—1916年、1937年—1946年）（2）武昌（1916年—1922年）（3）北京（1922年—1937年、1946年—1952年）（4）長春（1952年—1967年）。今まで、廃名は北京と長春に住んでいたときの状況は、皆さんが一番多く話している。主な代表的な文章は金訓敏の『不断進取、有所作為：——懷念馮文柄先生』（『吉林大学学报』1982年第6期）、馮健男の『廃名は戦後の北大』（『新文学史料』1990年第1期）がある。しかし、廃名は黄梅と武昌にいたときの活動状況については余り話していない。特に、外国の侵略に抵抗する戦争のときに黄梅で避難した経験を研究したのは、ほとんどない。このときの生活は廃名の一生にとって、多分一つ大きな転換かもしれない。彼の思想、文学観及び後期の創作に対して、非常な影響をあげた。（按：略）

2、長編小説。たくさん研究者は廃名の短篇小説に関心を持っているが、長編小説について研究する人が少ない。研究としても、たぶん『橋』だけかもしれない。このような現象になった原因はたくさんある。その中に、ある論者が廃名の長編小説に見下げると直接名関係がある。ある人は、廃名の『莫須有先生伝』、『莫須有先生が飛行機に乗った後』という二つ小説が実に失敗した作品だけではなく小説さえも言えないものであると述べている。廃名は一人探索精神を持つ小説家である。この探索精神は彼の短篇小説から表されるだけではなく、彼の長編小説の創作からさらによく表現されている。彼の三つ長編小説

の風格がそれぞれ違い、それぞれの風格を持っている。『橋』は綺麗な「雲」みたい、『莫須有先生伝』は泣き喚く「風」みたい、『莫須有先生が飛行機に乗った後』ははっきりしない「水」みたい。廃名の長編小説を研究すると、比較的彼の全体的な創作芸術風貌を理解することができるかもしれない。そして、彼のそれぞれ段階において違う風格の特徴と前後の変化になる原因について分かるかもしれない。

3、散文創作。散文は、廃名作品研究する中の一つ荒区である。過去及び現在、たくさんの人たちは、廃名の散文か小説によって、彼の散文創作を談論する。小説が散文かになるが結局小説であるので、厳格的な意義の散文ではない。廃名の全体の創作からいうと、散文は程前起後の位置になる。「もし散文がなければ、以前に『橋』と『莫須有先生伝』を書いた文学家廃名とその後に『阿頼耶識論』を書いた哲學家廃名と連続することができない。」(止庵：『關於「廃名文集」』、『博覽群書』2000年第1期) 廃名の散文は晩明の竟陵派と似ている。「隔」のような感じ。「廃名の散文を概観すると、『質朴な談話によって、深刻な意味を表す』といえる。または『渋みと簡単味があるのこそ、読むに耐える』と言う。この二つ言い方に、前は胡適の『五十年来の中国文学』から引用されたものである。後ろは周作人が『「燕知草」跋』に書かれているものである。」(馮健男：『廃名——傑出の散文家』、『江漢論壇』1988年第6期)

#### 4、詩歌理論。

廃名の詩論『談新詩』は一つ高い學術の価値を持つ専門著作である。廃名は新詩と旧体詩を比較する同時に、自分の詩を作る体得と結びつけて、「五・四」時代から20世紀30年代までに代表性がある新詩人たちが創作するときの成敗と得失を緻密的に解剖分析したとともに、自分の独特の新詩主張も提出した。彼は、新詩に「詩の内容と散文の言葉」がある必要があると述べた。彼の新詩観は鮮明である民族特色を体現するとともに、中国新詩が現代性対しての求めも反映した。今まで、彼の詩論を評論する文章はたぶん潘頌徳が書いた『簡評廃名詩論』、馮健男が書いた『廃名談詩と小説』、孫玉石の『廃名の新詩観』、『中国伝統詩現代性対しての呼びかけ——廃名新詩本質及びそれと伝統関係についての思考』だけである。廃名の新詩理論及びその価値は、まだまだこれからの研究が必要がある。

5、仏学思想。外国の侵略に抵抗する戦争の期間に、廃名は黄梅で避難した。そのときに『阿頼耶識論』を作った。それを作った動機は熊十力の『進唯識論』を否決し、仏学の本意を討議するためであった。この本は近代思想の核心——進化論を攻撃し、古代聖人と古代文明を擁護することを旨として書いた。廃名は進化論が「全世界での妄想」、「中国のいくつか流派の人たちはすべて進化論から中毒された」、「仏教の真実は『相對論』を示すためである」だと思う。その後、廃名はまた張中行が編集主幹として作った『世間解』という雑誌に『佛教有宗說因果』、『体と用』など文章を發表した。「佛教の因果は体を説するものであるが、世人の因果は用を説するものである」ということを主張した。廃名の仏学思想は自ら体系になり、独自の風格を持つ。彼の創作のように、本当の知識と透徹した見解がある個人化色彩を富んでいるようである。廃名の文学作品を解読するときに、彼の仏学思想を研究しなければならない。しかし、残念ながら、今まで、廃名の佛学観について論じる文章は一つもない。

## 自序

『莫須有先生伝』をまさに正々堂々と出版しようというところで、序文を作ってくださいと挙国一致で要求された。それは『莫須有先生伝』が分かりにくいからだ。(私に) 困らせるものだ。

およそ他人のために伝記を書くと、その人のすべての事跡を読者達に教えるべきではあるが、もし分かり難いというならば、それは莫須有先生自身がもともと分かり難い人だからだ。そんなわけで『莫須有先生伝』も分かり難くなるわけだ。

そうであるが、しかし分かり難いのは優れたところではないかと思う。それこそ読者は細心の注意で伝記かみしめることができるようになるのではないかと思う(玩索の意味は玩味で思索であるかと思う)。

そして、かみしめて得るものがあれば、人として生きることが必ず面白くなる(中身がある)ものである。世の中で本来そんなうまい話があるものではないが、私が今日序文を書きたくないのは、読者にとって無益だと恐れるからである。

しかし、昨日苦雨老人がこの『莫須有先生伝』のために書いた序文を見たら、さっそく一言言いたくなってきた。と言うと、実は『莫須有先生伝』に対しての不満だったのだ。

私が喜びに溢れながら伝記を書き終わろうという時は、最初書き始めたころよりこの伝記に対して感興がなくなっていたことを今もまだ覚えている。それは『莫須有先生伝』に対する信仰をだんだん失っている一つ確かな証拠である。

書く途中の一時期、かつて「庖丁解牛」の話を借りたかった。その話は「臣之所好者道也、進乎技矣」である。これは私が『莫須有先生伝』に対しての褒賞だと思ったが、その後少し躊躇している。私が思いがけなく人の運命を占う易者のように把握を持っていると感じたからだ。生年月日が分らないと、吉凶など思いも及ばれないのだ。

天下の事は宝くじや賞に当たるようなものであるなら、君や僕は何万分之一の希望もあるかもしれないが、ただし、刀をとるのは十九年間にならないと、庖丁先生の話をする勇氣もない。ところが、これは私から老人に対しての少し抗議であるが、読者達はあまり気にしない方が良く思う。『莫須有先生伝』は実際に思索の価値があるものだと思う。これで序文である。

# 『莫須有先生伝』

## 第一章 姓名 年齢 本籍

「莫須有先生という人物は実は世に存在せず、勝手に居もしない人物をでっち上げたのではないか？」と聞かれたら、

「そのとおり。退屈だったし、仲間と共に『駱駝草』という雑誌を創立したので文章を書かないといけなくなった。そのため、そのようにしたのです。」

というわけで、できるだけ私の『莫須有先生伝』を書き始めたほうがよいだろう。長い間、莫須有先生のために詳しい伝記を創り上げたかったのだ。

もしかしたら、以上の話を聞くとわけの分からなくなる人もいるかもしれない。莫須有先生という人は本当に実在しないのか？

疑問がいくつかあっても、そのことについて考えないほうがよいだろう。私が「莫須有先生はいる」と言っても「いない」と言っても同じことではないか。騙しさえしなければよい。それに、騙しても騙さなくても、私自身のことであり他人にはかかわりないことだ。

だから、別人のことを言う勇気はないが、この藁の老人は、もし今日私の文章を読んだなら、恐らくすでに押し量ってくれるだろう。「彼は彼のために伝を作るのだな。」と感嘆しているだろう。

昨日私は、老人家が横になっているのを見た。

——「どうもあなたは気をもんでいるね、ただ彼という一つだけの文字のためだろう？」とため息を一つき、老頭子は横になって、こんなふうには休んでいた。

老人家はこんなふうには彼のオンドル（朝鮮半島の伝統的な床暖房の仕組み）の上に横になり、枕もまったく使わない。（こういう場面を見たら）私が楽しめない。だから私は、今日も同じだろうと思う。

私がいったい何を話しているのか？「年取った漁師」なんて、「オンドル」なんて、この物語はいったいどこで起こっているのか？

この年を取った漁師は誰なのか？（と聞かれたら）あなたは本当に面倒くさい人だなど思う。もし本当に知りたかったら「索隠」してほしい。私はこの「索隠」学説に対して一

生懸命に反対してもいい。ただあなたは道理が分かればよい。何事によらず道理があるものだからだ。

話に戻ろう。

最初私は、先生は「王」という名前だと思ったが、その当時の私は、先生が本当に好きだった。北京大学から卒業したことよりも好きだったくらいだ。

なぜなら先生がかつて一冊の小説を書いたことがあると知っていたからだ。しかも、およそ偉大な小説は大概の場合作者の自伝であるそうだ。それが偉いかそうでないかは実は問題であるが、ここでは触れないほうがいい。

その小説は先生のデビュー作である。主人公の姓は「王」、名を「道生」という。「王」は妓楼（遊郭）に行くような人間を極度に憎んでいる人である。王道生はただただ煩悶するという内容だ。

別に意識したわけでも無く、ただ覚えていただけだが、何年前のことだったか、ある日私は警察署に、とある親戚を探しに行くという用事があった。警察署の所属ははっきりと覚えていないが、とにかく韓さんの家の付近だった。

私が何となく名簿を開いて、何となく目に入ってきたのが「王道生」という三つの漢字だった。この名簿にある名前は何なのか親戚に聞くと「この名前は妓楼を捜査するために使うものだよ」と答えた。

戒厳令が敷かれていた期間中、嫖客は全員名簿に記載する必要があった。「あなたのマンションにも帳簿のために人が立っていませんか？」と聞かれたら、そうね、同じような帳簿のために警察に怒って、彼は、私には職業がないと言って、ほとんど拳骨を振り上げそうだったことが何回かあった。

しかし私がすぐに捉えたのはこの「王道生」だった。きっと莫須有先生にまちがいない。私はこの王道生とその王道生が完全に関係があると信じる理由がある。

その後、彼にはきちんとした住所があると聞いたことがある。牧童は「三槐堂」を遠くから指して、この王の字が確実である。

あなたには教えるが、莫須有先生のこの住所は実は田舎にある。なんと叢の老人が農村へ行って訪問した後に、三槐は四槐の誤ることを結んで、実はこのように堂上で掛かる額があるわけがないが、ただ門前に四本の槐があるだけだ。

その上、彼は大家の家半分を間借りしており、同じ中庭にもう一人の主人が住んでいる



というわけだ。三槐堂が悪くなくても莫須有先生に属していない。私は突然、派出所でのその大発見は完全に私の理不尽なことだと気づいて、自分でおかしく感じて笑ってしまった。

莫須有先生の年はまたすこぶる言いにくく、先生は時々、自分でも自分の年齢がどうだったかわからなくなった。

先生はまるで、田舎で最もロバに乗って駆けるが好きなようだ。その地方にはロバを駆る人が本当に多い。全て石橋にしゃがんで待ち、すべて先生を知っている。(ここの主語はロバを駆る人だと思う。)

莫須有先生は杖をついて大手を振って立ち去った(山道であるが、坂を下る必要もある)(を高くあげて)、天地の間はしばらく変えて、一群の役畜はすべて一本の縄にも引き延ばしてすぐに走ることを承知できない、やっぱり人類と禽獣はあまりに同じ意味を持っていない。

あらゆる事が瞬く間に起こるように、鶏口となるも牛後となるなかれ、馬は天を仰いで鳴くため、風は自らのため不景気になる。

莫須有先生はとり囲まれもとてもひっそりとしている。彼が手を振ると、おじぎをするように、また地上最高の政治家が舞台に立って演説するように、「一頭だけほしい。」と手を振って言った。

そしてロバに乗るとすぐに行ってしまった。背後のやつらがあれこれ取り沙汰して「この老先生は悪くないね。」と言った。

これは最も冗談を言える人なのだ。先生は彼をわかっている。彼はいつも先生をあやしていたから。

「彼の名前は何か？いつも彼が一人で歩いてきて歩いていくことを見えるが。先日、たまたま聞くとところによると捜査隊が人を尾行していたそうであるが、この人じゃないのか？もしこの老先生を言っているんだとしたら、私は、彼は悪くないいい人だと思う。」

莫須有先生は風に吹かれて喜くなり、喜んで教鞭を執る人だが、貧しくてもおごり高ぶらず、好礼に富んでいるので、私は思わずにっこりした。

編集者は注意してほしい。これは先生が『四書』を間違っただけではなく、彼は「貧しくてもおごり高ぶらない」というのがとても貴重だと思っているからだ。

ある隠者がかつて以下のような話をしたことを覚えている

「文人は鼻持ちならない態度を持つが、それはあまり道理を知っていないからだ。」

「貧しくてもおごり高ぶらない」とはこの意味である。

しかし、ちょっと油断して、「こちらの老先生」と呼ばれると、突然体の向きを変えてき

て耳を捉えた、ほとんど馬にぶら下がるに近かった、「人はどうして私のことを老先生と叫ぶのか？」取るに足らない心は恋愛を忘れられないようで、いっぺんに完全に失敗してしまった。

夫を悲しむ。あなたが間違えた、莫須有先生はどこに年が若くなるに成り済ましたか？あれはどんなに自殺する事と同じなのだ。

先生はロバの背中で嘆いた。（ここの駙背而傷逝というのが意味よくわからない。）

「もし私が一人の老先生であるというのなら、私はどんな様子で居るべきか？それにはきっと胡……がいるのだろう」

そこで私はひげをしごと、もうなくなった。莫須有先生はひげが見えないわけにはいなくて、天下人のひげはすべて事を言えない。

いずれにしても行方がわからない。歩いて途中で自分を見えなかつたら、もちろん行方が得られない。

一人の女性が城下を出て自然の景色を散策したいときには、自然と手にはかばんを持ち、いつでも鏡を開けて紅をつけることができるようにする。そしてまた「しかしそれでは誘拐される」と恐れる。

「私はただみっともないことを突かないだけであるのを望む。」一つの大きい問題がまたかるやかに解決された。

「私は長い間、父母にあっっていなかった。私には兄と弟が一人ずついて、そして年老いた姉も一人いる。姉は聞くところによるともう四十を過ぎているが、しかし私はいまだ若い娘のような感覚を持っている。私達はまだ若い。私の故郷がどんな様子か、私はもう完全に忘れてしまった。」

そして先生は完全に子供に戻った。思わず袖を高くあげて批評家に涙を見せずに舞台上で泣くことと同じようである。

莫須有先生は杖を下ろしてばんという大きい音を立てると、ロバは驚いて止まってしまって、どうしようもなく歩きたくなったのだ。

「莫須有先生、あなたは怖くならないでください、私があなたに代わって拾うから。」

「それを捨てたほうがいい、もう要らない！」

「この杖は悪くない。お年寄りにあげて使ってもらえばいい。花椒木で作られたもので、妙峰山から買って来たのではないか？いくら使ったか？」

以上のようなことによると、この伝記は完全に信用を失った。莫須有先生が現実の人になったのではないかと心配がある。

先生は話の腰を折ると「何が妙峰山なものか！妙峰山がどこにある？私はまったく知らない！これは私の親友からもらったものだ！」

「昨日私のロバであなたの家に行った人から？その老先生が悪くない。碧雲寺に住んでいて、四月の初八に妙峰山に行くため私のロバを借りたかったが、あいにくその日私はちょうど市内へ食糧を持っていく必要があった。」

「おかしいなあ、あなたたちはすべての人を老先生とよぶのか。」

思わず先生の顔がほころんだ。

彼の親友とは一人の若いエッセイスト（詩家）である。スーツを着ることや蝶ネクタイをつけることがとても速く、先生は彼に対して極めて愛敬に堪えず、顔を合わせると必ず握手する。

「恋愛するのは最も重要なことなので、畏縮しないでください。女性に対して、いつも熱心で誠意を持っていることが必要です。あまりに如才がなくなるとはいけません。」といて、親友を非常に困らせた。

もう一つは梨を加えると、あることがあった。それは更に若い、とある詩人に関することである。ある日、先生はわざわざその若い詩人を訪問して、彼の家のテーブルの上に一枚のKeatsの写真を置いた。

先生は自分が正しいと思い、面白がって口から出任せに「この貧乏人もスーツを着るのか！」と言った。先生がそのKeatsのことを実際に知っているかどうか私は心配だ。

先生はその若い詩人の様子に気づかずに話して笑っていた。先生のかわいい友達が傷ついたことをまったく知らずに。

若い詩人は、兆昌の毛織物号で服を注文したが、手付け金を出しても服を取り出せなかったらしい。翌日には友達の婚礼に参加しなければならないというのに。

先生がいったんこのことを知ったら、絶対眠れないだろう。

「神よ、今後私は一切話をしない！人間になるのはどうしてこんなに難しいのだ。私はいつも迂闊な間違いをしてしまう！」

## 第二章 莫須有先生、農村へ行く

先生がなぜ農村へ行くのか。これも人それぞれ一説を持っている。農村の捜査隊も探したが結果がよくなかったので、やめにするほかない。

叢の老人は彼を訪ねた日、互いに会話するのを控えていた。互いに意気投合した心持ちだったからだ。彼はただ「農村では市内よりずっと安い。」とだけ言った。

私たちは少し傍観することができるようで、しかしそれではそんな能力の優れた人なら

この一つ俗世間の原因のためなんか。知らない人が無責任なことをいう必要はないが、知っているのは詳しく言うてみるがいい。

さて、莫須有先生が農村へ行った日のことを語ろう。

先生は城下から出ると二頭のロバを調達した。一頭に莫須有先生が乗り、もう一頭にはもちろん先生の旅装を積んでいる。箱一つと布団だ。そのほかに先生は紙箱を一つ抱えていた。紙箱の中では何かが動いているようである。

ロバの運転手は箱に何が入っているか知らないので——莫須有先生はあまり歩道橋で曲芸をする人に似ていない-----

「先生、この紙箱になにが入っているんだ？こっちによこしてくれ。箱を全部そっちの荷物を積んだロバの背に縛ろう。数十里の距離があるからロバで歩いて1、2日かかる。手に持っているとあまり便利じゃないだろ？」と先生の手からとろうとしたが、

「これは私の目覚まし時計だ。数年前に買ったもので、引っ越しも何度もしたが私はいつも朝に目が覚めることができないと心配なので、ずっとこの時計を持っている。

ほかの事は余りいえないが、時計をいつも大家に取られないようにしている。」

先生は少し疲れた様子で元気がなかった。彼の何人かの大家はすべて年老いた女たちだが、今朝あの「東京」の纏足が太鼓をたたいて入って来たのは、先生にとってはちっとも嬉しくなかったようだ。

「早く荷物をくくりつけてくれよ、俺は向こうで昼飯にしたいんだ。」

「俺もすぐ出発したくてたまらない！もう半日くらい立ちんぼだったんだ。この箱はどうする？自分で手で持っていくか？——って、あんたが話してくれないと焦るんだ！俺はあんたより更に焦っているんだよ！」

なんと先生はさっきから何も話していなかった。ただずっと立って考え事をしていただけ。このロバ曳きの大男は確かに焦っているようだ。唾が飛び散るほど話し、先生は一步後ろへ下がった。

先生は実は道理を考えていたのだ。依然として落ち着いて両手を腰にあてて気をつけしている。若いときは、ともすればけんかをするが、今さら怒りっぽくなくなったわけだ。

「これは私の時計だし道の途中では揺れるので、自分で持ったほうがいい。」

城門の外は激しく込んでいた。ラクダを曳くもの、肥えを積む荷車を押している人、そして何もせずただ棒を持って立っている警察、そして可哀想に鞭で駆られる豚の大群も。それぞれは豚であり、人々は土である。

「先生は？」ロバ曳きAは、急いで少しよけると、ほとんどに一人に近く、首を伸ばしてみたが、とにかく伸ばしたくてもこんな灰色の群集の中だからあまり伸ばせない。骨と皮ばかりにやせこけて独りぼっちのようで、立っているとまるで地の子のようである。

ロバ曳きB、彼はあまり焦っておらず、先生の周りをよく見ている——

「先生、私たちは行こうか。」

それで先生は彼の背後に鼻を覆って急いで言うと、

「私はこちらにいる。」

そこで先生は、彼が長い間ずっと住んでいた城門と離れないといけなさと感じて、なぜか彼も分からなくなった。

(走了还是不大走。非敢后也，驴不进也。意味があまりはっきりわかりませんが。)

歩いてあまり進まない。後ろになる勇気がないせいか、ロバが動かないのだ。ロバが動きたくないわけではないが、人が込んでいるのだ。

一人の占い師が杖をつきながら人込みを歩いていた。先生の乗ったロバを曳く漢は、突進すると「どけ！」と叫ぶと、盲人は杖をついて動かなくなった。

そして盲人は頭を上げ横目で見やると、

「あなたの態度は、もう少し温和になったほうがいいね。」とつぶやいた。

「そうだ、人はいつでも温和なほうがいい。占い師、私たちが通れるようにあなたが少しばかりよけて歩けばね。」先生はともて得意になった。

このロバを曳く男が少しの教訓を与えられたのだ。先生は彼の背中が曲がったままに、ロバの縄を引いて（前のほうへ進んだ。）占い師も得意になって一歩よけた。

「占い師、私の股下は愚鈍なロバだ。もし四頭立ての立派な馬車だったら必ずあなたに古い礼儀をとろう。しかし今はこの愚鈍なロバが私を投げ捨てるかもしれないのだ。」

「あなたはあなたの道を歩いてください。」

「占い師、あなたもあなたの道を歩きなさい。」先生は歩きながら、頭をもたげたり下げたりしてもう向こうへ行った。

「ロバを駆る漢は、まさかあなたが見えなかったか？その盲人先生のほうがどんなにか

落ち着いているよ。私は彼その態度が好きだね。」

「私には見えないと？私に見えなかったら私も盲人なのか？——おっと、馬鹿野郎このロバ！どこに行く？」

ロバは暗渠の方へ歩いていくようだ。男が尻の鞭を強くすると、先生を驚かせた。あいた口がなかなか閉められない。

そこで誰にも知られないようにおよそ半里地（250メートルくらい）を歩いて、依然として（百工居肆以成其市）。

先生は突然無表情になって、彼は彼がもう立ち上げたと思ったが、実は傍観者にはよく見えるように、猫背の様子で、転ばないかとひやひやしている。そして目の前の赤旗や緑旗を持っている関所を守る守衛に、

「ね、ね、少しゆっくりしなさい！ゆっくりしなさい！——私はこの二匹ロバだけあるよ。」

「私はこの二匹ロバだけあるよ」まで聞くと、先生はもう怒りをこらえてじっと我慢しているように見えた。

「しまった、尻尿（おしっこした）の時間だけなのに。」

見ると、何もいわず首尾もかまわず全部いっぺんに向こうまで飛ばしたくてたまらない人たちだ。すべてこの鉄の柵の中に閉じ込められている。なんだ、ここは鉄道や大通りの十字路なので、電車がそろそろ来るようである。

先生がじっくり見ていると、例のロバを駆る漢の一人がいなくなった。周章狼狽してもう一人のロバ曳きに聞くと、

「ロバ曳きよ、あなたの友達は逃げたのか？なぜまったく注意しなかったのだ？」

この貴兄が口をとがらして捜し、先生も目を凝らして見回すと、やっと安心した。逃げたと思ったロバ曳きがそこで小便をしている。

「人はいつも気軽に自殺してはいけない。」

これはどういうことだろうか。もしかしたら莫須有先生は最近首をつろうと思ったことがあったのか？私たちは本当に彼を分析したほうがいい。

しかしてちょうど汽車が来た。周囲の顔が喜びに輝いた。すぐ向こうへ通ることができそうだが、莫先生は断崖に臨んでウマの手綱を引き締めようとして、まるで彼が猫背だということを忘れたようだ——

「彼らは皆戦争のために山西へ行く兵だ。しかしどうしてこんなに多いのか。一台、また一台だ。あなたたちの座る席さえもない。あなたたちの視線はどんなに気が弱くておどおどしているようだ。父として、母として、空が、人が、吾は尔を思うせいで尔がこんな極めてのものになるのがあるやないなのだ。さっき、私は城門から出たばかりの時に、一

人が一群の豚を駆ることを見た。たたいても（戦っても）城に入れず、通り抜けられる穴もなく、私の顔には土がつき、気分がとても悪かった。今彼方たちがまた私の目の前に通っていく、ああ、兄弟たちは！ああ、神様、先生が失礼した。

彼の心が苦痛して、彼らはみな先生の同胞だ。彼の意味には、いくつか豚の意味を満たされているようだ。私はこのように思わせざるを得ない。

一つ道理を教えさせた。私は昔、いつも理解できなかったことは、人はなぜ兵になるか？ということだ。明らかに死ぬだけだろう。しかし彼らは生きる道を求める人なのだ。」

人間は多分、常に生きていく必要があるだろう。役畜も生きていく必要がある。しかし、私たちは人類で、困っている。そして家畜を飼育する。これもひとつの生きる道だろう。自分で気を使わなければならない。

これはどんなにか残忍なことだ。私たちは確かにつらいのだ。困るのは生と死の間この一区切りの道のりをどう歩いているかということだ。歩いていきなさい。あなたたちの目には、気が弱くておどおどしているのが見えるよ。

戦争に至っては、生も死も同じだろう。銃弾が飛んできて何でもないだろう。ただ一頭の野獣がほえるだけだ。この声が悲しいよ。実際には、馬牛羊、鶏犬豕、この六つ種類の動物が人に食べられるとき、全てこのようにほえるわけである。

神よ、兄弟たちよ、運命よ。今もこれからも、吾知免夫（この意味はあまりはっきり分からない）。私はこれから努力したいのだ。

先生はわれを忘れて一粒の大きい涙を落とした。

しかし、柵を扉にした門を開いたら、肩と肩が触れ合い、引きも切らず、莫須有先生は歩いても入れない。

田舎に着いた。先生は非常に疲れた様子だ。居眠りして、ロバが歩くと上下に揺れ動いて、ロバ曳きさえも心配させた。「先生、寝付かないでくれよ！あんたあまりロバに乗ったことないだろう。このままロバがあんたを投げ落としても俺は知らないよ。」と大きい声で言った。

しかし先生は目を閉じて答えない。もう一人のロバ曳きは先生の様子を見て、「本当にしようがねえな。」と嘲り笑った。

「あなたたちは私の悪口を言ってないで、休ませてください。あなたたちは少し遅く歩ければいい。この広々とした野原に至る所に人の声がぜんぜんないから、人の魂が静かに休みやすくなる。」

「この前、ここで事故があったよ。」

驢馬漢Aは一人言を言った。この話を聞くと、先生の眠たげな目を開いて――

「事故があったと？どんな事故だった？」

「二人の強盗が農夫の五十元を奪い、さらに刀でその農夫の足を割ったのさ。」

「嘆かわしい。私の懐にも十元の質札が三枚ある。これは全部この半年以内に修行する

ための資金だ。」

先生は彼がもうとまったと思ったが、思わずに彼の胸を触った。しまった！この二人の強者に明らかに三枚の質札を持っていることを教えてしまった！事態はコレまでになっていたが、小さい声で叫ぶと、

「あなたたちは私をどこまで運ぶか？私はぜんぜん自主が出来ないと良く知っている。あなたたちに任せざるを得ない。ほら、あなたたちは完全に自信を持って、一步一步前へ歩いていく。私が止まりたくても、あなたたちのロバをどうすることも出来ない。」

ロバ曳きB「先生、見ろよ、前から嫁入りのかごが来た。」

先生「驢漢B、あなたはあなたの友達より頭がよいね。彼はともすれば私を驚かせる。あなたを見ると安心できるよ。ああ、この嫁入りのかごは、広々とした野原で走るにはさびしいね。少しも賑やかでない。誰の花嫁さんか良くわからないね。彼女おなかが空いたかな？もうどのくらいここまで歩いたのかな？」

B「先生、おなかがすいたのかい？俺たちはまだ道の半分くらいしか歩いていないよ。」

先生「私はおなかがすいていないよ。この花嫁さんの背が高いか低いかよく分らんね。もし美人なら、どうしても背が高いほうがいいなあ。それは凌波微歩、羅袜生塵という審美要求にかなうからね。もし人間が皆いかにも小さく見えるなら、それは悲しいことだ。」

B「先生、背が小さくてもいいことがあるよ。服を作るときに材料を節約することが出来るから。」

「驢漢B、でたらめを言うな！それ以上言うと殴るよ！」

先生は極めて悲しんでいる。なぜか分からないが、もしかしたらある娘さんは先生を愛していると疑うほどだ。彼女が少し小さいかもしれない。

実は何もないところに差し掛かった。平白的な孤路のそばに五本の懐に抱くことが出来ない木がある。先生はその木陰を見ると、元気を奮い起こしてひと息出した。

先生「よしよし、着いた、着いた。」

「まだ5里もあるよ！」

「あなたたちはどうしてそこで止まらなければならないんだ。私はこの木の下で昼寝をするから。この太陽が大嫌いなのだ。私は三枚の質札を持っている。本来は五枚あったはずだが、狡猾な人に騙されて二枚なくなった。いつかまた市内へ行くときに、彼と清算するつもりだ。」

ただ心配なのは、彼と会ったら、彼はまたお世辞を言い、私がだめになることだ。私は強者に対しては怖くない。私はコレラさえも怖くないから、強者なんてぜんぜん大丈夫だ。

あなたたち、私の話を聞いて早く止まりなさい。こんなに大きな涼しげな日陰を離れがたいだろう。万一、誰かが隙をみて私の財物や命を奪われたら、まるで衣服を作る職人は張飛が寝ていたところに彼を殺したようになると、天下の事はすべて終わってしまうのだ。

大したことはない。実を言うと、あなたたちは今日もう疲れたから（教えても良い）、



何日の前に、私はまるで一つ妙計を思い出した。ただ私の家内に言いたくないだけだが。

どうせ意味がないことだと思うから。それは私の家内と一緒にどこかへ一回遊歴するに及ばない事だ。一緒に海を眺めて、跳ぶと、登天（高い水準に達すること）と同じような落ち着く感じだ。

二人が手を繋いで、天下の青年男女のために一ついい物語を残したい。私にとっても、名声が確実に得られるものだ。

情死！それはただ自殺したからだ。いつも心配なのは、私は生計のせいで（自殺する）と思われることだ。その原因だったらなかなか英雄になれない。

妻よ、あなたは今どこにいるか？あなたは頑張って自分を大切にしないといけないよ。人間はいつも自分が楽しむようになるのが良いのだ。私は今ロバに乗って田舎に向かって歩いている。目の前はちょうど一つ良い休憩場所なので、あまり心配しないで。」

どうしたの。木下に一匹の野獣がいるみたい、狼なのか？莫須有先生はまた立って、頭を前へ突き出した――

「おい、あなたたちは、気をつけて、歩かないで、その木下にどんな物？私たちの生命を奪わないで。」

「先生、あなたはまるで狂人だ。ただのラクダだよ。何をびくびくしてるんだ？」

「ラクダ？そうだ、それはラクダだ。もう一人はあそこで手を伸ばして、足も伸ばしているようだね。」

なるほど、あなた達は近くなってそれがラクダだとはっきり見たからだ。一本、二本、三本、四本、五本、この五つ木が大きいから、遠くから見ると狼だと思ったよ。

ああ、鶴が空で飛んでいる。彼の翼が私の心を遮る。私は今までこのような良い木を見たことがなかった。こんなに高い木の幹、こんなに青くて茂る木の葉っぱ。私がただ願うのは、山の上の私の家はこの木のように――あとどのくらい着く？」

「五里だ。」

「そうしたら、消息を伝えてください。先生の家まであと五里だ。道のそばに五本の木がある。そうしたら、木が人で伝えられる・人が木で伝えられる・名に背かない。」

### 第三章 花園奇遇

山の上での歳月は私たちの生活と異なる。しかし『莫須有先生伝』は確かな歴史ではない。

その中の多くの内容は、莫須有先生の日記から写し取ったものだ。そのわけの分からない日記には、日付けは書いているが年月を書いていないものもあるし、年月日全部が書いていないものもある。多くのものは、めくってもめくってもただ一つの番号だけしか書かれていないものもある。

だからこの『莫須有先生伝』は四時の順序を追わないしかない。全てのことが意にかな

って、何でも言う話を信じればよい。

しかしまず、「莫須有先生の大家」を紹介しないとイケない。その価値は絶対に先生より少なくない。この、「先生の大家」がいなければ、ひょっとするとまるでこの『莫須有先生伝』も知るよしもない。

先生はもちろんあるが、しかしその伝を作る人はおそらく私ではないかもしれない。先生と、先生の大家さんついてだが、出会いはどうやら偶然だったようだ。

それはある花園でのこと。ある日、先生は徒歩で旅行していた。その花園に入り四百五十本の杏の木の下に座って休んでいた。ふと傍観して言うと、

「そこのお婆さん、あなたはそこでしゃがんで何をしているの？もし大小便をしているなら、確かにすべきじゃないことだ。こんなに良い杏の森では静かにしないとイケないよ。人の世のことで邪魔する必要がない。それにあなたの行為は恥ずかしいかもしれない。」

「わたしがこのようにあなたに語りかけたことだけでも、私のポリシーに反している。話を口から出したらあまり良い感じをしない。私はきびすを返して頓着しなかったら良かったのに。」

しかし、もし文書を作るとなると、心を込めるのが当然だ。万一、一時にうまく書けない場合は、口からでまかせに言うと、人はあなたの原稿が印刷に出すのを待っているから、気軽に取り扱ってもよい。

欠点も長所もあることを見せて、どうせそのようなものだから、古人がわずかな時間も惜しんだことにあわないなんてない。

しかし、人がこのような誰も見られないところで不裁なことをするのはあまりよくない。まるで人生に対してすまないと思うことと別ではないから。自分が年をとると、特に気をつけないとイケない。」

「やあ、どこから来た学生か——貴方はぶつぶつとなにを言っているの？私はもうこんな年になって、あなたに見られるなんて恥ずかしいわけないさ！」

そうは言っていたが、この小用を足していた老女は顔を真っ赤にしていた。彼女は恨めしさと恥ずかしさで怒り出した。彼女は最も対面を重んずる人だから。もし彼女が「私の先生」をひどく愛していなかったら、さらに少しお金のためではなかったら、むしろ死んでも、こんな「乞食すること」なんて絶対しない。

彼女はほかの人のために知恵を貸してあげたい人だ。特に、将来、先生のために知恵を貸すのが好き。このただ一つの話のために、いくつかの注釈をしないとイケない。

一、「私の先生」というのは、お婆さんの旦那さんである。まず、莫須有先生に紹介してあげたときに、こんなふうで紹介した。「莫須有先生、私の主人は役に立たない人だ。」。それを聞いた莫須有先生は躊躇し、なかなか答えられない。

誰かを言えばいいか分からない。賢いお婆さんはすぐ理解した。やつれた顔に風格がまだある。年がもう五十過ぎたが依然として含蓄がある。遠くから莫須有先生に（主人が誰か）見分けせざると得ない。言う、「私は彼の妻で黄氏である。」実は彼は彼の庭の隅に立っている（この蓋という意味がよく分からない。）。

莫須有先生はたいへん丁寧に堪えない。

二、「まるで乞食のような事柄」というのは、彼女が今花園で打駱駝草（縛った駱駝草）をしていたということである。駱駝草というのは駱駝が食べる草だ。ところが、この習慣がなぜ『駱駝草』になったというのは、理由くらいないではないが、それは完全に私の功勞ではない。それは私のある友達の優れた才能のおかげである。私はただ座禅を組んで、田舎では「打駱駝草と言うことがある」と黙認するだけだ。

打駱駝草というのは、この地方では一般的な生計の一つである。打駱駝草が百斤で四十枚。はかりに百斤を載せるためには、お婆さんの背に多分百二十斤は載せないといけない。莫須有先生の大家のお婆さんも五十斤は背負えるが半日間はかかる。隣人の「三脚猫・太太」と共に重荷を背負って石炭店へ歩いていくのが老女の慣例となっている。その石炭店では五頭の駱駝を飼っている。

この三脚猫太太の由来を言うととても長くなるので、またチャンスがあれば、紹介する。読者はただ留意してくればよい。三脚猫太太は往々にして、彼女の隣人が一人で町に座って帰ろうとしない状態に追い込む。

ある日、一人の「学生」が彼女が町に座って泣いていることを見てすぐに莫須有先生に知らせた。三脚猫太太は駱駝草を売って六十枚をもらって家に帰った。莫須有先生の大家のお婆さんは十八枚だけもらった。まれに二十枚もらえることもあるが、三脚猫太太はいつも大声で叫んで大股に歩くから、彼女と並んで歩く人は「先に行ってください。私はしばらく休む——苦しい。」と言えるだけだ。

三脚猫太太は先に一歩進んだだけですごく遠く離れた。しかし、この苦しいよと言う話をまったく気にしていない。三脚猫太太は駱駝草を背負って石炭店に入るとすぐ腰掛けに座って、彼女の一対豚娘？（たぶん大きい乳房の意味）を現わにして、「早くはかりを持ってきて、私の駱駝草をはかりなさい。」と大声で叫んだ。

莫須有先生の大家のお婆さんはそっぽを向いて、（三脚猫太太）を本当に気に入らない様子で「そら、あなたがどんな様子か！女どもだよ！」と言った。女だからそのようなする必要はないではないか。この女どもは確かに細かいことを気にする人だ。石炭店の店主すらこんなふうにした、「あなたのうまい汁を吸わないよ、はかりが公平だから。」この地方である歇後語（ことわざ）がある、それは「駝煤的（直接の意味は石炭を背負う人だ）」である。意味はあなたがおやじを認めないことだ。それなら駝煤的店主はどういうような（すごい）人物か。

先ほど水筒で水を牛のように飲んだので、三脚猫太太はのどが渇いていなかった。その行為がまた隣人の評価を見下げさせた。「もし私がお金があるところの水を絶対に買わない。」と心の中でつぶやいたが、駱駝草をおろし、石炭店の入り口で座った彼女はのどがかわいてきた。お茶を飲みたい。

彼女が家にいると、飢えるせいで死んだらつまらないことだが、お茶を入れるのが大事だ（とよく考えている）。しかし、しばらくいいお茶を飲んだことがなかった。

一息ついて「店主、私のもはかりなさい。」と彼女が言うので、店主は彼女のもはかり

た。

彼女が一番好きなことは買い物だ。比較で目方を見積もるのが好きで、一斤ほうれん草を買うときでも、まるでいつも自分のはかりを取り出すようなものだ。往々にして野菜を売る人は彼女に売りにたくない。彼女の家の前に寄っても、あまり大声で叫びたくない。

主人が家に戻ってきたら彼女はすぐ泣いた「野菜を売る人でも私たちに軽蔑しない。」しかし、今は物を売なのだ。物を売るとき、彼女がいつも気前がよい。

たとえば、彼女の家伝の一对の銅仏様を太鼓打ちに売ったときなどは、太鼓打ちがお茶を飲みながらいっぱい話を言ったので、たった百二十枚だけで銅仏様を買えた。主人が家に戻ると彼女を叱った。彼は三里以外のところで働いており、一ヶ月八元をもらえる。しかし給料は未払いだ。

彼の、このようなこと（物を売ること）については、彼女より態度がきっぱりとしている。祖先から受け続けたものを太鼓打ちなどに売ってはいかんと彼女を叱り、しかも「城内に持って行って、外国人に売ったなら、いくらになるのか知っているのか？」とさらに怒鳴った。すると彼女は腰が痛いと言われ二日飯を食べなかった。

しかし、今は駱駝草を売っているから、もし親戚に見られたら恥ずかしがることだ。そして、彼女はとても疲れて、のども渴いて立ちたくても立てない状態だ。物売りというのは（誰かに）ものを売らなければならない。売れないし、その上何ももらえず帰ってはいけない。

いくら値するかというと、このとき、彼女が確かに惜しまない。だから、何斤の駱駝草を背に背負っているか、彼女はまったく頓着していない。石炭店の店主は「お婆さん、今日のあなたの駱駝草は全部で四十一斤だ。」四十一斤だけだ。四十一斤だと十七枚だ。

手に入れて見ると、「今日はどうして小さい銅貨をもらったの？」「お婆さん、私は少し多く払った。もし別の人だったら、十六枚払うだけさ。」

しかし、ただこの小さい銅貨がお婆さんに悔しい思いをさせた。彼女は立ちたくても立てない。「これはまったく乞食のようなことだ。」ようやく立ちあがると店を離れ、火焼を一つ家を買って帰った。

「人間はなぜご飯を食べるのか？何も食べなくても悪いのか？」と彼女はいつも言っていた。彼女は食料をあまり無駄にしていないが、彼女の主人はたくさん食べるのだ。彼女はただお茶をいっぱい飲んでる。

この段階でようやく関係をはっきり紹介できた。したがって、莫須有先生はこの四百五十本の杏木の下にずっと座っていたのでのども渴いてきた。しかし、彼は木登りはしたくない。彼は頭上の大きな粒を口に落としてほしいと思っていた。「やれやれ、残念ながら私の口はおちょぼ口じゃない、それはとてもおいしいよ。」話がまだ言い切れない内に、莫須有先生にびっくりさせた――

「莫須有先生、とても苦いから杏を食べないほうがいい。無駄に一回思わないでください

い。」

「あなたは先ほど私にいっぱい言われたお婆さんじゃないか？先ほどの羞恥をご自分のせいではなく私のせいにしてしているの？あなたは復讐したいか？あなたは私が莫須有だと分かっているの？これは必ずその文章を作るやつが字句をいじくり回したことだ。彼は両国が交戦することを知っているから、私の代わりに先に、私の名字を知らせた。」

「莫須有先生、私はあそこに座ったまま、あなたをしばらく見ている。大変すいません。あなたは私の大きい学生（ここの学生の意味は多分息子の意味だと思う。）とまるで同じような年齢である。顔かたちも似ている。」

「それは違うよ。私は南の人だが、あなたは北の人だ。似ているわけではない。ただ私は広々した野原のような性格を持っているだけだ。」

「やれやれ、私の死んだ小さな（息子）の話を言わないが、私のその大きい（息子）がもし生きて居れば、今ごろ先生と同じ高さだ。十歳になった年に、息子は死んでしまった。私と主人は残されてこんなに苦しい目にあっている。」

その日、私は駱駝草を売って戻ってきて、歩けないので、少し道で休んでいた。自分はまるで泣くのが好きだが、ある小学生が学生かばんを持って家に帰る途中に、私に向けてよく見られている。まるで私の銀兎のような様子である。私の銀兎はほかの子供と違って、先生はいつも彼が一生懸命勉強する子だといっている。」

「お婆さん、このような話を私に言わないでくれ。私は主張がない人間だ。あなたの話について意見は言えないよ。莫須有先生のことについては私ははっきり知っている。」

あるいは私は厭世派に属しているかもしれないな。世の貧乏人にしてもお金持ちにしても、苦しんでいる人にしても楽しんでいる人にしても、さらには私の褒めた美人にしても、もし閻魔王は私の生活を再びするため、くじ引きをしてほしかったら、そのくじは一つも気に入ったものはない。

しかし、私は自分の運命を主宰するのが好きなのだ。まるで少し傲慢のようではあるがね。私は自分の皇帝だ。・・・・あ、お婆さん、しまった、得意のあまり我を忘れていた。常に自分を表現したがるのは、本当に私の浅はかさだ。あなたの前で運命のことを言って、本当に悪かった。」

お婆さんはただ「皇帝」という二字を聞いてため息をついた、

「やれやれ、『皇帝』ならもう追い払われたよ。かわいそうに、あなたたちの中で姓が馮という人に追い払われたのさ。私たちはみんな彼のことを恨んでいる。」

「私の姓は馮ではない——あなたの様子を見ると、きっと旗人（満族）でしょう。」

「旗人で何が悪い？あんたたちのような漢人は軽蔑するよ。こんなに美しいのはさすが纏足だ！」

「私はあなたとへ理屈を並べて言い争っていない。あなたが言っているのは正しい。そこで聞きたいのは、なぜさきほど私に『莫須有先生、あなたは杏を食べないほうがいい。』と言ったのか。モグラは河の水を飲んでも、ただ腹いっぱいになるだけだ。私はいつも長江や海の水を飲むのを好んでいる。花を見ることなら森のほうがいい、その森の中に立つてもその大きさを感ぜられるからだ。」

莫須有先生はそう言うと、もう一度森の上へ眺めて、頭の上にその大きい杏を口に落と

してほしいと言った。

「先生、その話をもう言わないでください。ここはもともと私たちがウマを走らせ矢を射る場所だ。皇帝が打倒されたことで、ここは花園に改造され、たくさん種類の果樹が植えられた。

ここは市内のある役所に属し管理されている。その役所から派遣された（名字が何か忘れたが）人がここを管理している。しかし、彼は特に私のような田舎者をいじめるんだ。りんごを一つ摘み取るだけでも、それは『窃盗だ』と言われて地方に連れていかれるんだ。その『盗』という字を聞きたくないもないさ。」

「貴方はまったく写実派です。すぐ事実を言ってしまった。これからはあまりこんなにしないほうがいい。私から見ると、あなたは道德家のような。少し反抗精神を持っているので。私だとあまりそのように思わない。果物を摘み取るのが盗むことといわれるなんて、その言い方はすばらしさを言い表せないほどの言葉だと思う。でも、一口嚙んだらちょっと気分を壊すだけ。前王朝の時代、東方朔という子供がいたのが知っている？彼が西王母の花園に入って、狡猾なことをしたことについて、私は本当に脚本を作りたいと思っている。もし将来成功したら是非見るのを誘ってあげる。」

「市内に親戚がいるから、誘われて市内へ一緒に映画を見に行くこともあるが、しかし私は市内へ行きたくない。いい服が一つもない……」

こんなふうに言うと、彼女はとたんに恥ずかしさを感じた。頭も足も汚れて服もぼろぼろで、こんなに美しい森に座っているなんて、そのときの彼女はすごく悲しく感じた。

しかし、誰もここで莫須有先生と会うとは考えなかった。

「まるで乞食のようなものだ。」

（話を言ったら）莫須有先生の実感に気を配らないといけない。ひざを抱いて座ったままに一粒一粒、杏を眺めている。

「莫須有先生、あなたは見たことがない。りんごが熟す時期になると、一つ一つ木にかけている様子が本当に面白い。」

「それは、さぞやりきれないだろう。」

莫須有先生は杏の森を見渡して、わざわざ北京語で答えたが、内心彼はその言い方が間違えて居ないかどうか心配だった。そして急いでお婆さんを窺ったら、彼女は賛否の意思を表さず、「あなたたちのような南のほうでは、みかんがいい。昔うちの姑がまだ生きていたときは、市内に行くといつも大きな籠のみかんを持って帰っていたものだったよ。彼女は好意を示すのが好きな人だったから。」とだけいった。

しかし、すぐ彼女は怒りだした。彼女は自分の舌が肥えているのがあまり覚えていないからだ――

「豚肉があまり買えないのは当たり前のことだけど、豚にえさをあげるのが人の仕事だというのは事実だろう。私の近所では毎日豚の世話をし、いつも汚れているんだけど。昨年の新年のとき、いつも元気な豚が突然死んでしまって――ところが、私たちはりんごを一つ摘み取っても大丈夫でしょう？なぜうちのような田舎人にいじめられるの？そのお爺さん、私はどうやら彼を眼中に入れない。田舎でこのような園を管理して、人と会って

も挨拶をしない人なんて、鼻持ちならない尊大ぶった態度を威張っているのがいやだ。あるとき、私の主人はその人に頼みたいことがあったが、彼は家にいないと奥さんを通して伝えなさいと命令した！その奥さんがいい人みたいで、彼女もあなたのような漢人で、そんなおじいさんと結婚するのが！その地で生まれその地で育ったりんごを私たちが食べてもだめなのか？」

「私とけんかしないで、それは今の気持ちがあなたと違うからだ。私、本当に帰る気がしないが、しかしどこかにいけばよいかわからない。もしいい運があればいいけど。それは、風で員外（官名）の花園まで吹かれて、ちょうど階上で刺繍しているお嬢様に見られ、そして女中を派遣して私の職業が何かと聞かさせることのようなのである。

ご縁がここまでに来て、あれそれのよい話を言っておいたほうがいい。どうして科挙の試験を受けるため都に赴くこととか、途中でどんなにつぶさに辛酸をなめて、やっどここまでに来たがしかしここがどこか知らないなどのような話を言う。そして『あなたが誰か！』と聞くと、女中にびっくりさせ、急いで階上のお嬢様に報告する。多情なお嬢様は私を引き取って世話をしてくれる。他の話は語れないが、ただ目の前のことを解説するなんて私にとってぜんぜん問題ないこと。その上、私はいい詩を作る（暇や力）があると思っっている。」

「ちょっと聞きたいが、莫須有先生、あなたはどんな仕事をやっているの？」

「最初の質問で拷問されたね。私はどんな仕事をやっているか？実は自分でもよくわからない。」

「もし何か困っていることがあるなら、もう遅いからとりあえず私の家で一日とまってください。もし嫌でなければね——ただ田舎でおいしいものがあまりないが。」

「莫須有先生の大家さんは、あなたはあまり大ぶろしきを広げないで、あなたはこの木の下に来てどんなことをやっていたか、私もう見抜いていた——私はいっぱい歩いたからもうおなかがすいた。」

「莫須有先生、あなたはどのようにして私が部屋を賃貸していることを知っていたの？誰から聞いたの？田舎へ引っ越したいの？（もしうちの部屋を借りるなら）それはお互いに対していいことだ。家賃はあまり高くない。もし先生が部屋を借りるなら、それは心から手伝ってあげたい。」

「あなたはただ一日に二回ご飯を作ってくればいい。どんなご飯でもいい、お任せする。どうせ人はご飯を食べるから。ただし私は肉が好きだ。」

「それなら、あなたの舌は本当に肥えているのね。」

「たくさんのことを言うことができるがするのがむりかもしれない。何度か固く決心して自炊したが、それは全部日記に書き留めている。一箒食、一瓢飲、しかし最後はいつもさんざんのをていたらくだ。しかもお金もかかるし。そして、到底に私が芸術家だから——私が何を言っているの？昔あるお嬢様からこういうふうにはめられたが。」

「お嬢様からほめられたの？それはきっといい娘さんだ。私さえも彼女を愛している。それは同じだ。莫須有先生、私はぜんぜんお世辞を言っていない。芸術家か、これはどんな話？私でもわからない。」

「多分、その話の意味は、人はこの世で生きて、しばらく楽しむことができるのがいい

という意味だと思う。楽しむことというと、文章を作ることだ。」

「それはいい話だ。先生、私の庭はとても静かで閑静な場所だから、文章を絶対にもっとうまく作れるよ。」

「私の文章は換金することができる。」

「それはさらにいいことだ。それはどんな文章であろうか？——うちの老爺子はもとにたくさん文案を積み重ねた。しかし、私は全部マッチと取り替えた。」

「何でもいい。まるで、私がこの森に入ってきたようなものだ。目で見えたもの、耳で聞いたもの、全部文章である。」

「莫須有先生。」

「何？」

「それはやめてください——」

「何で？」

「それはとても恥ずかしいことだ。」

「ははん、わかった、わかった——つまり、私の文章で劉姥姥が大観園で小便した話を書かないで欲しいということでしょうか？わかったよ、わかったよ。」

#### 第四章 莫須有先生、彼の名前を言うな

莫須有先生はその後、大家のお婆さんの後ろについて、これからしばらく住む家へと行った。なぜかはよく分からないが、とても心苦しかった。

まるで自分でひとしきり自嘲ようだった。しかし、西の山の落日が我々に挨拶するのは、遊んでいるのではなく、明日も同じく東から昇ると教えたいからだ。

要するに、道すがらの人から住む場所を提供してもらった。それであなたは全くの漂流者になるのだ。そして、人の世の負担や責任などは、いつも休みたいときに、その重要さが一緒に来るように感じるのだ。

ただし、徒手空拳だと、もともと千斤の重荷を背負っていることを知られても、ただ「児童は顔を合わせて知り合わなく、笑って客が何処から来るかと聞く。」ということわざのようになるだけだ。しかし先生はこういったのを持たない。先生は自分が泥棒になるのではないと恐れている。それは先生が大家の後ろについて歩いて、犬にかまれるのではないかと心配だからだった。

「ああ大家さん、人間というものは少々尊大ぶるところがあるようだ。自分が笑われるような人間だとはまったく思わない。日も暮れ道も窮まるようになると『先に古人がやったことがなくて後から来るものもない』とでもいった気分がもたげてくるようだ。彼は孤独に立つことができるが、しかし、心の中からは悲しみが沸いてくる。」

「先生、あまり人を軽蔑するもんじゃない。あたしらのような老夫婦は、日々の暮らしで、人を怒らせないようにいつも気をつけているわ。たとえば今先生は私の家を借りるけ



ど、これは私たちにとって一ヶ月に何元か頂くことだから、誰からもうらやまれたり憎まれたりはしないわ。だから先生、あなたがここで住むことに不都合はまったくないわ。ものを盗まれたり、けんかをしたりといったことは絶対ないと保証できるわ。」

「けんかなんて私も大して気にしてないよ。ただ、一番好ましくないことは、女たちが口論することだ——と、話が噛み合っていないね。私とあなたは、また違ったことについて話しているね。」

「あなたの話もそんなに分かりにくくはないさ。ただ少し湖北の方言があるみたいね。そういえば私も武昌城で七年間か八年間くらい住んでいたのよ。当時はうちの舅が湖北で役人をしていたからね。」

「そういえば、あなたはどこに住んでいたのか？あなたから聞いた話からだけだが、武昌城というその町の全体図を書かせてもらったよ。」

私はその町で生まれ育ったわけじゃないが、そこで何年間も勉強していたから、町のほとんど全部に行ったことがある。もうもう一度戻ってあちこち見たいものだ。

私の友達の多くは、みなその町で生きて、死んだ。皆この時代の犠牲者だよ。だからその町は私の記憶の中で、どんなに混乱しているかまったく分からないんだ。惨殺場所、市場、人々の顔、みな見覚えがあるのだ。私一人、慈悲な人をぜんぜん言おうとしていない。」

「さて、着いたよ。」お婆さんはそういうと、行儀よく先生に向かって笑った。先生も両手を腰にあてて直立している。まるで地球の道を終点まで歩いてきたようである。そこで立っている図はなかなか面白い。

「先生、どうぞお入りください。」

しかし入ることはしない。風景を見ているばかりだ。その笑いは世の中の最も面白い笑いである。大変いい絵が書けるようだ。

「私は只ここで立つだけでも極めて豊かであることだよ。」

「もし涼みたいなら、ここの石に座っておくれ。お茶を入れてくるから。あんまりそんなぼんやりした顔をしないでおくれよ。ちょっと見てもかなり哀れだわ。」

お婆さんは少しいらいらしているようだ。眉をしかめているからだ。そしてよくよく先生の顔を見た。（慈母の手中線、旅人の体上衣。）先生の、そのかわいそうにやせた骨と皮を全て見ていた。

「あらまあ！先生、あなた、どうして首にたくさんの傷があるの？」

「昔のことだ、あまり言わないほうがいい。どうやら私も九死に一生を得た人なのだ——私についての話を詳しく言っていなかったね。ただ表面の意味から理解すると、たぶん莫須有先生が紅槍会の人だと思われるかもしれない。」

いつも人民を殺害する者を切り取っているようだ。間違い、私はこれまで拳術があまり好きではなかった、ただ静かに座っていることを好むのだ。私は何度か大病を患ったが死ななかつたのは珍しいことだ。」

「あら、とてもいい人なのに、たくさんの苦難があったとはね。」

「医門多嫉（この言葉の意味がちょっと分からない。）私をあまり買いかぶらないでほしいね。大きく見られることは自分に対してあまりよくないからね。ちょっと聞きたいのだが、私の部屋の玄関前の木は何年前に植えられたか？あまり小さくないね。」

「あなたの部屋の玄関？私はまだ家賃をもらっていないわ。どうしてこの部屋がもうあなたの部屋になったというのかしら。」

「あなたはちょっと金銭を崇拜する人だね。これからはあまり話しを言わない。そんなことを言うと寂しく感じるよ。私が言いたいのは、この四本の木が小さくないということがうらやましいだけだ——現在の人たちはただ一本だけの木を植える気があまりないことを心配するよ。それは見識が浅いことだからね。」

「ああ、けっこうさ。私は愚痴をこぼしただけだわ。さ、どうぞお入りください。」

そういうと、彼女はまるで援助する手を出すようである。それは先生がこれから杳として音信がないと恐れるからだ。昔人はもう黄鶴に乗って去ったが、今（莫須有先生に貸そうとする）部屋もまた空くと（ちょっと）。

先生は大股で部屋へ入った。腹が立っていたし、しかもお腹も空いていた。

部屋に入ると、一人のお嬢さんが——そう、向こうの窓から顔を出してこっちを見ていた。オンドルに座り仕事をしているようだ。先生はただ髪と髪の下の少しだけを見ていた。と、彼女がいなくなった。先生は立ち尽くしてしまい、詩を作った。

「庭は深いようだが、どのくらいの深さかね？お婆さん、世界は本当にこのガラスと同じように、まったく空虚ではないね。私は一人でぶらぶらするのが好きで、人家に寄っても中へ入らないのが普通だ。それは家の中に人がいることをよく知っているからだ。

しかしそれは仕事が得意なときだが、そうじゃないときは私も三魂渺渺、七魄茫茫のような人になる。まったく立てない人になる。亡くなった父は、いつ息子を迎えに来られるのだろうか。あまり苦難に罰しないでください。」

「いすを持ってくるわ。この庭で少し座ろうかね。」

お婆さんはとても自慢げに長いすを取りに行った。

先生も即刻救われたような感じである。娘の姿が動いていたからだ。まるでかわいいネズミのように頭を前へ突き出したり、戻ったりしているようだ。ただ部屋の中でひそひそ話しているのが聞こえた。何度か「莫須有先生」と聞こえてくる。ある話には疑問符が、ある話には感嘆符が付いている。

珍しい人でも、こんなふうに（言われているなんか）ちょっと？最後の一言は完全になま

めかしい声ではない。そろそろ大家さんは長いすを持ってくるようであるが、こんなにびっしょりと汗をかく表情か——

「先生はうちの部屋を借りたいんだそうよ——お嬢さん、後で挨拶にきてね。」  
それを聞いて娘は片付けをしているようで、声が聞こえなくなった。

「先生、うちの庭はどうだい？ 棗の木は全部で七本——さ、どうぞお座りよ。」

「私は自分の名前はあまりいいと思わない。昔、ある友達が、『人の価値は名前にあるのではない』と言っていたよ。私はあまり賛成ではないが。しかし、会う前にそれはまるで神秘的なことである。私はたくさん天下世間の所を持っているが、それは本当に音楽のようで、非常によく弾いたのである。まったく私の表現できるものではない——つまりは、人前で勝手に私の名前を呼ばないでほしいといたいのだ。それは大切なことだ。」

「それなら急いで書齋に隠れて、十年経っても出ないほうがいいさ。——私はただ気軽に読んだだけだよ、それぐらい、いいじゃないか。」

大家が口をとがらせると、先生も口をとがらせた。幸いなことに、頭上から棗が一つ、「ボンッ」と大きな音を立てて落ちた。

ふと先生は顔を上げ

「杏が熟する季節なのに、なぜ、あなたのところでは棗がなっているのか？」と聞いた。

「もしかしたらこの棗はうちの家族と何か関係があるかもしれないわ。そして、ちょうどあなたの精神も少し傷ついているのかもしれないね。だから知らずに落ちてきたのよ。

去年は、七本の木から、全部で百五十斤の棗を収穫し売ることができたわ。自分でも二十斤くらいの棗を干したわ。後でうちの甥っ子が棗を持って来るからね。彼女にいい棗を選んで一皿持ってきてと言っておいたわ。先生にうちの田舎の特産物を味わってもらいましょう。」

そういうと甥子（姪っ子）が出てきた。出てくるのがとても早かった——もしかして戸の後ろで少し見ていたのではないか？ 駆け足だったので転びそうになった。敷居をまたいだときに足が地に付いてなかった。しかし、莫須有先生が立たせた——

「お嬢さん、びっくりしたよ。」

娘は顔を下げた。（納腫而履決了、）先生は見たら何でも見えたのだ。

「お嬢さん、そんなに恥ずかしがる必要はない。私は城下から来た人間だから、あまり気にしないでくれ。明日またいい靴を作ればいい。纏足をしていない足だとどんな靴をはいてもきれいだから。

あなたはあまり知らないが、私のところが全部「満坑乱爬」！私の話をあまり間違えて聞かないで、実は、私のところに坑があまりない。私はただあなたのようなお嬢さんたちのように坑で働いて、心配事を話すのがうらやましいからだ。世間の事は少しも騒ぎに來ない。ガラスを隔てて外を眺めるのは面白いことだ。」と称賛した。

娘はすぐに立ちあがると、顔を真赤にして、横目で大家のお婆さん（彼女のお婆さん）を虎視し、「私を外へ呼んで、こんな話を聞かせるなんて！」と声を荒げた。

そして、棗をほおり、何も配慮もせずに部屋へ戻っていった。すべてのことは取り戻せず、先生はただ地球に立ってしんと静まりかえっていた。そしてあわててまた座った。

「大家さん、私は失礼なことをしていなかったよね？」

しかし、大家さんは部屋のほうを眺めて口をとがせ、

「どうしてあなたを外に呼んだのに、座わってゆっくりもせず部屋へ戻るのよ？何をびくびくしているの？よそ様からうちらが礼儀を知らない田舎ものだと言われてしまうわ。」

そしてまた急いで先生の世話をする――

「先生、あの子は今年十六歳ですが、かわいそうに三歳で父をなくしてからというもの、彼女の母は彼女を甘やかしていたのよ。私がお家にいないときは彼女に頼んで留守番をしてもらうけど、あまりとがめないであげてくださいな。」

先生はその皿の棗をじっと見て、顔を上げたくないようだ。

「今はおなかはずいていない。この棗は赤くて本当にきれいだね。そのまま置いておいてくれ。しばらくしたら月が上がるだろうから。」

「そんな話をされては、私はどうすればいいかわからなくなったわ――幸い先生は堪能な人だけど、うちのような田舎の人からうちらが、けちでものをお客さんに食べさせずに置いてみるだけのものだと思われてしまう。」

「あなたはいつもこの実の話を言うのだね。もしずっとこんなふうに言うなら、私たちがおなかだめになるよ。私の文章も今日は作れない――夏の日が長いとよく知っているでしょう。私たち二人で、いつからこんなふうに話したのか覚えているかい？しかも言っているのは全部空談だよ。さあ、これからどうしよう。まあ、うちの父はいつも（このこと）を心配している。」

先生は突然がっかりしてうなだれた。まるで彼が何か悪いことしたように。

彼の霊魂が空しく彼と一緒に暮らしていたようで、これから必ず恐怖を感じられるかもしれない。その恐れとは世間の経済にたいする恐怖のようなものである。

（作者）さて、先生のそれからのことは私にはよく分からない。ただ老先生はこの部屋が気に入ったようではあった。先生は2日後に引越して来ると言った。そうして次の日、鶏鳴に起きて、車で城下へ行った。

そして2日後、先生が田舎に来る日である。

## 第五章 莫須有先生は頂戴を見る

その日、引越しは、翌日と取り決めていたのだが、先生は今日引っ越すことにしてその田舎に行った。どんなことでもこんなふうに怠けないといけない。このことから見ればまだ修養の工夫が足りないのが明らかである。

先生はその四本の木を見てすぐに、目的地に到着だとわかった。

まるで恋の病になった鬼が顔を上げて「望郷台」を眺めるようで、涙が出る。その顔をもたげるのは――

「それだそれだ、間違いない。」と知っている。

しかし、木影が広く濃く、万籟寂として声もなし、少しの反響もなく、さらに一步進むしかない。門楣（門や入り口の上に渡した横木）の下に立ち、先生は門を叩いたが反応がなかった。

その隅に隠れてため息をつき、「やあ、もし失恋したら、このときにきっと立脚地を獲得することができなく、世間の人には誰でも捨てられるだろう。しかし、なぜこんなに悲しく思うのだろうか？もし世間の人が、あなたは愛の春風の中に一度日を過ごしたことがなかったら、確かにあなたに代わってすまなく思う。このような寂しさはどのように苦しめるか（よく知っているからだ）。この世間のことはなぜこんなふうに面白いのか！」

作者の言葉

---

こんなにいいかげんに話しているのは、私はまったく続けて書けないからだ。まるで先生はそこで私を突き刺していると疑っているよ！先生のその哀れな格好を見て、まったく成功者には見えず、私も同情の涙を禁じえない。先ほど私は少し心配事があったみたいだから、どうしようもなくそそくさと昼寝をした。今起きて、ぼんやりしている。そうだったならなぜまた書物を書き写しているの？まあ、言わないほうがいい。どんなことでもそのはっきりしていない状態こそが一番面白いのだから。少しよく言えばそれは神密という二つ漢字だ。その役に立たない人たちにびっくりさせる。

---

先生は大喝一声

「この村の人たちはみんな眠てるのか？なぜこんなに静かなのか？」

「誰だい？」

「私だよ！今日来たんだよ！」

「誰だって？」

「莫須有だ。まさかもう忘れたのか？長いことためらっていたが、やはり今日引越してくることにしたのだ。一日早く来るとあなたも一日分家賃を多くもらえるだろう。私が来るのが不歓迎ではないでしょう。」

「なんと、もう来たのかい？なんて気の短い人だろう！——さてどうしたものか」

どうすればよいのか。大家はもうしっかりした意見も何もない。徒手空拳で、ほとんど拍手するに近く「どうしたらいいか？」といている。

彼女は先ほど二十斤くらいの石炭を持ち込んで、今はちょうどそこで顔を洗っていた。二日前に花園で先生とあったときに着ていた青色布製のシャツはもう見えない。体や皮膚は両親から授かるものだが、衰えるのは天に任せるものだ。

それだけでなく、先生は明日来ると約束していたので、貸し出す部屋は失礼なほど汚いというわけではないけども、明日朝早く起きて部屋などをきれいに片付けるつもりだったのだ。

そして、彼女は夏用シャツを昨日の朝、もの入れから用意し、貴賓と会見するとき着る服のように、翌日には着るつもりだったのだ。しかし、どうして今日来たのか？

急ぐと知恵もよく出るものだ。大家は先生にちょっと待ってもらったほうがとよいと思いつき、大声で

「先生、ちょっと待ってください。」といった。

というわけで先生は少し待った。しかし、先生は好奇心が強く、手ぶらで待つのは本当に把握がなく、五分くらいでもう戸の隙間を隔てて中のほうを眺めていた。まるで狐が木を登るようである——

「そこで何をやっているかな？」と覗き見た。

「子供と同じだね！ちょっと待ってとிட்டたでしょう！——いま顔を洗っているんだから。」

外に立つ人は壁に突き当たるしかない。首を縮めたが、少し怒ったようでもあった。「なぜ私は子供と同じなのか？」

怒るなら怒ればいい——

「顔を洗うだと？それは猫が顔を洗っていることだ！どうして私が叱られるのか？嫌なお婆さんだ。猫が顔を洗うと、客が来るという言い伝えがあるよ、うちのふるさとにね。」

文章にはこのように転換することがあるので、先生は自分でも滑稽だと思った。そして「工事の規模が大きい。一步をまだ出していないがもう相手とけんかするなんてどういう意味だ？」と笑った。

なんだ、先生はここに来て本当に工夫して（何か実現できるように）固く決心したのか。

そして木のほうへ向かって歩いて行った。その木に隠れているセミがいったいどの枝にいるか？とよく見ている。

「この虫は本当に面白いね、葉の裏に隠れて誰も見えない。」

気づかぬまに、驚くことに、お婆さんは音もなく戸を開けた。（外に出てこない）。大家は服を正して笑顔も晴れやかである。

「莫須有先生、こんにちは」と声を出した。

すると先生も顔立ちが整っていて、ほとんど反応を出せないほど、あやうく失礼してしまうところだった。

先日、四百五十本の杏木の下であったことはとりあえず考えずに、「今日はどうしてそんなふうな身なりをしているのか？」とも言えずに、ただ「大家さん、こんにちは。」とだけ返事をした。

その後は再び無責任なことを言わず、主と客が互いに尊敬しあう。太廟に入り、何でも聞き、半日くらい鑑賞した。

---

### 三部屋

（第一章では一つ半（部屋）とっていたのではないかと問われそうだが、それはたぶん先生の家が極めて気分がよいところと形容したかったからで、大げさと言わざるを得なかった。実は三部屋だ）。

---

三つの部屋の中にはたくさんの骨董が置かれていた。先生は賛美したくて堪らなかった。声を低くしてへりくだり、顔を横に振っている。それは世間の事を信じられないからだ。二度も山から下りないと言って、それはお辞儀をすることと同じだ。そして、

「大家さん、本当にあなたたちには感心する。生活するのは難しいものだが、部屋をこんなふう上品に片付けているのは感心だ。ほかに、このような古い夏シャツにこんないい銅のボタンを付けていてもまったく気をもまないのも、私にとって本当に理想の人だ。世の中には本当にいい出来事がたくさんあるね。」とまた話した。

「まずは、自分で荷物を片付けておくれ。」

「ならば、今日は、愚痴をこぼさないでほしいね。（私は自分で片付けるなら）、私はここでよく寝る以上に、すべてのことを私の都合によってよく処理しないとイケないね。」

「何の話？やめておくれよ。」

「たとえば、あなたのこれらのもののように、私にとって役立つのがあまりないようだ。」

「もし役に立つものがあればどうぞ遠慮なく使ってくださいな。もしいらなかったら持ち帰るからね。——ほら、この筆立てとやすずり、気に入る？これはうちの舅が以前鳳凰城から持ってきたものなのよ。」

「鳳凰城というのか、その名前は好きだ。この筆立てやすずりは本当に興味深い。だが見るだけでいい。使うのは自分のものがいい。私はどこでもいつでも自分のものを持っている——はて、この匣（ふた付きのやや小型で四角い箱）には何が？」

「帽子を入れる箱よ。中にうちの舅が昔使っていた花翎頂戴を入れているわ。見せましょうか。」

「それはいいね。大人になってから花翎頂戴ということをもろで忘れていたようだ。幸いあなたの話を聞いて、小さいころ私の舅父（母の兄弟）が頭にこのようなものをかぶっていたことを思い出したよ。非常に好きだったんだ。しかし見せてほしいとは言い出しにくかったな。なぜかわからないが、私のような子供に見せて遊ぶのが絶対に賛成できないとわかるようであった。」

「ほかにもあるわよ——でも、今ではもう使えないものね。」

「悲しむ必要はないのでは？時代がもう流れたのだから。」

先生は花翎頂戴を見て、彼の舅父の花翎頂戴よりも高価だろうと気づいた。そして子供世界の花翎頂戴というのは、この一生にもう一度見ることはできないこともよく知っていた。それがどんなに楽しかったか——あなたは悲しむ必要はないではないか？あなたはまだ骨董で遊ぶことができるではないか。

「お婆さん、私は子供のころ好きだったものをまだよく覚えているよ。それはどう考えてもよくわからないことだ。それはまるで、わたしは橋を渡るのが好きだが、いつも怖くなるのと同じようなものだ。この小さい子とその橋に立っている影、その魂は、いったい誰か？私？この世界の生き物か？違うか？すべては私の画家の才能を超えるものだ。」

お婆さんは独り言を言っていて何を言っているかよくわからない。先生はまた突然威張った態度を出して、聞く気になれない。少し間があって再び、

「麒麟之于走獸（獣）、鳳凰之于飛鳥（空を飛ぶ鳥）、猫がネズミを捕る、ネズミがネズミの劇を歌う。私はこれらの全てが好きだ。しかし、最も好きではないのは、花翎で作られた孔雀だ。孔雀の命というものが見えず、孔雀の羽毛だけしか見えないからだ。それは人の楽しめることではない。もし公園で人々が孔雀を囲んで眺めているのを見たら、その人たちは見込みがないと思うよ。」と話した。

「先生、あなたは同情の心が少しもない人だね。私の心がどんなに苦しんでいるかぜんぜんわからないでしょう……」

「はあ——ではあなたに聞こう。あなたのそのものはどれのものでしょうか？」

「何のことかしら？」

「その壁にかかっている弓のことだ。」

「教えたことがあるよ。私たちは皇室を守るため、誰もが馬に乗り、矢を射ることができる。この弓はうちの曾祖父が昔関外（以前、長城の東のはずれである山海関より東の地域をさした。）で使っていたものだ。」

「これはここで（続いて）かけておいてもらっていいかい？この弓を見るのが好きだから。」

「それならべつにかまわないさ。」

「はは、それだととてもうれしいね——ある老漢（老人）が、私と仲良しなのだが、彼は一枝の百戦鋼銃がほしいといっている。その百戦鋼銃を彼の鳳凰レンガ斎の壁にかけたらいそうだ。彼はもともと江南水師の出身だった。」



「その写真はどうか？ここに残すかい？うちの舅が友達と一緒に吉林省でとったものだ。舅さまはお酒が好きでね。ほらここを見て。彼がうちの舅さ。雪の降る日、皆は亭を囲んで酒を飲んだものだ。」

「黄岡の竹楼だろうか？——うん、これは外してくれてかまわない。あなたの部屋へ持ちかえってよい。私は言い尽くせない考え事があるので、優れている大家がぜひとも許してください。古之人（昔の人）なら、唯一つの肖像画だけでも、もし気に入るなら、私の部屋に飾るのが好きであるが、でも何とか私と関係がないときがする。

たとえば、ある友達からもらったものだが、私は杏壇で講義をする孔子の絵を一枚持っている。また、私の母親が還暦を迎えた年に、かつて私に一枚写真をくれたから、大事に保存するほかない。

大変恥ずかしく思うが、私はいつも縁を切る意味だと思っている。私がここまで引っ越して来たのは、本当はホテルに泊まるような私心があったからで、お互いあまり関係がないからだ。」

言いながら、慌てふためいてどうしてよいかわからないようだ。まるで決められないような様子である。

少し紙がほしいと大家さんに話した。何のためと聞くと、先生は「トイレに行きたい」といって戸を出て何も言わずに早足でトイレへ向かった。

「話がまだ言い切っていない。また今度話そう——昨日、友達から誘われて会賢堂にいった。彼らはみんな酔っ払ったが、私はご飯を食べるだけだった。」とねんごろに言いつけた。

そして、私たちは今度また会うしかない。

## 第六章 三脚猫の話

先生は二つの石レンガの上にしゃがんでいた。悠然見南山（のんびりして満ち足りている様子は）、その境界が広いことに堪えずとても喜んでいて。すると、

「とてもいいね。私は、ここに来るのが遅かったと後悔している。ここは本当にいいところだ。よし、私のこの山舎（拙宅の意味だと思う）の名を「茅廁見山齋」と名付けよう。しかし、残念ながら、私の字はとても汚い。もちろん書く必要がないが、それは心と心が通じ合っているからだ——私のその莫須有先生之璽は、十元くらいをかけて人に頼んで作られたものだ。今までまだ印肉を買っていないが、（その璽が）大きいから、どうせ使い道はない。私は従来に告示するのが一番好きではない、ただ日記を書くのが好きだ。私の文章と日記が同じのではないか？私しかその意味をよくわからない。もし、これまでその芸術を鑑賞する人たちは私と同じような冒険才能を持っていると、わからないというこ

とがないわけでしょう。」といった。

「莫須有先生、トイレのなかで何の話をしているの？」

「話していないよ。これはあなたの悪いでしょう。私はまだ手を洗っていないので、自分で正々堂々にこの世の前に立つことではない、だから、私に詰問するわけではない——しまった、あいにく逃げるアリの踏んでしまった。これはしょうがない、このアリが死ぬ運命だったというしかない。（これまでの人生は）彼の一生といえるだろう。別に（私に踏まれて死んだのが）そんなにすばらしいことではないのではないか？」

そうして、先生は頭を下げて外に出た。手を洗っていなかったが。そして、この露天トイレの一角壁がすぐにも崩れそうな様子を見て驚いた。

幸いに先生がもう出た後でよかった。しかし、今回の逃げることに僥倖すればよいのか、今度のために警告すればよいのか、独り言を言って独りで笑うしかない。

「もしここでうずめられるならば、私の人生は本当に無意義だな。」

「先生、これから物語をたくさん話せばいいわ。道理はやめたほうがいいわね。それはあまり人々が好きなものではないわ。他人にあなたの道理を聞かせる必要はないんじゃないかしら？人の生涯は、生きて暮らすことが一番大事だからね。

一日にいくらか笑うことができれば、それでもう権利や義務を果たしたといえるわ。

だからたくさん物語を私らに教えてくださいな。それならこちらは先生のことをもっと好きになるわ。」

「教えるけど、私が怒ったときには責めないでほしい。さきほどあなたは何を言った？私に『道理を言うな』と言うこと自体、私に道理を言っているのではないか？

あなたは何を知っているというのか？私は何でもできる。物語もたくさん知っている。しかし、私はあなたのような婦人之言（女の話）を簡単に聞くわけではないではないか。

私は自分の気持ちに従って言いたい話をするだけだ。私があるところで間借りしているからといって、私に賄賂を送って買収することができると思っはいけないよ。

よし、では水を持ってきて。物語を話すにしても講談師でも、ただ話すだけなんて出来ないだろう。のどが渴かないように何かしないとね。あなたはまだ主客の礼儀をしてない。」

「先生、これは私が悪いともいえないよ。私はあなたを見たら何でも忘れるからだ。あなたに同情するよ。まだ若いのに、もう徳配天地道貫古今になって、貞操（忠節）の方で、（とてもすばらしいと思う。）」

「あなたのこの最後の一言はいい意味か悪い意味かよく分からないが——まあいい、その話は忘れましょう。それはただの前口上にしよう。今日からがんばって物語を話そう。」

人生というのは、実は物語をいうこと、劇を演ずることと同じようにすればよいものだ。それは悲しんでも傷つかないからだ。君臣でも父子でも、すべての関係はこのようなものだけだ。恋愛しても、国が滅んでも、はっきりしているのは、よろいかぶとを捨て、振り返ったらまた自分らしく生きることができるだろう。」

「あら、まあ。（驚いたり、意外に思ったりするときの気持ち）、ありがとう。」

先生は大家の持ってきた水を一口で飲み干した。心配そうな顔をして、彼がここに来るのは非常に面子があったと思う。両袖生風、彼が愛している人は精神上に相応的な驚く賞をもらいたいような豪飲だった。

「さて、一つ物語を話そうか。昔々、二人の姉妹がいた。その二人は、なんと同じ男を愛していたのだ。

姉はその男の美しい容姿を愛しており、妹は彼の才能と学問を愛していた。彼は将来必ず状元に合格できると思っていたからね。

姉は非常に美しい女性で、髪の毛の長さは虎を丸々結ぶ事ができるくらいだったそうだ。妹のほうはというと、姉を極めて大切にしていた。

ある日、姉妹と男の三人は後花園で宴席を開いた。妹が次々とお酌をし、二人を酔わせた。酒の最後の一杯は何だったと思う？それは一杯の毒酒だったのだ。

それを姉に注ぎ、姉が野用と思うところに、白面書生は、ちょうど豪興で、彼のお酒を持って『世の中にある人がいる。もしこの人は、この人ではないといけない、一杯の毒酒を飲ませると、私は必ず躊躇せず、一口で飲み干す。』といった。

（事がまたたく間に起こるとえ）話を言いきったとたん、運命付けられた娘は、半分ほど飲んだ酒を、彼女の愛する彼の口先に持っていった。二人とも、我も忘れる境地になっていたのかもしれない。深々とキスをして、もう最後の呼吸だった。その同時に天上の雷神電母が一斉に動作して、そのかわいそう」

「石？金になればよかったのに。」

「まあ、それはしょうがないことだ。人はみなそれぞれの生活状態によってそれぞれの意識に育成されるからね。あなたは金しかわからないね。それはとても寂しく思う。」

「いい子ね。もし寂しいと感じるなら、それだけでいいことよ。先ほどあなた話したとき、表情が少し心配だったの。あなたが写実派の範囲を超えるのが怖いよ。人生には酔っ払うというのがない。それはただどうしようもなく人生を粗末にするものよ。芸術には損失になるのが免れない。あたかもあなたの物語は私から見ると面白くないものよう。

おそらくあなた今の気持ちが物語を言うとして合わないからだ。それは確かにぶらぶらして働かない人が茶店で無駄話をするのと同じになればよかった。あなたの心配事を聞く必要はない。ただあなたに忠告したいだけだ。元気盛り、戒之在鬪、暴虎馮河（素手で虎に立ち向かい、徒で大河を渡る、無謀な行動の形容）、吾不与也（私は参加しない意味だ

と思う)。この闘という字の範囲がとても広いと思うので、好勇闘狠する必要はない。忍耐すればよい（つらい時期を越えるまで我慢すればよいことが必ず来るという意味だと思う。）」

こう言われて、先生は何も言わなくなった。その頭の鉢を机に向かって何を知っているか知らない。それはたぶん苦しみが過ぎた後にその苦しみを思い出して、教訓をくみ取るのだろう。他人で教訓を与えられたことに恥ずかしくなるまでには至らないでしょう。突然顔を上げ、花をつまんで笑っているみたいに、きれいな笑顔で、

「もし以前のように文章を作るならば、ここで本当にあなたのような年上の人にすすり泣くかもしれない。今だったら妥当ではないと思っている。さっきほど、実は、本当に一つの心配事が突然胸のうちに襲われたから、口から出任せの話を言ってしまったのだ。それをもうやめたほうがいいな。

さあ、荷物を片付けさせてください。明日からよくがんばるよう固く決心するから。私の荷物はいつも簡単なものだ。ほら、これは二つとてもいい本だ。作家は一つがイギリスのシェークスピアで、一つがスペインのセルバンティスだ。すべて世界中の偉大な人物だ。面白いのは、この傑作は、イギリスのシェークスピアでも見たことがあるそうである。本を閉じてどうなるか知らないね。」といった。

「私に見せて、何か絵が載っているの？」

そうして、莫須有先生は両手でドン・キホーテを渡して、

「これはおもちゃじゃないとよく知っているね、気をつけて！」と言った。

「ほら、あなた、また——どうしてこんなに恥ずかしがるの？大げさに騒ぐほどの事じゃないわ。私は知らないのがないよ。お嬢さんたちは嫁に行くとき作られた縫い物の中にいいのがたくさんあるよ。」

「え、え、え、店主東はあなたが黄驃馬（黄色に白斑のある馬）をつれて……」

譚老板は売馬を歌っているね。蓋不勝其悲矣。（とても悲しいという意味だと思う。）しばらくたったら何でも整然と秩序立っている。富潤屋、徳潤身、ただ心の中に少しさびしいだけだ。どう見ても大家さんしか目の前にいないのだ。知らないうちに座って失言だ

---

「あなたは自分の場所に戻っていいよ。人は長生きができるならば自慢話にもなるかもしれないが、私はいつまでも青年主義者を崇拜するものだ。」

知らずにタバコを吸っていた。

急いで両方を修正しようとして——

「今はすべてのもの事を決めたので、これからの物語がますます面白くなる。私たち二人もこれから親しみ合う。この奇跡のない世界に一つの奇跡を作りましょう。この世はもしかしたら突然発達するようになってきているのかもしれない。そうなら、あなたは私と同じ

ように大衆（崇拜者のことだと思う）がいるのではないか。」

「なんの話？まさかあなたは野心を持っているではないでしょうね。私はただ（脱穀した）アワがあればいいだけよ。」

「それは面白い。人生の意味はどこにある？それは友達の道にあるのだ。前人栽木、後人乗陰、（昔の人は木を植えて、後人涼をとる。前代の人の苦勞によって、後代の人が樂をできるたとえ）お互いに賑やかに過ごし、互いに励まし合って、失敗させない。後之視今亦猶今之視昔也（将来に今の事を回想することは、今に昔の事を追憶するのと同じである。）」

「今、私はあなたを誘って、私の部屋へ遊びにおいでください。」

「どうぞ。」

「どうぞ。」

そうして、先生は南のほうの部屋へ誘われた。そうしたら、形勢が急変して、何もいえなくなった。それはなぜか？彼は

「ああ、お婆さん、私はなにも話したくない気持ちになったようだ。」

お婆さんには聞こえず、そこで何かしようと思っている。

「あなたのこの鏡はもう何十年くらい使ったでしょう。先生はどのようにただ一つだけの鏡のために感動されたの。」

なんと視線をお婆さんの鏡台に放ったのか。この四角いものは本当にきれいだね。

「??」

「でたらめを言わないで。明日からよく頑張らないと、相変わらずあなたのことを尊敬しないわよ。」

しかし、先生はまた話を聞かなくなった。横を向いて、壁にかけてある一枚の写真に注目していた。こうなると先生は何も言わなくなる。

彼の様子は、まるでその壁に十年間工夫をしたようで、心をこめているがわれを忘れない。見るほど見ればきれいに見えてくる。

本当にその美人の絵よりもっと感嘆できるものだ。大家は先生がじっと見ているその様子を見て、村がすべて静かで、知らずに彼女も壁のほうを見た。彼女は何を見ているのか、先生はよく知らない——皆さんはなぜ話さないの？しかし先生はもう向きを変えて、大家さんははにかんで笑っている——

「先生、これは私が二十六歳の時に北京で撮った写真だよ。」

手で一皿の胡桃を預かって先生に食べさせるために、しかしもう忘れていたが。

「お婆さん、人生には敬という字がないといけないね。」

続いてもう何も話せなくなる。

誰かが外で戸を叩いている。戸は閉まっているが鍵はかけていない。戸が開いた。

先生はあなたを前へ突き出して見たとたん後ろに後退した。それは大家さんが急いで迎えに行ったからだ。

三人のおばさんが同時に声を出した。

「姉さん、こんばんは」

「あら三舅母、こんばんは」

「ええ、こんばんは」

先生は笑っているが実は笑っていない。

「あなたの家に莫須有先生という人が来たそうなので、わざわざ見に来たのよ。」

「紹介しましょう。この人は莫須有先生とおっしゃるのよ。莫須有先生、こちらは（家の後ろのほうに住んでいる）大老太太で、こっちはうちの三舅母よ。」

先生はとても憎憎しく思った。もっと早く知り合いになればよかったと思っている。

（三脚猫か、何が三脚猫だい、あなたはとてもけちん坊だそうだね。）

彼女らの話は、先生はどこの国の言葉を使っているかよく分からず、そのうち三舅母については全く聞きとれなかった。

三人のおばさんたちは全員庭にいて、皆で聞き耳を立てて小声で話している。会えたら考え事を言わないとね。それぞれの考え事を持っていて、うれしさが顔に現れている。莫須有先生を目的として、眉をひそめて目配せするより、尊敬できる莫須有先生はいつか同じ防御戦線じゃなくなった。

しかし、大家は最も得意になっていて、お世辞を聞いている様子である。三舅母はずっと話していた。次に口を開いた瞬間、莫須有先生には、（私に話しかけてくる気だな）と悟った――

「先生、卵を買うときはうちに来なさいよ。」

「ふん、なぜわざわざ訪問しにきたのか分かったよ。」

「あなたのような南の人は、綺麗好きで、卵がすきだとよく知っているからね。前年ここで学生さんが泊まったことがあったわよ。いつもうちの卵を買っていたのよ。」

「いったい私のことを先生と思っているか学生と思っているか？ どうしてあなたの目には莫須有先生はまったく区別がないのか？」

そのとき、大家さんは急いで声をかけて、自慢げに――

「このお婆さんは先生にお願いがあるんだそうよ。先生にひとつ手紙を書いてもらいたいよ。彼女の息子は山東にいるの。鉄道の会社で働いているのよ。」と先生に言った。

この「お婆さん」というのは、すなわち家の後ろに住んでいる大老太太だ。もう目下のように見られている。先生は困った。しょうがなく彼女を行かせるしかない。

「あなたたちが来られた理由は分かった。諸承不棄、至為感銘、しかし今日はもうお帰り願いたい。手紙についてはまた明日、そのときに書いてよろしいか？ そうしよう。では

また。」

そしてすぐさま、先生は遠慮なく部屋に戻って寝た。外の世界で起きることに、どうやら完全に興味がなくなったようだ。

先生は目を覚ますと、寝ぼけて目がぼんやりのまま大家を呼び、

「もし卵を買うときは、絶対にその三脚猫から卵を買わないでくれ。いつ彼女の来歴を私に教えるの？」と言いつけた。

「彼女もうちらの近所だよ。いつも三舅母と呼んでいる、なかなかよいのではないか。」

「三舅母？いや、三脚猫と呼ぼう！これからは三脚猫と呼ぼう！」

## 第七章 莫須有先生、符を書く

あっという間に数日が経ち、先生は唐突にある事を思い出した。

「誰かが、私を隠遁者と言ったときは、その人の言葉つきがどうなっているか、よく知りたいのだ。おそらく彼は私の才能を知らないだろう。田舎で暮らすと、市内で暮らすよりずっと自分の才能が現れるものだ。」

田舎では飢えが一番重要なことだ。飢えて死んだ死体は必ずガラスにつつかれ食べられる。城下にいると、多くとも一枚、死体を受け取りに来てもらうための告示を張ってもらえる。行人倒斃（行き斃れ）、それは孤独であるのがいいのではない。そして、天下の詩人に伝言を言付ける。あなたたちが詩を作るなら、市内に隠れたほうがいい。是非田舎に行かないように。

先生はあなたたちをととても心配している（愛している）。そして、また再三念を押して、死ぬまで変わらないだろう。あなたは『莫須有先生伝』を作るものなので、先生の話聞きなさい。理想派になってもらおう。そうすれば先生のことわかるようになり、先生もあなたを愛することになる。

何事でも、優れた独特の見識をそれほど有していないほうがいい。それは人生に対してすまないと思うからだ。その上、先生の生活ももっと疲れたものになるかもしれない。文章を作るときはもっと親しみ合うべきで、それはにぎやかな出来事だ。しかし、先生の人格の功績とすればよい。

「先生、あなたは何を言っているの？私たちにはよく分からないわ。教えてください。そして前回の事はまだ終わっていないわよ。老婆の代わりに手紙を書いたの？」

「それについてはもう書いたよ。昨日、『今日取りに来てください』と教えたが、それはもとの官話だったのに、彼女は今日取りに来た、本当に老いぼれだね。」

彼女はもっばらうちの大家さんにまじめすることをたずねた。

たとえば、彼女の家では棗をたくさんしまっておいているけど、自分の孫（ここは娘の子供を示す）に少しも渡さず、必ずその四人の子供をつれてうちの大家さんの所に来る。しかし、来たらなぜそんなに気前よくたくさんの棗を出すのか？子供一人あたり三粒をあげるなんて、気前よく自分でやったでしょう、どうして、彼らが帰ったらまた私に文句言うの？かわいそうな私は、自分の娘でもないよ、それは自分で言ったでしょう、それなら、どうして人の感情を害すると心配しているね。それとも、characterによっていらぬ心配をするの？そして、どうしてそんなに気を遣うの？私は隣にいるときに、一人子に三粒の棗をあげて、

「大丈夫、自分で作ったものだから、子供に食べさせないで残しても無駄になるよ。」と、あなたが言ったでしょう。

「二姥姥にありがとうって言いなさい。この子ったら！私はここに来るといったらみんな後ろについて来ちゃったね！さあさあ、帰りなさい、邪魔しないで。隣の先生は今昼寝をしているよ。」

先生はその話を聞いて、きわめて怯えた。（まったく田舎の暇な探偵たちよりももっと気を付けないといけない。私の昼寝の時間さえも探ったなんて。）

今までは、先生は仕事をするときも寝るときも、ずっと誰にも知られずにやっていた。たぶん梁間のツバメだけが先生の長嘆を聞いているかもしれない。あなたは人も財産もなくしてしまうときになると、うちの庭もさびしがる。そうしたら、あなたは私にその心配顔を出してひそひそ話す――

「先生、さっきの老いぼれはうちよりもっと棗を持っているのに、いつも孫を連れてうちに来るから、棗を食べさせないなんてできないよ。私は人に好意を示すために死んでしまうかもしれないわ。役に立たない夫と出会ったから、ほかの誰も怒らせる勇気がないわ。」

「わけのわからない事を言っているね。笑ってしまうよ。」

私は彼女に恥を返した。（この地球には、あなたと、私のような主東老少だけではない。どうしてあなたは自分をそんなに苦しめるのか？そして私を巻き込むのか？）

突然、先生は自分の態度がとてもかわいいと感じた。自分はしゃがんで石を探しているが、石を人に投げる事など絶対にしない。十字を書くことでも笑うべきであることだ。さっきの老いぼれには、もともと彼女にひじ鉄を食らわせた。



彼女はまったく忌み嫌うものが何もなく、足音もたてず快適な書斎のすだれをめくり上げた日、実は私はちょうど一心に詩を作ることに没頭していた。

ふと気づいて「誰だ？何をしている？」と大声で叫ぶとやはり彼女が来た。

先生に手紙を書いてもらうためだ。しかも手ぶらだった。

「ははは、ここにあなたの席にない。あなたの年で私を脅かすことは絶対できない。詩壇では遠慮という二字を言ってはいけないな。

来てしまったのならそこで立っててもらってかまわないから、この韻脚を推敲し終わるまでちょっと待ってくれ。」

「先生に手紙を書いてもらいたいのです。」

「手紙を書く？それは価値のない話だ。別に書いてもいいが」

と、先生は唐突に生計を立てる手立てを悟った。将来橋の上で屋台を出し、文王神課をしながら、それは百事可知（どんなことでもわかる）であるが、この老女のようなお婆さんたちのために手紙を代筆するといったものだ。

今日はもちろん値段の交渉はできないが。

「（手紙）持ってきていいよ。」

しかし、先生は彼女を相手にすることにまったく興味はなかった。ただ手を横に出して「持ってきて」と言うだけで、自分の仕事を少しもおろそかにしてなかった。

—————作者独白？莫須有先生独白？—————

先生、あなたの手はいつも素手になるから、取り戻したほうがいい。これは私がよく知っている。きわめて美しい詩は、これで書くのをやめる。

そしてそちらへ向けるようになる。彼女を見ると、いたずらっぽくニヤニヤした顔つきで、狡猾きわまる人という印象だった。

（-----私の目論見が完全に看破された）-----

「莫須有先生、便箋を一枚貸してもらいたい。田舎ものなので、どんなことでも不便なんだ。買い物をしたくても、お金を言わなくても、人への頼み事だけでも難しい。」

「お金については言わなくてもいいよ——」

—————先生の独白？—————

ほら、この大切な時期に向きを変えて見たら、大家さんもいつのまにか便りを尋ねて（部屋に）まぎれこんでいた！まぎれこむや、私の書斎で召し使う童僕になって、そばに仕えて言葉も少しもなく。しかし、彼女は話がたくさんあると知っている。

独白終わり

---

そして口を開いて小さな声で――

「お姉さん、ご飯を食べた？先生の課業が終わるまでちょっと待って。昨日何度も催促したから、今日必ず書いてくれるわ。」

---

先生独白？

---

どうしてそんなに歓心を買うのがうまいのか！いったいどこまでが私の人情なのか、あなたの人情なのか？ふん！早く便箋を彼女に借りたほうがいい！私は部屋の中に充満するねぎの匂いをかぐと、彼女にどうしてもこんなふうに憎んでいる――独白終わり――

「大家さん、あなたご飯を食べてきたね！」

「そう、食べたばかりよ。」

「北京の女たちはなぜ葱が好きなのか、まったく理解できないな！」

はっ！と先生は話をまた間違えた気づいた。手をつかねるがもう間に合わない。見ると「女きょうだいたち」はもうひそひそ話をしている。先生が話をしても無駄だった。

「先生に一枚便箋を貸してもらいたいわ。先生がもしこれから洗濯物や縫い物の用事があったら、二妹妹は私のところに持ってきて、うちらはこだわる必要がないね。うちは二妹妹より工夫がいっぱいある、あなたが一人だけだから。」

「現在、庭園で彼女たちはズボンや内掛け一着を洗うのがいくらかよく知らないね。昨日、先生は私に「取りに行つて」、と言ったけど――でもその場所は、夏休みで男女が多いといやだから、その女たち、今のところ、みんな市内での仕事に慣れているから、男と来客の服なんかの区別がまったくわからない。すべて混ぜている！ぜんぜんきれいに洗えないと心配している。」

「どうせうちの少奶奶は家で暇だから。私に任せて、大丈夫。」

「ズボンや内掛け一着を洗うといくらかかるのかよく知らないわ。」

「一着を洗うと二吊かかるみたいよ。」

二人は考えているが、先生はこのとき安楽椅子に座って頭を横に振って耳をたって腕がむずむずしてきて、大声で三度笑った。

「はは、ははは、ははは。」

「先生、冗談を。びっくりしたわ。」

「ははは。大家さん、あなたは忠誠心にあふれる人だね。私から見ると、あなたはいつまでたっても彼女の嚢を一粒でも食べられないだろう。私のためにアイディアを出さなくてもいいよ。私に任せて。商売ならうまく商売をすれば

よい、人情ならうまく人情をすればよい。適宜に処置させてください。

そして、そこのおばあさん、こっちに来てくれ。私に手紙を書いてもらいたいそうだけど、そのほかに便箋も貸りたいのだろう。今すぐ書き始めるから。

いいかい、あなたはよく知らないといけないよ。これを見て。昔高祖皇帝御筆梅花之箋、尊府からやっとのことで拝借したものだ。

これは意中の人と会えない3年間を懐かしく思うために用意したものだ。慕いあう話を書いてね。ああ悲しいことだね。

今、あなたたちの目の前に互いに腹を探りあって暗闘する始末になったのだ！私の身の回りの持ち物は多くないが、すべて上品なものだ。

おばあさん、あなたはもう来てしまったわけだし、融通も聞かないから、しかたない、書いてあげよう。

ははは、一気に何百字を言ったなんて、商務印刷館に持っていけばきっといくらか値がするでしょう。だからどういっても損はしない。」

「お姉さん、この便箋を見て。この絵はきれいではない。うちのよな田舎ものはどこで見られるか？」

「私は目が悪いからよく見えないよ。」

「あなたがはっきり見えないことは知っているわ。あなたからきれいかきれいではないかあまり気にしないと聞いたよ！——大家さん、劇を見たことがある？舞台で手紙を書くのがとても速い、さっと書いたよ。私の技巧も大体同じだ。何を言っているのかわからない。急いで勅をもらったようだ。」

## 第八章 引き続き前回の事を言おう

(著者) わたしは先生に前回のことを後でたずねたのだが、そんなに簡単には終わらなかったそうである。

先生はまた一枚の封筒を出してきて、また彼女の代わりによく回る舌で手当を出した。そして、中華民国の切手も、大英帝国の字母も、張大元帥の写真も出した。40  $\frac{1}{10}$  をはっきり見分けると一枚をちぎって、

「おばあさん、私は、手っ取り早く済ますためにこんなことをしているのではないよ。今日、私は始めてやってみただけだ。これはこの前、山に登ったときに買った切手だ。あなたはこれを、そのP. O. を書いているポストを探して、手紙を入れればいい——今回あなたの目はよく見えるでしょう。さあ、手続きは全部終わった。そして、張大元帥はしばらく日本人の爆弾で殺されたそうさ。」といった。

「先生、お手数なんですけど——私たちは近所だから、何かあったらまた先生にお願いにあがると思うわ。」

「うん、分かった。では帰って。大家さんも帰っていい。私の世界は詩人の世界か、それともあなたたちのような様々な人たちの世界か、本当に分からなくなったよ。」

維摩詰室に、ある天女がいた。あるいは彼女は狐の化身と言っても良い。ただし、彼女が突然出現したことについて、私はそれを幻とは思わない。何物老嫗、中寿汝墓之木拱矣、発短心長、我倒不以為真。」

彼女は帰ろうとする。帰ろうとするが、緩めたくなく（まわりを）全部目に入ろうとしている。

「先生、これは私のために書いてくれた手紙じゃあないのかい？」

「あなたのために書いた手紙ではないとすると、いったい誰のために書いた手紙だと？」

「どうしてここにシガレット絵を張っているんだい？若い人なら常に老練に慎重にしたほうがいいわ！私はもう七十歳を超えているから、あなたに手紙を書いてもらいたかったのに。手紙を書くことを断ってくれてもよかったわ。でもこれはどういうこと？どうして私のような老人にいたずらをするの？手紙にこんな絵を張るなんて！息子にわずかなお金を送ってもらうために、手紙を書いてもらおうと、こんなふうはずっと立って待っていたのに！」

「どうしたというのか？これは四分の一の切手じゃないか？さっきの話が耳に入らなかったのか？・・・はあ、運が悪いと思うほかはないな。おばあさん、この手紙を出せばいいんだよ。もしあなたの息子がお金を送ってこなかったら、また私のところに来ればいい。」

「先生、約束しておくれ。あなたは、うちの息子がこの手紙を必ず受け取れると言ってあるわ。でもきっとお金を届けるかどうかは断言できないわね。」

「どうにも話がこじれたね。大家さん、私の代わりに彼女に説明してくださいよ。あなたたちは今まで手紙を出したことが一度もなかったのかい？送っても返事がなかったのかい？この四分を払ったことはなかったのかい？私のなになが悪かった？」

「私はいままで生きてきて、誰かに手紙を書いてもらったことなんて一度もなかったわ。」

「それは気の毒に——私も昨日まで恋文を書いたことがなかった——おばあさん、何も考えずに帰ることを勧めるよ。そうすれば、四かけ四十六枚銅貨を節約することができるから。」

「お姉さん、先生はうちらより経験と知識が豊富なんだから、彼の話信じれば間違いないわ。」

「そう言われても、お金を払う必要が本当にあるの？」

「もちろんよ。銅貨十六枚を私に頂戴な——目下、私は海淀郵便局と交渉している。唯一のポストがあれば、この自治村をすべて統治することができる。そのポストをうちの出入りに置けばいい。一人が自転車で（手紙を）毎日一回に回収に来ればいい。夜になると、たいまつをともし。あなたたちはこれから山を越える必要がなくなるよ。いっぱい歩いたら転ぶから。」

「夜にたいまつをともし——そうしたら、うちが再びもとに戻るね。昔はうちの出入りに、晴れても雨でもいつでも明かりをつけていたもんだ。」

「当今、全部でその南の学生たちは有利な地位を占めている。二妹妹、邪魔したね。」

「あ、結構だよ——お姉さんもう帰るの？」

「ええ、帰るわ。」

「ふん、こんなふうに私を顧みなく帰るとは、どうやら私はあなたに邪魔でもしたというものだ！ははは。」

先生はあくびをしてこのやり取りをおしまいにして、安楽椅子で目をつぶって休んだ。

大家さんは客人を送り出してから、またぞろ先生の部屋に戻りたくてたまらなくなり、入り口のカーテンをめくりあげて部屋に入った。しかし先生が目をつぶって寝ているのを見ると、首をすくめて向きを変えて出て行こうとした。

しかし先生は咳をして彼女を引き止めた。実は先生は動揺しやすい人なのだ。威張っているのはすべて無理をしているのだった。

「寝てなかったの？邪魔したかとひやひやしたわ。」

「私が頭を振るのを見れば、話にも答える興味がないと分かるでしょう。世間の日々を過ごして本当にくたびれてしまったよ。」

「この話はうまく言ったわね。頭を振るのが黙ると理解するわけね。」

そう聞くと、先生は黙りこくった。そして、目を持っている人でもかまわずに人を見なくてもいい。彼が怒っていると言っても、落ち着いていると言っても、それとも彼が盲人だと言っても良いのだ。つまり、先生はいっしょにあなたを見ない。しかし、彼女は何か言おうと思ってたまらない——

「私たちの服は、さっきのおばあさんには頼みはしないよ——先生はさっき三人の前で服を洗うことを彼女に頼むことをひどく恐れたね。でも、もしこれから服を彼女に任さなかったら彼女は絶対に私を憎むわ。そして、先生のこと一手に握ってアイデアを出してあげるといわれるわよ。さっきの人たちの前では断りにくかったから、彼女が高い値段を言っても、値切ることができなくなるかもしれないわ。」

大家ははたと、「自分がこんなふうにいっぱい話して、先生はもしかしたらもう寝ちゃったかもしれない」と気づいた。怒っても意味がない。

「二人の賢弟（年下の友人に対する称）、水を持ってきて、本帥と渴きをいやしましよ  
う……大家さん、もう秋だから、風が涼しくなってきたが、私のあわせの服がまだ天和当  
（たぶん質屋の名前だと思う）に置いてある……私の母は私が恋しいと言っている……父  
よ、私をとがめないでください……至人無夢……生き生きとしているのは蝶々ではないか  
……」

「なんだい。寝言を言っているよこの先生は。どうしたものか。どうしようもない。先  
生……私にはしばらく考えさせてね……」

## 第九章 白丫頭が歌を歌う

「今日もまだ暑いね。」

「あなたは北京語をしゃべらないで。さっぱりしていないから、変だ！」

「ははは、それを聞いて、私の北京語がうまくなったのではないかと思ってしまうよ。  
そういわれると本当に愉快なものだ。

いやいや、あなたと是非を明らかにするわけではないよ。昔、私が学堂でギリシアラテン  
文字を学んだときはそうではなかったのだ。

私はいつも、自分の発音が正しいと思っていたので、ほかの人の舌が固くてのろまだと  
あざ笑っていたものだ。しかし一人の同窓生がある日、私に対して、とても感心している  
とほんとうのことをいった。しかし彼は、私の読書能力は非常に優れているが、ただ発音  
は間違えているといったのだ。

その話を聞いて、私はまるでカエルみたいに腹が膨れるようだった。（怒らせる話だね）  
——なぜ私の発音が正しくない？・・・今では自分が間違っていたと分かって、本当に  
すまなかったと思うのだがね。というのは、あるとき、電話をかけていて自覚したんだ。  
私の発音はよろしくないよね。たとえば四、十、二の発音は、言うほど言えばまずくなる。  
電話の交換手がよく聞き間違えたんだよ。」

今日もまだ暑いので主客二人は木陰で休んでいる。

先生は起きたばかりだった。昼寝だった。大家さんがひざを抱えて座っているのを見る  
と、先生もそばに行って好きな石を選んで連れてって一緒に座った。

「はあ～あ——ほらね、私はまだ寝足りないように見えるでしょう。一日に一回あくび  
をすれば、意外にも悠々自適なものだね。」

「さっきのあくびは極めて醜かったよ、そう見れば、年を取っているが死ねないのは本  
当に……——まあ、まあ、言わない、言ったら良くない。」

「これからは口を滑らせないようにするべきね。そしてあまり得意にならないように。

——あなたの生活はそれほど楽しいようには見えないわね。ただ自分がともすれば醜い役割を装っているだけよ。でも結局はあなたが神仙（なんの苦労も気がかりもなく悠々自適の生活をする人）だと思うわ。誰もあなたの心配をしない。神仙は神仙だけど、神仙に嫉妬する人もいない。」

「では、私を嫉妬する人がいるということ？まずあなたが私に嫉妬しているだろう？ふん！——まず私より暇がある人がとんといないから、悠々自適の生活というのは本当だが。しかしこれは私の功労だ。私は是非得失をはっきり見分けているから、この世界が私を疲れさせることができるかい？」

「そうそう、私が言いたいのはそれよ。またその話を言ったね！ほら、ほかの人たちはみんなあなたを忘れたじゃない！ここに引越しに来たあと、誰かの手紙をもらったことがあるの？」

「この話はまあ、適切だね——あなたは私の腕前がまだみごとなものではないとよく分かっているね！人が互いに忘れあつたら、もっと長生きができるかもしれない。私はまだできない。誰かが懐かしがったら、いつもこだますることを楽しみと感じて喜ぶよ。まるで、あなたのような田舎のおばさんたちの人情と同じものようだ。

つまり、どういってもこれはまだ自分と離れられない表現だ。

昔ある『小娘』が私に対して厳しい警告や大きな苦痛をくれたこと、まだ覚えている。彼女から、『あなたのどこが愛の人だ（この愛人の意味がはっきり分からない）と言えるというの？あなたが自分で言っていることじゃない。』と言われたよ。

ほら、聞いて、この話をどうすればよく説明できると？驚きだ。この人、その髪、金黄の色、夕日がこよなく美しく、桃源郷に立って落花を見るのは、本当に花に晩照を残られるよ。だから、その小娘を黄毛丫頭と読むのだが、意外に彼女は怒らず、とても自慢げにしていた。」

「彼女は外国人みたいね。」

「ああ、今のところ私はまるで抽象的な人になった。すべてのことを全部冗談事にしてる。自分は自分自身を材料として、何度となく繰り返し、ただ一つ手で——昨夜、私は確かに夢を見た。

そう、夢だ……目覚めてからそれは確かに夢だと気付いてから悲しみに堪えないのだ。うら寂しくて、まるで異郷にいるように感じるよ。まるで月の世界のような。私は哀れにも、夢で私の現実を見たが、私の現実は実にただ一つの夢だ。私の母が知ったら、私に嫁を探してくれるといった——老丈（老人に対する敬称）、あなたはいつでも私たちのこの少年心情を許してくれるでしょう。」

「分かる、あなたは……しないで」

「あなたに何が分かるのか？家賃を払うときにいらないと分かる？もらえばいいのに、

そんなにいっぱい話さなくてもいいから、気を使うのだよ！あなたのほとんどが好意だとは良く知ってはいる。今年はやい年ではないし、交通銀行（ここの交通銀行の意味を良く知らない）、私が出して、受けてほしいから。このときは、あなたのはずか、私のはずか、誰でも多分手離したくない……あなたは分かるというが、いったい何を分かっているのか？私は自分に及ばない。泣くしかないよ……」

「ごさかしくしないで。泣くのが紙でうろうするものじゃない。」

「もし私は林姑娘と同じく、何かすると目がすぐ赤くなって、そうするとあなたに教えるよ、家にいれば孝行な人になる、国にいれば——今のところは大衆領袖になるといえばいいか、つまりあなたがいるこの田舎のようなどころに来て神仙になってうぬぼれる必要もない。

まあ、この話は全部よそ行きの言葉だけど、莫須有先生の話は従来にとっても慎みだから。今日あなたの教誨を聞いて、常に指摘してもらえようなものだ。筆を下ろすことは一番得意になりやすいものだから、これから気持ちを落ち着けて、落ち着いた態度をとるために特に工夫をしないとイケない。」

「あなたの話を聞いたらまた分からなくなった——どんな心配事があるというの？」

「では、教えよう。どのみち神様でも知っているのから。アーメン！

このような時に涙を出したら孤児や寡婦を騙せると、私は何度も思ったものだ。おそらく私はもう出家はできないだろう。しかし、修行之道がすべて分かるとも限らない。ただ、若いころ出家した坊さんは、何も分っちゃいない、とだけは言える。彼はこの事業をすべてだめにした。」

「とにもかくにも、あなたはさっぱりわけの分からない人だわ。」

「心配ない。この世の中のことをやらない限り、もしやるとしたら罪なことではないと思う。」

「大胆だね。」

「ほかに、自分の狭量さに苦しんでいる。いつも私は人に反感を持つ。自分自身を嘲笑する。人間というのはどうしてそんなに退屈なのかね？人生というのは間違いだらけになってもいいのではないか？

しかし、私はいつも心配する。お互いの生活に傷つけないように配慮するために、たくさんことを知っている。生存するために命を消失することに対してかつてに話そうとしない。

人間が禽獣と違うのは、仁者人だからだ。すべてがこの「人」という字に基づいている。「人」という字にはもちろん己という字も含まれている。

文明というのはここから考えればよい。もしあなたは分かるようになれば、よく考えないといけな。私の一生は過度の疲労だったから——いずれにせよ一日白雲千載、悠々に天に昇ったような気持ちになるだろう。

あなたはすべて分からない？どんな人でしょうか？まさか影と競歩するのではあるま



い？影と形が問答するか？

ははは、今日は完全に一人狂言だったね。

さあ、寝たから気分がとてもよい。ことわざでも、オウレンボクの木の下に念仏し、（馬の耳に念仏の変形）苦しくても楽しいものである、というではないか。」

「あら、なにかしら、聞いて。」

「私の行進曲を聴くのかい？」

「ちがうわ。ほら聞いて、外はどうしてこんなに賑やかなの？」

「じゃ、ちょっと見て来よう——ちょうど逃げるチャンスだ。」

そして、大家さんをほうっておいて、すっと立ち上がった。

---

先生の一生には絶対にたくさん人に告げられないことだから、将来きっと誰かが私（作者）に尋ねるだろう——しかし私も莫須有先生に関することはまったくもって無知である。そして、この間、先生のお金の出所がいったいどこであるのかよく分からない。

これは（お金の出所はどこか）彼にとっていったいどんな影響があるか（分からない）。彼は大言を言うのが好きな人か？手にあまりお金がなくても、私と同じようにいつも愚痴をこぼしているのか？まったく知らない。さっぱりわけが分からない。

---

だが、先生はそれほど遠くへは行ってなかった。先生は自身のことを陰であれこれうわさしている人がいると知っている。そして、耳をそばだてて、夫子之壁にもたれて少し盗み聞きした。そうこうしているうちに、由々しき事態が起きたようだ。

下を出したがなかなか戻れない。私はもっぱら大きい話を言う人か？餐霞之客？飲露之士？今年の運がどうしてこんなに悪い？……

「先生、ここで蝶々でも捕まえているのか？」

「あなたは？三脚猫太太！なぜ私が蝶々を捕まえていると分かるの？あなたは『紅樓夢』を読んだことがあるとでも？薛姑娘を知っている？ようだね、この蝶々はきれいだね。うちの郷里ではこれを梁山伯と言う。見て、蝶々が飛んでいる。さて、あなたはどこに行く？」

「イナゴにサツマイモの苗をほとんど食べられたから、追い払いに畑へ行くのよ。」

「確かに今年はイナゴが多いが、私から見れば、イナゴはサツマイモを食べていない、あなたは私を風刺しているでしょう。この前、ある明月の夜にあなたの土地の境界にわざわざ一つを盗まれたそう。しかし、あなたが来たのがちょうど良かった、それは私がここで首をつりたかったから。この木を見て楊太真が菩提木で首をつりたかと考えている。」

「なぜ？」

「私は切り株の番をしてウサギを待つ。私は一つ銅貨を落としたから。」

「どこに落としたの？」

「あなたは探さないで。見つけても私のものだよ——この木の下にある。私の大家さんから聞いたけど、どうして外はこんなににぎやかなの？ちょっと見に行ってくるよ。ではまた。」

輝く太陽の下、一本古欅木、少しの化粧をした近隣の奥さんたちが、皆それぞれ言い争っている。

そんななか、先生は傍観してどちらにも加担しない。しかも先生は口を固くつぐんで話さない。咳ばらいを何度かしたが、おそらく知らぬまに得意になりすぎて喝采してしまったのかもしれない。

「私にけんかを売る気？あなたに賠償金を払ってあげるわよ。こんなささいなで私とけんかするなんて、まったく理解できないわ！——私はあなたを怖がるの？」

「あなたを怖がるって？ふん、不思議なことを！なにさま！？」

「あなたは何を怖がる？なんなのあなたは！ふん、鏡を出して自分を良く見なさいよ！」

「私は口がおごっている！ほかの人のご飯が出来上がり、餃子を作ると見たら、すぐ子供を抱いて手伝いに行く！」

「ふん、死んだら閻魔様に舌を引っこ抜かれるわよ！まったく無実の罪を着せる人ね！」

あなたはこれが本当に負けた得意だと先生は内心思っている。その奴は張飛がハリネズミを売るみたいよ——人が強ければ商品を処理しにくくなる。先生はある日本人からこの北京語を学んだばかりだ。そんなに上手には話せないし、この場合に使ってもいいかまだ分からない。とりあえず彼女の次の話を聞こう。

彼女は

「あなたは盲人なの？見えないの？私の髪を結う油の箱をひっくり返したのよ！」

「私は盲人よ。見えないわ。私をどうするの？」

「あなたをどうするって？——あなたをいじめてあげるわ！男に教えに行くわよ！」

「あの人の男は仕事がよくできるならあの人が男に教える！」

「仕事がよくできるかどうかは別よ！あなたと関係があるの？あなたのお金をもらったか？あなたの食べ物を食べたか？」

先生は、「このことはよく尋ねないといけないな」と内心考えている。叱ることなら叱ればいい、殴ることなら殴られればいい、どうして男のことを話題にださないといけないのか？何者だろう？

幸い、隣に太った丫頭が立っていたので急いで挨拶した。

「小娘さん、あなたもここでけんかを見物かい？家はどこ？名前は？」

「私は小白子といます。」

「では失礼だが、この二人のおばさん——さっきほど寝ていたときにその古欅木の下に髪を結う油を売ると聞いたみたいだね。これはよい題目だ。たぶん髪結い油の箱のせいで思い出したかもしれない。それはするべきであることかどうか？非常にするべきではない

こと。じゃ、髪を結わないといいのではないか！だから天下はめちゃくちゃになった。それぞれ化粧してけんかをしたら、少しは面白いかもしれないし、あまり俗っぽくなり過ぎないからだ。でも、それなら詩情もなくなるのが当たり前のことだ。その奴はいったいどういう人か、もうよく分かったか？」

「私のおばあさんは今日私を学校に行かせてくれなかったわ。」

「小娘さん、少し化粧したでしょう。かわいいね。」

「遠く見ると青山がある、近くを見ると姉妹が二人いる。有無を言わせず。口も二つだ！」

「なんの歌を歌っているの？」

「謎、おばあさんから教えてくれた——ほら、やっぱり口が二つだ。」

「はは、小娘こそね——」

「先生、白丫頭はかわいいでしょう！」

三脚猫太太は勇敢に立ち向かったのだ。

「三脚猫太太、どうしてあなたも来たの？」

「先生、私に無実の罪を着せたわね。どこに銅貨があるの？」

「もし無実の罪を着せたなら、あなたの時間を無駄にしたね。今日、私は本当に忙しいから、あまり周到でない。見て、その二人のおばさんのけんかはますます激しくなるみたいだ。」

「あらあら本当だ。あなたたちか。いいんじゃない。大したことないじゃないか。」

「三舅母、見て、あなたはほかの人の髪結い油の箱を打ち倒したよ。まあ、新しいのを買えばいいから別にいいけど。あなたを攻めているわけじゃないわ。でも、どうして彼女はまた私のせいになっているの——私のせいなの？私が間違えたの？三舅母！」

「まず自己紹介をさせてください。私は先生をしています。あなたはおごり高ぶって人を威圧していると見たら、さっきの話も聞いたが、今のような状態だとあなたの言い訳は筋が通っていないかもしれない。もう一回三脚猫太太に頼んで是非を判別するね。」

「え、この箱は全部こぼれちゃったよ！え、まだ少しだけある！」

三脚猫太太はそういった。

あのおばさんは遠く離れて座ったままで動いていない。次のように言った。

「あなただけでよく話せるね、あなただけが口を持っているようね。——死んで閻魔に舌を抜かれるわ。」

「三舅母、ほかの人が知らないと言われる——あなたから見ると、私は人をいじめているというの？私の髪結い油を打ち倒しただけでじゃなく、私が男の勢力を頼んで人をいじめるなんて！彼はもう一週間帰っていなかったのよ。今、もう歩哨に立っていない、巡邏長になったから……」

先生は大声で

「こんな恥ずかしいことはもうやめなさい。彼女は両眼を泣きはらしている！こうなる

としつていれば、はなからやめておけばよかったのに！」と叫んだ。

「こうなると何か悪い？当初はどう？あなたはどのようにして口を出したの？」

「あなたとはけんかしないよ。私は帰るよ。」

## 第十章 莫須有先生は今日日記を書く

光陰矢のごとし。月日が経つのは早いもので、知らぬまに、また莫須有先生の昼寝時間となった。目を閉じてても、心が静かになるのはとても難しいことだと思う。世の中に私と関係のないことは一つもない。静極却嫌流水聞（静かなのに流れる水の音がうるさいと嫌う）、閑多翻笑白雲忙。

家の後ろのしつけの悪い子どもは私の壁に先生がばかだと書いた。きっとその子は先生がそれを見たら怒ると思っている。天皇皇、地皇皇、我家有個夜啼郎。今朝も外出時にもう一度それを読んだ。何か新しいスローガンでもあると思ったが、また騙された、と自分でもおかしかった。

ある床屋がいる。その床屋は私のことを、金儲けについてまったく哲学がないと思っており、私は嫌われている。これは我我歌だと言える。私はまだ眠れない。

犬吠深巷中、鶏鳴桑樹巔、しかしこれは私と何の関係があるか？それが詩の情趣になるほどなれば聞いたらもっと眠れなくなる。そうしたら私は、無父無君是禽獸也と詈而罵之。

同郷の人たちの中に闘う人がいる。或乞醜焉。ある儒子は八月十五の月光が明るいと歌う。七月七日は穿針夜だが、深夜、誰も私語しなくても私には聞こえる。それは針が落ちるのだ。そして私はおそらく寝むりに落ちたのだろう。というのは寝言を言っているからだ。

凡想ではないが、私の昼寝間口を飾るためなのだ。しかし、あなたたちは知らないが、与木石居、与鹿豚遊、それが舞台の下にいるよりそんなに眠らせるようなものではない。

だが、あなたたちは絶対に私に追いつかないところがある。私は神経質で、孤独で訪れる人も居ない人間であり、優柔不断であるが、しかし、自分をはっきり分かるだけでも十分だと思う。

しかし、私の良い夢を失うのが絶対だめだから、そして、夢、夢、夢のようであるが夢ではないようであるが、夢で彼女を見た。

彼女は村娘のような本来の姿だ。彼女の父親は金持ちで、静かだが美しい娘だ。月姉は今ではもう商人の奥さんになったね。その昔、湘雲と宝釵は大変仲が良く、いつも姉妹は二人一緒に女紅をする。庭にはワスレグサがたくさん生えていた。彼女は荷包を刺繍しているが、ふと、なにか考え事でもあるかのような様子になって、手を止め無言になった。姉

はすぐ妹の考え事を見抜いき、確かめて聞いた、

「なにを考えているの？」

「昨夜、夢を見たの。」

「どんな夢を見たの？」

「見たのは——教えないわ！」

「あなたが教えてくれないってこと、いわなくても分かるわよ——私は話があったらなんでもあなたに教えるけど、あなたはいつも教えてくれないわね！」

ああ、私も夢の中、知りたくてたまらなかった。夢の話でしみつたれるものじゃない。

彼女はいつもしみつたれの人のようだったが、実際の彼女は違う。北京の女子大学生のように女中に買い物をやらせるが、お金を騙し取られる、といつも女中を信じられずにいる人ではない。けちな人ではない。

確かに気前が良い気楽者より、もっと束縛や制限も受けなく、鳥さえも影を隠さない人だ。一枚の鑰鎖の持ち方は才能があるといえるのは本当に一つの忠実の与えられるものだね。

「姉さん、あなたのこの二つ詩、どう説明するの？」

そうだ、こういうふうを書く。可愛いその人はそして「この二つ詩」を手にした。しかし私は夢でただ素手だけが見えた。その手の中に村娘たちがいつも使っている紅をつけていたから、詩というものが目に入らない。しかし、お姉さんは彼女の手からこう見たりそう見たりした。詩を出して証明とする。

破我一床蝶々夢、輸他双枕鴛鴦睡。

この詩はでたらめな言いぐさで、どう言えるかどう言えるか、それでかわいいお嬢さんは怒りが顔に表れた。

「言い間違えただけよ！私は彼が——と思ったのよ。」と言った。

「分かった、わかったわよ。この七つの字はあなたの夢でしょう！あなたは彼が——あなたはこの『彼』という字がある人を示しているでしょう。私のおばさんは妹のことをまだ考えていないけど、妹はもう自分をお嫁にしたのね！」

夢で、口のうまいこの「姉」は「妹」の顔を真っ赤に話させた。それで私はこの静かな娘の後ろに隠れてこっそりと十字を画いた。

さてこの月姉は人となりがすごいものだそうだ。妹ですら見過ごすことはない。まるで旗人のような怠け者で、みだりに痰を吐いている。そして先生は姉を皮肉った。

先生は、以下のように話した。「観世音の手の上に浄水瓶を載せている。浄水瓶にはヤナギ枝が浸されている。こぼそうとすると、すごく良い姿勢で人間の中にこぼさないといけない。本当にその万牲園の石獅の口から水を噴出するよりもっときれいだね。」

話がまだ終わらないうちに、姉は「ほら見てみてそれが観世音だわ」と言って、「見てみて」といいながら先生の顔につばをかけた。

彼女は笑い転げてしまった。そして—————

——先生は目が覚めた。大家さんが私の禪をアイロンがけするために準備しているようすが遠くから聞こえた。

-----（おかしいね、こんな変な夢を見たなんて、下劣な夢ではなくてまだ良かった。）

一、先生はしんと静まりかえって目を開いた。

ちょうど正午である。入り口の木陰がほどよくいい感じだ。

「外に出てちょっと涼もう。」

あっという間に先生はもう木の下に立ち「ふぁふぁ…」とあくびをしていた。知らぬ間に身分がつりあっている侏儒の一人も、同じように出かけてから地球と離れられなくなった。それは彼がもう入り口の前にいるから、先生は彼を覗き見た。彼もうぬぼれなく顔を見合わせた。人生の中で新鮮な一瞬だ。

そのときに、身分がつりあっているもう一人の50歳に近いおばさんも出必由戸だね（この意味がちょっと分からない。たぶん必ず子の家から出た人の意味かもしれない。）

寝ぼけ眼でぼんやりとしていると、知らずに下駄が折れて倒れそうだった。しかし彼女は笑いながら急いでしっかりと立とうとした。

私だってどうなるの！——私が思うに、なりふりかまわない人だが、しかし誰でも乳を飲ませてくれる者は母であり、三年のうちに二人の子どもを育てた、あなたのような侏儒見たいな人から見られることの何を怖がるのか？

先生はただ、外来の人だから彼が文句を言うのを恐れているだけだ。うちのような旗人の女はいい様子じゃないと言われたら良くないでしょう。私は門の脇の入り口へタバコを買いに行っても、一歩退き、服をきちんと着てから出かけるようにしているから、さっき少しだけ顔を出したが、見られたくないので、すぐに引っ込んでしまった。そして、侏儒は唸々書空（驚きいぶかる声で）、時日曷喪、たいへんだ、たいへんだ、本当に人にうまく活かせない年だ。

私には、窩窩頭のように、人に取り入る必要なんて全くない。だから私はもう入る。そして、先生ははっと悟った。彼らはみんな外に出たが、みんなはまた入ったのだ。しかし、先生は始めから最後までずっと三人居る前でも彼が一人ぼっちであると思っていたし、三人が居た後でも、彼がみんなと離れて孤独であると思っていた。一人で木陰の下に行ったりきたり散歩するならこんなに広い木陰はいらない。

断続的に言うと、我々の時間は同じであり、我々は同じように夢を見る。ただ見る夢が違っただけだ。

それから涼しい風が吹き、「ああ、快適だ」といった。

さて、毎日焼餅を売りにくる人が来た。「焼餅だよ、焼餅！」と呼び売りをしている。そこで先生は売り子に「あなたは何をしているの？」と聞いた。

「焼餅を売っているんだよ。」

焼餅を売る人なのだ。先生はそれを聞いて体をのけぞらせて大笑いをした。そのうちにてんびん棒でもって水を運ぶ人も来た。焼餅を売る人はまだ離れていないが、水売りも木蔭の下でちょっと涼みたかったから、止まって涼んだ。だから先生は聞かないようであり、彼と知り合いのようでもある。先生は水運びに

「あなたは どうしてそんなに汗をかいてるの？」と聞いた。

あなたの体に汗が いっぱいと思って、先生はまた行ったり来たりと歩きはじめた。

先生は行ったり来たりと歩いている。北極に着いたが、地球が丸いと気づいて、そして先生はまた体をのけぞらせて大笑いをしていた。「私は禅宗の大弟子だ」と言った！しかし私は感嘆符を使わない。

頭を下げて毎日便所をくみ取りに来る人は人違いだった。先生に「道をあけてくれ」と叫んだ。すると先生の犬が肥汲みに迎かってけたたましく吠え掛かった。先生は驚き、先生ははっきりしなくなった。仕方がなく先生は急いでこちらへ皆さんと挨拶するしかない。

「皆さんは木陰の下で涼むのが好きですね！」

その人たちはここしばらく、先生の家の前に集まってひそひそ詩書をしているのだが、先生はそれについてまったく気づいていない。肥汲みはまだ肥桶を背負っているが、曩子行、今子止、水汲みはてんびん棒に座禅をすることができ、焼餅売りは忙しくても曰くと、某在斯某在斯、それはあるお婆さんは孫を抱いて、外孫女を連れて焼餅を売りにくるからである。

「あなたたちも牧豚奴の芝居をするのが好きなのですか？時々お金を賭けるのも面白いかもしれないね。たとえば、今のような大空の下ですればよい。それとも葬儀屋の人たちのようである。あなたたちは必ずその居眠りやさんたちを見たことがあるでしょう、面白いではないか。」

先生がここまで言ううちに、人々はすでに引き揚げていた。まるで、その葬儀屋の人たちは棺おけと一緒に行ってしまったようで、いいえ、昇而奔之。

先生は、「人生は、人と出会い、知り合うことが面白い」と思っている。というわけでその道行く人たちを見送った。莫須有先生之躲婆巷蓋は南北一字の形である。そして、東と西を突き通ることもでき、だからそれと十字街とはすこぶる同じく言える。

先ほど焼餅を買ったおばあさんは、家の後ろの大老太太だ。孫を抱いて外孫女が焼餅を食べているのを見ている。彼女は先生をみてちよっとうなずいた。たぶん彼女も少し話したいのだろう。

「この子は私の孫なの。一歳の誕生日は過ぎていないわ。八ヶ月くらいよ。でもそうは見えないでしょう？生後半年の赤ちゃんと同じくらいに見えるでしょう？」

「私は意見を言いませんよ。」

「山東で生まれたのよ。この子の父親は山東省で働いているから。去年、奥さんを一緒に連れて行きなさいと言ったから、奥さんも山東へ行ったの。そのあとでお嫁さんは赤ちゃんを産んで、また戻ってきて欲しいと言ったから、奥さんは赤ちゃんと一緒に戻ってきたの。」

「私の話は全部削除された。」

「私の息子のことはまだまだよい。一ヶ月のお給金が二十円で、鉄道局の給料は借りがないから。」

赤ん坊が泣くので、彼女は家に戻ろうとした。しかし最後にまた「先生、彼も奥さんの話を良く聞くよ!」と言った。

彼も奥さんの話を良く聞くって、莫須有先生は心で、今日の記事がこれで終わると思った。私はこれから部屋に入って『南華経』を読むのだ。ちょうどそのとき大家さんが出てきた。頭を前へ突き出したばかりのところ、壁がすこぶる深いため、頭を前へ突き出すと先生だけが視界に入った。

「先生、誰と話しているの？」

「知っているよ。あなたは誰かと話したいから出てきたんでしょ？」

「確かに、話しがしたいから出てきたのよ。だから、急いで服を干して、乾かした服を片付けて、片付けてからまた服を畳んで、やっと全部終わったけど、私は忙しいだろう!しかし、誰かのために喜んで何かするのは、あまり公平だとは思わないね。しかし、私は計画して、何か準備するとか処理するのは好きだけどね。だから、もし先生が自分で自分の服を洗うなら、私はまた怒るわよ。あなたは私に不満を抱いていると思うかもしれない——あら、大きいエンジュ木の虫だ。あらあら、とてもざらざらしているね。」

先生がそっちを見ると、本当に怪しいね、そのエンジュ木にやっぱり虫をつられている。しかしおかしいのは、その虫が人の驚いて不思議がることを分らないが、自ら驚いた。先生は三度空間で飛び込んで虫を捕まえた。

「先生、あなたにもう一回教えるわね。うちらが礼儀とかが好きであると責めなければ良いが、先ほど、あなたは頭角を現したと見たのが二奶奶である。私はエンジュ木の虫と叫んだと聞いたら、彼女はまた出てきた。私は彼女より先輩だが、私にもう一個単腿兎——二奶奶、あら、私に恥ずかしがらせないで、挨拶しなくてもいいよ。元気？」

「ええ、元気よ。」

「今日の天気はとてもひどいね。」

「ええ、ひどいわね——私はちょっと仕事をしたかったが、よく眠くなるよ。」

「子どもの世話をする人は仕事なんてする暇はないさ。こんな盛暑の日を過ごして、少し爽快になればまた考えればいいよ——しかし、夏に私が一番怖いのが虫だ。木の下で涼むのはいいんだけど、虫がいれば、ちょっと、ね。」

「確かにね。」

「去年うちの庭には長い虫がいた。やあ、たいへんだったよ、てんびんの棒くらいの長さで、先生のおかげではないと私は仕方がないよ、逃げるしかない。先生は手当たりしだいに石を拾って虫へ投げて石を当てた——知恵あるでしょう。」

ほら、うちのようになんか取りに行ったら絶対に間に合わないよ。虫は走るのが速からね。たいへんだ、私は虫をととても怖がっている。」

「確かに——みんな虫を怖がっているよ。」

風が吹くと、先生はすごく喜び、人生には他人から話を聞かれるのが本当に足りないものだと思います、しかもどうしても自分に関する話は聞かなければならない。もし私の名誉と



関係がある話なら一番言いと思う。お世辞を言われれば、あなたたちの話を聞こうと思う。

「ここらの石は全部先生が持ってきたの。この石の上に座りましょうよ、二奶奶。」

「そうね、座りましょう——さ、大媽も。」

「ええ、そうね、私も。」

先生は「私も座るよ」と言って、みんなと遠く離れて石獅子座に座った。先生は内心では、「遠く離れてこんなふうに内緒話を聞けばいいのではないか」と思ったが、しかしそれでは話の内容はまったく分からない。

「そうだそうだ——すべて家庭に関する事柄だ。先生は私の口を動いていることだけ見えた。」

「私には聞こえる——別人ではない、莫須有先生は私がうなずいただけをみた。」

まるで埒外の人で、先生はひざを抱いて自己満足するしかしょうがない。

余計なお節介をしないけど、ただたまには好奇心があるだけだ。しかし好奇心があることは実は珍しいものがないと同じだ。だから、恒星以外への眺めるのがしなくても良いのだ。私はぷりぷり怒らせざるをえない。空から完璧が落ちて欲しくはないが、しかし私のこの白圭之玷は惜しい。

もしあなたが別な天体があると聞いても家を懐かしがることは、あまりないでしょう。ただ敵に対しての深い恨みと、友に対しての愛情が含まれているところからなかなか離れたくないのと、同じ気持ちだ。

私の家の入り口にはいくつかのいい石が置いてあるが、それは童子六～七人くらいが座れるように用意したものだ。今、あなたたちは二人だけなのに、一人で二つも石を独占している。幸いもう二つ石が残っているから、私も座ることができる。さもないと、あなたたちは本当に私の家の入り口のほうへ邪魔しに来るかもしれない。それはいやだ。

おかしいね、世の中のことは実は心理作用とつながるもんだね。

話が一段落となると、また一人近隣の女が来た。「どうぞ、どうぞ、座ってください。」なんて、また何やかや話が始まり、また一つ石を使われた。

先生は従来から人の名前について気にしない人だ。だから、この小説でのこの新しい客は無名客になるしかない。しかも、彼女はちょうど口を出したくない人ではない人で、人が話しているを聞いたら、仕事を持ってきて木の下で仕事をやりながら人の話を聞くだけで、しばらく（現実に）生きることを忘れてもよいのだ。莫須有先生は彼女がやもめ暮らしの人だと知っている。

その後、三脚猫太太も来た。三脚猫太太は生ごみを入れる桶を運んでいるままで来た。彼女は生ごみを運ぶために出かけたわけだ。みんなは生ごみを入れる桶を先に見てから、また顔を上げて三脚猫太太を見た。みんながいやいやながらこちらから通っていくと思っただが、しかし三脚猫太太はみなさんと会ったら敬礼して、「ここは涼しいね。」といった。

「三妹妹、あなたもこちらへ来なさいな——あなたはいつも忙しそうよ。」

先生の大家さんは三脚猫太太を誘った。

「三舅母、私は起きない。」

二奶奶のなりふりかまわない姿勢で三脚猫太太を誘った。

「座って座って。あなたは起きなくても——私も少し座る。」

先生は、遠くから三脚猫太太がてんびん棒をおろしたのを見るとすぐさま、今日の日記を服から取り出した。今日は、きっと三脚猫語録を記録する日だ。

はやくはやく、——私は自分が早くと催促している！早くノートを取り出しなさい！ゆっくりしてゆっくりして、早くして早くして、——もっと早くしなさいと！面白い面白い、一番目の話、二番目の話、面白い面白い、今日明日、来る日も来る日も、あったら挨拶して、腹を縛っていてひもじい思いをする、三脚猫太太だけ当時の嫁入り道具を完全に保留している。

あなたたちはひまわりを保留して、落花生と炒り豆に相当するから、彼女が売国奴だと叱る。彼女が土地を開墾する人だと叱るのは、三脚猫太太が一年間に八個糧食を作るからだ。あなたたちは豆炭を買いに行くときには小さなかごを持っていくだけなのに。

今は皇帝がすでに倒れ、あなたたちの個性も埋もれたのだ。そうでなければ、もっと面白くなるかもしれない。

三脚猫太太の娘は本当に面白いね。ある日、彼女は靴直しの職人のところへ新しい靴を取りにいった。先生が道でぶらぶらしていると見つけると、彼女は急いで手を背中へ隠した。先生に新しい靴を見せたくなかったのだ。まるで、先生が南のほうへ行くと、彼女は北のほうに行くかのようなようだ。往者大道如矢直視（行き人の大道はまるで矢のようにまっすぐ見せるようだ。）来者手剪在背後低看（来る人の手は後ろで隠して頭を下げている。）

一心に急いで通り過ぎようとした。彼女が振り返って先生の方を見ると、先生も振り返って彼女を間違えてみた。しかし、彼女はまだ手が剪みのような形で後ろにおいていて先生を見ようとしていたので、先生にその新しい靴を見られてしまった。しかし、彼女は見せたくないと思っていて、手をまだ後ろに隠していた。

彼女はたぶん学校に行っている。とある日、その日は新学期が始まる日なので、他の子はみんな新しい服を着ていた。「お母さん、私も新しいブラウスを着たい。」というとき、お母さん（三脚猫太太）は彼女に新しいブラウスを着させた。

新年の日は、お母さんはお粥を買いに行きなさいと、今日は新年で、お母さんは新しい綿入れの上着を着なさいと、すると、私は新しい綿入れの上着を着て、とてもうれしくて、街へ行って、お粥の工場へお粥を買いに行った。

今日は新年で持ってきたら豚に食べさせると、しかし、工場へ入らせない、すると、私は泣いて戻ってきた。三脚猫太太はあまり知らないが、お粥工場の人には小娘が新しい綿入れの上着を聞いていると見て、彼女が貧民だと思わなかったのだ。彼女を入らせなかったのだ。これで、一枚の紙をただ一行だけ残っている以外には全部書き込まれた。

「くしょん！」

三脚猫太太は大きなくしゃみした。そして、彼女は生ごみを入れる桶を持って帰ろうとした。

「三妹妹、もう少し座っていかないの？もう帰るの？」

「ええ、もう帰るわ。お姉さん。」

「三舅母、私は起きなくてもいいよね。」

「ええ、立たなくてもいいから、座って、座って。」

すると、座ったままの人は彼女の指先で帰った人の背中を指して、口で手まねの代わりに、

「この三奶奶は本当に訳が分からない人だね。みんながここで涼んでいるのに、なぜ生ごみを入れる桶を持ってくるのさ、ちょっとね！」と言った。

「大媽、私はいつも彼女を取り合いたくないのよ。」

そして、また、三脚猫太太の庭にある棗の木を指して、口で手まねの代わりに、「私は、夜中に風を吹くと恐れる。風が吹くと、私の棗を落とさせるから。夜が明けたらすぐ起きて、急いで拾おうと思う。しかしドアを開けると一つも棗の実が残っていない。全部彼女が拾ったのよ！彼女は本当に早起きだね、うらやましい！」と言った。

先生はその話を聴いてすぐ日記を開き、誤りを訂正しようとした。

「大家さん、それは去年の話だろう。今年はその季節じゃないよ。」

「それはそうだけど、でも、そのことをずっと忘れられなくてしょうがない。」

その話を聴いたら、さっきほど述べた、そのなりふりかまわない人の視線は庭を囲む塀を越えて、その青い棗を見ている。そして、深く考え込むように「実は私も、毎年少しだけ拾って食べてたの。あまり怒らないでね。」といった。

「二奶奶、うちらは仲がいいので、貴方は気前が良い方で、所謂花を折っても髪に入れなく、手当たり次第にいくつかの棗を取っても大丈夫だよ。大丈夫だよ。」

そのとき、三脚猫太太は後ろの塀から声を出した。

「あら、半分瓢の冬瓜はもういらぬの！——あら、うちの豚の分だ！」

なんだ、たぶん三脚猫太太は先生の食夫稻之家に入って生ごみを拾っていたのではないか。その生ごみの中には半分瓢の冬瓜が残っていたわけだ。

「くしょん！——誰か私を叱っているわね！」

なんだ、三脚猫太太は二番目のくしゃみだ。先生はまたすぐ日記になにかを書きはじめた。笑わないで、笑わないで、あとで、別な人がこの話を聞いたら絶対にうちらを笑うのだ。面白い話だ、面白い話だ、本当に笑わせるね。

## 第十一章 莫須有先生は恋文を書くこと及び別のこと

先生はこの日、いったいどうしたことか、お茶も飲みたくないし、ご飯も食べなくなかった。窓や戸を全てしっかり閉めていて、今もそのままにしている。

なんと、事前にスローガンを言っていた。それは、「今日は万やむを得ないことがなければ、大家さん、うちの部屋に入らないでください」と言う話だった。

「万やむをえないこと」というのは何なのか？たとえば、近隣が不注意から火事になって、そろそろ災いが及ばれるところに、必ず拳骨でガラスを撃破して鈴を押してください。それは一番大事なことから。もし私が八十三万の軍隊を統率し、ひげを切って服を棄て

るという状況になっても、あまり問題ではない。

日傷人乎不問馬、若夫老農老圃、どんなことでも一步譲って考えるのは絶対にだめだ。このような災難と会うのが困らせなく、もしこのように焼けて焦げられたらまったく世間の中で一番退屈なことだと思う。まるで私は強引に連行されたと同じのようなものだ。もしその場合だと、なぜ私は逃げないかと思うの？これはその一の原因である。

もう一つ、たとえば、親切でありあふれる真心で召されて、ある人が来た。まあ、是か？非か？夢か？つまりあなたははやく通報しないとイケない。以上の二つ理由以外では、絶対ドアを開けてはいけない。誰が出かけるとドアから出ない人が居ないよ。だから私は絶対に駆け落ちをしないから、安心してください。それで、自殺も絶対しない。この話はまったくいう必要がない。ここはどんな場所か？筆・墨・紙・硯の間に居る場所だ。古聖昔賢光被四表、要するに、全てのことをあなたは責任を持ちなさい……

今、この責任者は外で力を込めて腳踏みをしている。私は必ず中に入らないとイケない！「こんな朝から夜まで、何をしているの！夕日がもうそろそろ西に沈むころよ。」すると、彼女は一切を顧みず中に入った。将上堂、声必揚、しかし少しも反応がなかった。そして、（??）もう一つ防備も加えて、息を殺し、忍び足で歩き、必ず見ないとイケない。

一、二、三、あれ？まだ少しも反応がない。全てのものは人に見られないとイケないような感じで。

屏風に描かれた金鷓鴣の色褪せず、画点すれば金鷓鴣も飛ぼうというように、先生は机に向かっている。しかしいびきもかいていない。本当にぐっすり昼寝しているようだ。部屋の中はまるで風に揉まれ、雨に打たれたように滅茶苦茶だ。

散らかっているのは、すべて梅の花柄の便箋である。それは雲姑娘の枕に縫い取られている芍薬ではなく、宝哥哥のその水上の桃花よりもずっといいかもしれない。

全身、満地、書類、硯、全部落ちられている便箋だ。

「先生は手紙を書いているのね。」

大家さんは離れがたく、もう一回こっそり盗み見た。極目四方、そして、洪涯乃拍肩、

「先生、おきなさい。」

「風雨で夜のように暗い～～鶏がひっきりなしに鳴く～～私は夢で絵筆を伝える～～欲書花葉寄朝雲～～」

「ああ、いい歌だ。」

「突然頭を上げると思わずに～～」

たぶん皮簧のたぐいだ。

先生は目ヤニを拭きつつ

「知らないうちに寝てしまったよ」といった。

「この便箋をあちこちに溢されて、今片付けているところで——」

「そのままでもいいよ。私の体に落ちたら、それが私の袈裟になれる。信じないと、私は坊主のふりをしてみせるよ。」

「ええ、本当だ。阿弥陀仏！」

「悲しい、悲しい。」

「誰に手紙を書くつもりなの？」

「送るのは無理だから、聞く意味もないよ。先ほど飛行機が飛んでいたでしょう？此夜月明人尽望、爆弾を勝手に落とすものじゃない。嫦娥は厭世だけど、しかし死ぬことは一番怖いだらう。死んだら逃げることもできない。」

「まだ寝言を言っているの？」

「雁過也、正傷心、消息を送らないが情を送る——他人が推量することができるなら、その人は解釈することができる。」

「明日は中秋だから、私は少し月餅を買いに行きたいと思っているんだけど。あなたはこの一日でだいぶ憔悴したようね。」

「そうじゃない。私の心はいつも明るいものですよ。天下のことについてしっかり話すことだってできますよ。信じられないなら、地図を描いて見せましょう。ここは黄河で、ここは長江。大江東去、ここに寄ったら九江になる。」

「私はここで生まれ、ここで生きていました。今では国が戦争でひどい有様になったが山河はまだ残っています。春草明年緑、再び戻ってきてても同じでしょう。これこれ、この大きい丸には小さい丸がある、この小さい黄色の丸は、私たちの居る北京です。北京は私の一生にとって最も大事なところですよ。」

「ここから西へ進むと、私たちの門頭村になるだろう。」

「先生、あなたは遁世な人で、誰もあなたの居場所を知らないが、あなたは知らないうちに勝手に漏らしたよ！。他人を責めるもんじゃないわ。全部あなた自身のせいよ。地名くらいなんて誰にも教えなくて、他の人もあなたと同じように苦しい目にあっているよ。心があるのに対策のない人だ。」

「そうだね、一步一蓮花、どうしてこの千山万水に咲いたのか？ふん、綿密に推考させてください——あなたは私の手紙をこっそり見ましたね？これは一番頭にくることです。どうして私が書いた手紙を恋文だと思うのですか？」

「あなたはうまく文章を書ける人だから、抜け穴があることをひどく恐れるけど——でも私はまったく字を読めないわ。」

「私は文章はうまく書けるけど、心がけしだい人がいなければくだらない文章だと思うかもしれない。それでは、この便箋を二つ読んであげましょう——始めの部分は全部事実だから、教えるなどと考えるな。ここの部分を教えても大丈夫だから、それぞれの志を言えるから。それは、

嗟夫銀漢、まるでお嬢さんの布のようである。神様は私にここまで歩かされた、口笛を吹いた。まるで以前に知り合ったように対岸から眺めている。しかたがなく流れ水のような無情である。徹底的に青に澄むが、羨魚がない。漂っているが、赤を流れていない。美しい容貌が空想像だ——但願人長久。

私はどこにいても『人』という字が好きです。賦得公母渡河也。きっと李白の横江詞にすこし影響を受けたのでしょうか。しかし版図が違うから、天河を聞いたことがあるでしょう。詩を作ることや填詞することはいつでも境界が必要なのです。」

「今何時だか知っている？お腹へってない？」

「今の話題をするうちは、ご飯の話を言えないのではないか。だから、目が覚められないほど良く寝るつもりだ。私を起こしたからしょうがない、これから一切ことを全部任せる。少なくとも祝日の前にはお金払いを避ける。」

「お金は今はいいわ、私はあなたのお金が要らないから。」

さっき、茨菇売りがうちの庭に来て一キロ買ったわ。土鍋に入れて煮ているから少し食べなさいね。」

「それはいいですね。茨菇というものをまだ食べたことはないが、きっと上品なものなのでしょう。」

「来なさい。」

「行きます。」

と、ここで私は、（作者は）茨菇について調べた。先生が肉食者だと伝えられていることは一番残念なことだ。

しかし、多少の詩の境地があるところはいいかもしれない。

肉屋を通っていくと、できるだけ急いで行こうと、それは彼に対して悪い印象を残すからだ。時々楊柳岸、しとしと降る雨、傘を持ち、ロバに乗り、青龍白虎橋を渡り、天下第一泉へ行く。それは頭細魚を買いに行くためだ。買って来たらお母さんがいつも使っているやりかたで作りたいから、この一日ずっと彼が忙しいと見ている。醤油、酢、また葱など、てんてこ舞いである。

台所が元々小さいわけではないが、二人も居ると、大家さんはどうしようもなく待たれなくなった。彼女は、「このままだと五十歳にならないとこのような新鮮な魚を食べられないのではないか」といった。

先生は大したことはないよと返事した。

「もしある日私はふるさとに戻るなら、必ずお母さんに頼んで燻製品をたくさん持ってくるようにするから。」「まあ、桃花流水桂魚肥、あなたたちは無分（縁分の分だけど、意味がどういえばいいかわからない。）だ。」

彼は餅を焼くことも好きだ。そして、必ずコンロの隣で自ら見ないと気がすまない。

私の手とぶつかるまで、ずっと話しながら、顔をあわせていた。持ちを手で受けたらすぐ食べるほかがない。しかし、今日はこんな遅い時間になったのに、まだ茨菇を食べさせてもらって、本当に意見を言いたくてたまらなかった――

「もうそろそろできそうだね。」

「そうね。お湯が沸騰したら出来上がり。このものは最後まで食べられそうなものがないほどずっと食べられる。いいものだ。」

「そうですね、すこぶるきれいだ、サトイモみたい。」

すると、もう一つ手に持っていた。しかし、どうしようもなく絶対に庭で食べなければいけないという気持ちになっていた。今日一日、太陽を見てなかったから。唐突に体の向きを変えて、画地が丸で、物が形が変わると別なものになる。

茨菇のおいしそうな匂いがまだ残っているうちに、先生は弁解しようとするが言葉を忘

れてしまった。心配そうな顔だけどまだいい顔だ。

急いで振り向き、「大家さん、これはあなたたちの玉泉山の茨菇でしょう。いい香りがあるから、こちらが居る南のほうの物と似ている。それがどんなものか思い出せない！」といった。

「それはどんなものなの？」

「えーっと、ちょっとまって、今考えている。私のふるさととは私のことを忘れないで—あ、思い出した、菱の実だ。そうそう、間違いなく菱の実だ。」

すると、先生はまったく動かなくなり、ぼんやりと空を望んでいる。人の思想は空を飛ぶ鳥が目の前を通ることと同じになったほうがいい。空の星は出てきたか？トントントン、こんな遅い時間に、まだドアをたたく人がいるか。びっくりされた。

「大家さん、私にまた何かしてくれるの？晩御飯か？お客さんが来たから、先に見てください。」

「先生はとりあえず部屋に入りなさいな。もしあなたに訪ねる人なら知らせるから。」

そしてまた先生は動かなくなる。空を飛ぶ鳥が目の前を通った。空に星が出てきたか？月はもちろん上がってくる。そうか？信じるか？何か？人類なんてかわいそうではないだろうか。しかも笑うべきであるか？昨日の事をあなたが良く覚えているが、明日になると、あなたがどこに居ればいいのか知らない。だからかってに「明朝」だという名をいうか。

周りはずでに深夜になっていた……

「先生！来たお客さんは他の人ではなく二人の巡查だ。」

「話があるのならよく話しましょう。どうしてそんなに気が小さいのですか。」

「別なことがないが、ただ戸籍を調べるだけだ。先生がどんな仕事をするか聞かせてくださいと言われたよ。それから、先生の年を聞きたいそうよ。

今日の午前中にもう一回来たけど、私は彼らを帰らせた。彼らのような嫌な若者とあわなくともいいと思ったから。」

「ははは、さっきの第一問に答えるのが簡単だと思う。気をつけてないうちにもう哲学者になったから、彼らは、私のことを哲学者だと教えなさい。第二問については、母に手紙を書いて、私の年を聞いてから教えましょう。母はきっと私の誕生日を忘れられないでしょう。」

「そんなに面倒くさいことをせずとも、私が適当に返事して彼らに帰ってもらえばいいのではないの？」

「それでは、お任せします。」

「あなたは顔をこわばらせないでください。」

その話を言うやいなや、一目散に走り去った。

## 第十二章 月が昇りあがってきた

夜空に月が昇ってきた。

山中で一日だけを過ごすのが、世の中にもう千年を経つのではないか。もしそうしたらどうなさるか。私たちの地球は動いていないのではないか、静かだよ。

「大家さん、私は話したくてたまらない——あなたは返事しないの？まだ居眠りをしてるか？まあ、やめにしましょう。」

---

先生・独白部

---

まあ、やめにする。何が良い明るい月の夜なものか。月明かりに地面に伸びる木の陰がいい。木の上に風の音もいい。北国の秋はすばらしい。

大家さんはまったく猫みたいで真っ黒だ。しかし、一人が一つの影だけではなく、そうではないとこの地球の意義は本当に少しもない。

私もこの冷たい石に座り月を眺めることなんてしないだろう。あなたの一日の仕事はそんなに疲れて、こんな日が沈んで休むべきである時間になったら居眠りをするのや、ひいては寝ちゃったのが理解できると思う。しかし、あなたは起きたらまたいっぱい話を言わないといけないのがちょっと。人間はどうしてそんなに話が好きなの？あなたは返事しないのだ。私はちょっと涼しくなったから、少し運動すればいいかもしれない。起舞弄清影、何似在人間、一、二、三！これもあまり面白くない。高山仰止望鬼見愁のほうがいいかもしれない。ほら、私は今それを仰ぎ見ているよ。しかし望んでも、望んでもそれを見えないが、でも高山悪林は確かにあそこにある。その深いところに樵が住んでいる白い小さい廟だ。白い馬のような白さ、白雪のような白さだ。夫鬼がもしそれを見ると心配させるもので、しかも西山の中に一番高い峰だ。ええ、誰が私の理想を良く知っているの？月下花前五岳起方寸……

---

「先生、寒くはないの？寒いなら部屋にお入りなさいな。」

「あなたは決めればいいよ。もし私一人だけだったら、おのずと掌握がある。」

「あなたはそこに立って賛成するか？」

「先ほどは一人の想像の中に立っていた。(??)万物の中に花だけ一つ電灯になれる。この話しを言うときは、たぶん彼の大家さんと面と向かって話しているだろう。」

それは夜であり、二人が全部自分の影を見て自らを哀れんでいる——あなたはもう目を覚めたか？今日はどんな日？あら、おかしい、私はどうして何も覚えていないの。このような幻滅したことは今日にもあったと思ってもよらなかった。まるで連続何日間くらいの悩みわずらうことがあったようである。凡そ百言語は全部何を言っているか自分でも分からない。

たぶん文章をこれで絶筆するかもしれない。しかし、突然黄石公は大仏寺から何冊本と



持ってきた、昼足す夜の半分、海を遊んでいた。阿耨多羅三藐三菩提、そして、自ら焼香して、自らぺこぺこお辞儀をする。また急いで向きを変えてあなたと話そうと思う、それは『莫須有先生伝』を作る人がどうしても一つ結末を書くようお願いしたいから。ええ、前途を展望して、おそらく四万八千巻のことをまだ知らないかもしれないが、しかしそれをとりあえずそばにおいて考えなくてもいいから、そもそも一つことをやると決めたら人前に出せるほどしないといけないと思う。少し冗談を言ってもいいけど、最後までうまくできなかつたら、あなたを絶対叱ると思う。あなたはまったく何もできない人で、何も知らない人だ。一人の人生の中にはマックをつける日があるわけだから、すると私は突然ここでマックを付けて日記として書けばいいと思いついた。」

「え、それはいつ？教えてくださいな。必ずあなたにお祝いをするから——しばらく前の日にその巡査があなたの年齢を聞きにきたとき、どうして覚えていないといったの？私に任せるといったから、私は、あなたが三十歳だと返事したわ。」

「それは悪くないよ。そのときは私が城に行きたい。ついでに友達を訪ねる。本当にしばらく会っていないから。そして少しプレゼントを買ってあげたい。」

「大丈夫よ、私たちは身内の人だから、買わなくてもいいわ。これからまた長い間お互いにお世話になるのだから。今あなたはあまりお金がないこと、良く分かっているわ。将来、もし先生は金持ちになったら、いくらか使わないといけないよ。私と主人は一人ぼっちで身を寄せるところがない二人だから、いつまで生きることができかわからないけど、七十歳八十歳になって、何もできないときは、先生にお世話してもらいたいの。」

---

#### 作者の話

話がまだ終わっていないが、先生はしばらく深く考え込んだ。あまり頭をもたげる勇気がない。お金持ちになる！先生はお金持ちになるかもしれないし、なれないかもしれない。

むろんこれは確かな話ではないが、万が一お金持ちになれなかったらどうするのだろう？彼女の話は完全に心からの話みたいと思う。

先に言ったらよかったと思う。先生、あなたの両親はあなたをこのようなところに置くことになってしまって、あなたも苦しいね！

年寄りを助け子どもの手を引くのは四方に散らばっていると言う話を聞いたことがある。本当によい桃源境であるが、でもどう見てもちょうどの飢えと寒さとが同時に迫るところみたい。それなら、私は本当に面白くなく、とても退屈だと思う。とりあえず、私は心配しない。唯一つ大きな話を言う。明日から私は志を立てる。修行して、衆生をあまねく済度する志を立てる。目的を達成しなければ決してやめない。それはまず苦い食事することから練習し始まる。よし、決めるのだ。しかし、彼女に返事しないとね、

---

「大家さん、私の誕生日の前日に必ず来るまで城に行く。」

「行かないでください。うちに居ればいいよ。あなたは大根が好きでしょう。じゃ、大根と羊肉を買って、一緒に煮てあげる。私の奢りだから心配しないでいいわ。私はまだ少し蓄えがあるから。」

「いいえ、私は城に行かないといけない。あなたのお金を使わないよ。来月から、あなたの家賃を何ヶ月払えないかもしれない。あなたはもし必ず本心を隠して、いいよ、いいよといわれたら、莫須有先生は三十六計逃げるにしかない。（ ）」

「ええ、どうしてこんな話を言っちゃった？私はそういうつもりじゃないわ。私はあなたに私心を抱かないよ。あなたは、私たちのような貧乏人がうまい汁を吸うのではと心配しているの？貧乏だと好意を示しても信じてくれないの？

『同船通渡、五百年修』。身を持するにはあれこれ謀略をめぐらせないほうがいいとよく言うじゃない。」

「この話を聞くと、びくびくするよ。まるで彫翎を心に刺すように、ははは、ははは。」

「また子どもっぽくなったね。」

「私はあなたを完全に理解している。元々からもう完全に理解したよ。」

「それなら、まだ城に行くと言うの？」

「では行かないことにするか。」

「そうね、家に居ることにしましょう。」

「ええ、そうしましょう。城内に行ったらお金を使うかもしれない。それに時間ももつたないしね。」

「この一ヶ月の課業はまったく予定通りに終わっていない。四分の一くらいしかできてないよ。この一ヶ月だけでなく、ずっとそうだったねけどね。それは憎らしい！行かないか？精神的にもう動揺させた。明日になると絶対何もできない。行くとしたら、何日間遊んで、かわいそうに、ちょっとつなぎとめられなくなった。行かないことにしよう！まあ、『行行停出門、還坐更自思』、古人はたぶん私と同じだろう。しかし、私のことは全部細かくて、こんなふうを考える必要がないと思う。しかし天下の重要な出来事というのは、一体何なのか。正直に言って、莫須有先生は重要な出来事をすべて解決した。ただ、このような日常生活の雑事だけ残っている。たとえば、朝起きるときに、掃除するかどうか考えること。もし掃除するとしたら、でも頭が少し良くない感じで、掃除しないとしたり、ちょっと汚いと思うし、たぶん実はきれいだけど、ただ心理作用のせいだ。よし、いかないことにした。もし大手を振って立ち去るとしても、しかしあなたは私が行かないと言ったら、（どうしようかわからなくなる。）ただ一つ月光景だけなのに、（時間が短い例えだと思おう）城下から田舎へ、田舎からまた城下へ、（何回も繰り返して）この確かな歴史が終わる期日が本当になくなる。もしそうしたら別な話題に変更すればいいのではないかと思うね、そうでしょう。では、一つ詩を詠んであげるね、

売薬修琴婦去遅、  
山風吹尽桂花枝、  
世間甲子須臾事、  
逢着仙人莫看棋。

あら、うちの頭の上に月があることをもう忘れた。月がさびしいね。人生というのは

時節に合わせて行楽をすることが大事だ。事は瞬く間に起こる。ほら見て、私は膝を抱きながら、頭をあげて月を眺めている。でも、昔の出来事を突然思い出して、考えなくいいけど考えたらずっと昔のことを考えないといけない。十何年も前のことだった。人の記憶というのは本当におかしいね、それは運命よりもっと推測できないものだ。どうして何の理由もなく私にまたこの幸せ・苦しみの経験を味わせるのかね？」

すると、先生は月を望んで空を聞き、言葉なく沈思して、曲肱而枕之（論語による）、座られているのは確かにこの冷たい石だ。冷たいけど冷たいことに意味がある。大家さんは小さい腰掛けに座っている。

彼女はいまは元気そうで、徹夜で大いに話し明かそうという感じなので、腰が痛いのもあまり気にしていない。（ここの意味はたぶん、腰かけに座ると腰が痛くなる意味だと思う。）

立ちたくても立てられないが、立てられても、身長が高すぎるので、莫須有先生の予想外になる。

そして、堂に登り、室に入り、また室から出て、座布団を取りに行ったからだ。その座布団は実はもともとは赤ん坊に使われたおむつだった。

大家さんが戻ってきて先生の右側に座ると、先生は驚き、思わずに身震いした。

彼女は、「あなたは立ちなさい。」といった。先生は完全に無意識作用によって、立って又座っていた。このような細々したことを叙述する値打ちがないし、わかりやすい話だし、ただ座るときにつめたくなかったといいのだ。

彼女はまたさっきのように腰かけに座った。そしてまたさっきのように話した。すると、先生は口を開き、

「その時の私は多感で多病な体だった。病気は確かにあったが、多感というのが冗談だ。つまり、一人である廟で泊まっていた。廟は鳥鳴と曰く。お坊さん出身は米をくむ人だった。修行がすこぶる良かった。（ここはたぶん莫須有先生自分の修行だということ思う。）野菜の中ではもやしが好きだった。私の部屋は仏堂の前で、彼の部屋は仏堂の後ろだった。だから、（部屋の場所によると）菩薩は私に対しての世話がお坊さんより多いと思う。夜が更けて人が寝静まるときに、私は仏堂で菩薩前にもす鬼火を燃やすような常夜灯を見るのが好きだった。でも本当に鬼に怖かった。蚊にも怖かった。当時は夏だったから、慣例によって私たちは火を消して静かに同じ部屋で一緒に座る。その廟が孤立された建物だから、窓の外にすべて広々とした野原で、広々とした野原の向こう側は古い町で、古い町の向こう側はまた広々とした野原になる。本当に荒れ果てて一軒の家もない。月夜の草露は、1滴ずつ全部靈魂があるのではないかと思う。互に見たら全部涙の目で私を見ている。首つり自殺をした人の亡霊が私を絞め殺すと心配するから、あわてて頭を戻ってきた。しかし、このような良い時節によい景色と離れがたいので10分くらい眺めてから寝る。ええ、一生の残念なことが全部ここで現れた。」といった。

「続いて話して、どうしてがっかりしてうなだれるようになったの？」

「ある日の夜、ちょうど盂蘭盆会の佳節で、街鼓動（道にはあちこち太鼓を打ち）、禁城開（宮城の門を開き）、北邱山上には花火を放し、城河内には河の燭が流れることのせいで、私のところを非常に寂寥させた。火をおこすお坊さんはもう早くいびきをかいている。さえぎられない明るい月の光は、私の顔色をやせ衰えるように照らされるので、今夜は窓を閉じ込めなければいけない。手と足の働くことは非常に落ち着いて、悠々自適で窓を閉じようとした、ただし、胡為乎来哉（どうしてきたという意味だと思う）、これは女子の声だ。やれやれ(悲しんだり、惜しんだりするとき)、これは人間の音だ。私の一生には2人の若い女性の声があって、それはまるで偉大な靈魂がおとなしい羊に調教されたようである。耳が要らないで万籟寂として声なしを聞き、人間の音は実は自然の音である。それがあなたを気にとめていなかったからだ。だといって、私はどうして小さい窓から吹かれた風で琴に触れてひとつ悲しみな弦を弾くなのかよ？」

「文語調の言葉は盛り上がり、一体にどんな意味ですか？真夜中に一人の女子があなたのその廟の前に駆け寄って行った話ですか？」

「更に聞くと、私は最も聞き覚えがある1つの音だから、もう何分かが分かった。しかし、憎らしいのは世の中にどうして月夜があるの？月夜は盲人の国であるべきだ。私を光明に見えなくならせる。私は嫉妬ではないが、悲しむのだ。目を向ける一瞬には私はすでに明らかに月の下に私の魚お姉さんの姿があると見えて、二度と塗って拭き落とせない。あちらの恋人は幸いに私はいずれにしても識別することができなく、私の知りあいとその男子がいないので、彼が楽しげな化身だと言うほかない。魚お姉さん、私があなを責めることを責めないで、あなたが完全にあなたのかわいそうな弟を思いつかないことがわかった、今が莫須有先生を言うべきで、あなたがまさかこれが彼の窓だと知らないの？今彼はこの寒そうな廟の中にいると知らないか？」

「私は完全に分かった。この女の子はとても恥ずべきである人だ。あなた達の江南の風習は異なっている限り、私達のここで、そのような事はありません！」

「耳障りな言葉で励ましてくるのは、ただもっともっと憂い・痛み悲しませられるだけだ。あなたはこれらの話をどうして言うの？魚お姉さんは私のどんな人か、とあなたは私のために考えてくれないの。彼女の実名は結局どのいくつかの字か？この字（魚の字だと思う）ただ1つの当てこすりだ！彼女は良い女の子で、誰でも彼女の聡明さに追いつかない。いつも私の父方叔母さんの家へ遊びに来るから、彼女とよく会える。彼女（と会ったら彼女の笑いが）いつも私を恥ずかしくさせ、困らせる。彼女は（私が恥ずかしくなるのを見たらすぐ）笑って、しかしそれから彼女は元気がなくなって、とても寂しそうに、ひとつきわめて私を愛している目で私をちらっと見てからほかの人と遊びに行った。彼女が読んだ本は私より多くて、経験と知識も私より高くて、いつも私にたくさんの良い意見を

くれたので、私はいつも彼女に及ばないと恥じている。私は「魚お姉さん、私は——愛します」という勇気がなくて、しかし、魚お姉さん、彼はそんなにばかで、その上、あなたは、このばかなところは最も人に愛させるところだと言っている。（これが一番私に怒らせるところだ。）あなたはわざとお姉さんの様子のふりをしないで、みんなに従って私を笑って私（の悪口）を言うな！」

「この女の子が生来最もおっとりするとよく見えるね。」

「あの夜に私はどのようにその窓の前から向きを変えて顧みないことをすべて覚えていない。その後、私は父方の叔母さんの家へ行って、魚お姉さんと会ったら、彼女はいつも私に『莫須有先生——』と聞く。昔の私、今日の私ではない。今日もかつてのままの私だと本当に失敗することだ。『莫須有先生、私はあなたの心の中でとても悲しんでいると思うよ。体は少し元気になったか？何かあったらどうして私たちに教えないの？』私はいつも避けている。世の中に最も恥ずかしいことは声がかれて君（ここの君が好きな男の意味だと思う）の前に涙を流すに過ぎないのでしょうか。長い年月を経て、私は郷里を離れ、東西南北（あちこち）に行き、魚お姉さんのことを私はもう忘却した。何年間を過ぎて、鳥が疲れて飛んで前に戻るの（ここの意味はたぶん記憶をまた思い出すことだと思う）、はっきり言えないものだね。たぶん五年前のある秋の週末に、私は故郷へ帰ってから、また家から出てきて、九江に着いて、旅館に泊まって、汽船を待つてなかなか来ないとき、私は河岸にぼつんと一人だけ立って行って、大きな川を渡る行き来する人たちを眺めて、まるで旅人が今回離れてもう二度と戻らない前兆のようである。なぜか分からないが私はとても寂しがっている。すべての男女の客は私に親しみを持って、かれらはすべて私の同郷の人たちでみんながこの商埠頭に商売をしにきた。長江の天険、あちらの眺められる砂州は昨夜私を宿泊させたところなのだ。私の家から九江まで、一日の道のり、朝から出発して夕方に着くが、例によって直ちに大きな川を渡ることができないようだ。明の朝に東の空に朝日が昇るまで待つしかない。なので、小池口で1つの旅籠屋を選んですこし泊まることにして、地図にこれはまだ梅山の土地の境界だと書いている。秋の長い日になって、夕日がもう沈んでいるが、私が座ろうとする汽船は依然としてまだ杳として音信がない。大きな川に今日の最後の一つ船だけでそこに得意先回りをしている。しかしお客は一人も居ない。私は思わず船頭のために焦って、寂しがりすぎて泣きたくてたまらない。」

「あなたただ一人だけか？ どうして道連れになって一緒に外出しないの？」

「私はこの渡り船の客になろう。 どうしてか知らないうちに私が船に乗った。」

「あなたはこれがどのような話か！ あれはあなたがまた戻ったのではないか？」

「確かに、私は帰る帆を引っ張って行って、船に乗った。私は一言も言わず、世の中にただその舵手だけで私に同情するべきである。彼はなんとたびたびに私をちらっと見る。」

そのときの莫須有先生は少し冒険的な性質もなかった、船が江中央に着いて、こちら側を眺めてもよくないし、あちら側を眺めてもよくよくないと思って、もしこのときに神様は波を立てて私の世界をけりがついたら（本当に感謝する）手間を省けることだ。ただ一声でお父さんお母さんと呼んただけでいい——The rest is silence。」

「あなたはよく話しているのに、私があなたの代わりに苦しんでいるが、どうしてあなた自分でまた腕白になっちゃって、笑！」

大家さんはうれしくなくなってきた、口を尖らした。しかし莫須有先生はあまり気にかげなくて、面と向かっていないので見えないのだ。この人はどこかが隆福寺へ講談を語りに行く資格があるの。ややもすれば同情を持っている心を売り払ったことにしちゃって、おつぼ口、きれいな纏足、一時で全部反逆党に加入して、大きい声で本当に本当にもってのほかだとののしった。

「は（見下げること、不謙虚を表す気持ちだと思う）、あなたは知らないだろうけど、昨日私は一篇の文章を作った。このイギリスの話をちょうど使った。とてもsentimentalだった。人はたぶん百歳まで生きてもやはり死んでもなおお哀れむことだろう。これはとりあえず将来の考証家に任せて得意な結果を出させましょう。話がまた戻ってきて、長江の夕日、広漠とした砂州、本当に極めてきれいである。よい子、今のところには異郷で歩いて、一人の絶世な孤独な人になっちゃった。日暮れて道きわまって、自ら周りを見回し、自ら徘徊するから、どうして悲嘆にくれて涙を流すこと我慢できないだろう。私は昨日泊まった旅籠屋にまた戻った。でも、まさか、まさか……」

「手元にお金を持っていないでしょう？あの年私の先生は滄州から逃げてきて、一緒の人たちはみんなばらばらにして、手元にお金一つもなかった、一晩ずっと雨を降って、ようやく1戸の人をお願いして一泊してもらった。旅行人はみんなすべてかわいそうなものだ。」

「まさかその旅籠屋で、その晩には私の魚お姉さんと出会えるのを考えられなかった。」

「こんなに長い話はなんだこの女の子のためであったのか。」

「あなたは私が怒ることを責めないでください。あなたはまったく私が話を続けられないものだ——年輩の人のように優れているがどうしてこの恋愛のものに関しての話の聞くとこんなにけちになったのか？人は母親になる資格がある（年になると）、子供達の事についてとりわけなんとかして考えて慰めるべきだ。しかし私はいつも自分で自分を慰める。その（粗末な）店はすでに明かりをつける頃になって、客が人を恐れて、中へ入っていくかどうか決められなく、ためらううちに、光りを尽きようとするところに居る人は魚お姉さんではないか？（とぼうっと見えて、）魚お姉さんはすでに立ち上がって私を呼び出

した。やれやれ（感嘆な気持ち）、本当か、二十年の年月がもう夢になっちゃって、この体がまだいるがもう驚かしてたまらない。そこで青灯語夜更け、それぞれに自分の行き先を言って、魚お姉さんは彼女が杭州に赴いて書文を学びに行くといった。」

「この姉さんと弟が会える話は本当に面白いね。今のところの女の子はすべて才能を持っている。（ここの本事の意味は強いこと、男のようにいろいろなことができる。）彼女が髪を切った？祝英台、なんと珍しくないね。」

「翌日朝、大きな川での風や波がすこぶる危険で、私達はすべて早く大きな川を渡ろうとしている。ちょうど一つ「義渡」が出航するので、（私たちがその船に乗った。）便乗させる人は本当に多くて、英山霍山、宿松太湖、すべて行く人がいる。各地を渡り生計を立てる人、布施を請う人、野菜をてんびん棒で運ぶ人や魚を売る人、すべてこの船に乗っている。魚お姉さんは彼女の髪をすく暇さえもなく、また少し寒そうに見える。彼女はそのままずっとよく船酔いすると言って、手が荷物に伏せて大胆に遠くまで見ると恐れる。私達はまた別れた。また会えたのが一昨年のものでしょう。私は1つの天下で有名な花園のような市内で避暑して、暇な時に一人でぶらぶらしてあちこち景色を見に行った。ある日、覚えているのはその日がちょうど上弦の月だ。たそがれのころに、青空には眉のような月をもう出てきて、私は百尺の古塔からひとつ『嚴肅』と書いているアーチ様の建物の前に来た。万ヘクタールのハスの花はほっそりしていて、どんなところに来たかまったく忘れて、私はそこでぼんやりしているうちに、突然一人の古くからの友人は私を呼んだ：『莫須有先生！』」

「この時たぶん莫須有先生の時期と遠くない。だからここで莫須有先生を書いても大丈夫だと思う。話はそうであるが、他人の身になって考えると、莫須有先生はどうすることもできないのか。莫須有先生は向きを変えて、私のその古くからの友人と肩を並べ立って、手を携えて行った。（ここが少し分かりづらいですが、その古い友人は莫須有先生であるかもしれないが、わざとはっきり書いていない。）野花芳草、一步一步落ち着いて、まさに魚お姉さんだ。世の中の事はとつくととても驚いて不思議がるところがもう何もなくなって、異郷で旧友に会って、莫須有先生はよろしく続いて伝えた。若い容貌で、両袖生風、飛起砂鷗一片、落紅成陣。」

「『あなた達はいつここに来たの？』」

「『何年間会ってないね、今日はここであなたと会えるのをぜんぜん思えなかった！』」

「魚お姉さんはまた子供ように笑っていた。ここで祝福する！そして彼らは私が彼らと一緒に家へ行こうと誘われた。それならとても良いと言って、たったいま酒を飲もうと思うので、私を引き延ばす人がいなければ私が怠け者で行こうと思わないが、あなた達は今日私に酒を奢ってください。魚お姉さんはそれではとても良いと言って、昨日ある人から

彼女に2本おいしそうな葡萄酒をくれたから（ちょうど一緒に飲む）。ここまで来ると私は精一杯簡単に節約すべきで、ただ酒を飲む話だけをあなたに教えるのだ。2杯だけ飲んだら私はもう少し酔っ払って、酔っ払った私は従来に話をしない。魚お姉さんは何度も私の1つの大きな志がある幼名を呼んで、その名前が私はもうとっくに覚えていないが、しかし私はうなずいて返事した。私の古い友人を呼んだのは確かにとっても古典的な二つ字で、私は□で代わる。」

「□君、今日私の同郷が飛んで来たことを思えなかったね。あなたも私のために何杯飲まなければならない。」

「『私は今日本当に誇らしくなることができ、莫須有先生が今私達の家に来るのがどんなひとつの意義がある事だ！私にとって、10年ぶり会わなかった友達と会える日であり、しかも彼が今のところにただの私の友達だけではなくて、どういえば私のうれしさをよく伝えるか本当によく分からないね。魚子、あなたはあなた達の梅山の風土人物を少し話しましょうか。』」

「『莫須有先生が名前を忘れた人、あなたはどんなことをしゃべりたいか、魚お姉さんがあなたに話してあげる——あなたはどのようにしてこんなに少ないお酒を飲んだだけでもうだめになったの。ほらほら、魚お姉さんはあなたにもう1杯を入れてあげるね、飲まない駄目だ！』」

「『私は彼がいままでずっとあまり酒が弱いとよく知っているね、あなたはあまり勧めないでください。』」

「『ほら、私も酒があまり強くないが、一緒に飲もうね。』」

「『恐らく私は多く飲んだら興味を起これなくなるかもしれないよ。とてももうろうとしていて、今晚私はあなた達とたくさん話をすべきだと思う。それは私の心の中でとても狂喜しているからだ。』」

「『後であなたたちが映画を見るのを奢る——莫須有先生が名前を忘れた人、見に行くか？』」

「『もしあなた達は喜ぶならば、お供をすることを心から願います。』」

「□君は魚お姉さんに向いて笑っていて、言うと、

「『あなたは彼が行かないとよく知っているのに、どうしてまたわざと聞くの。』」

「『来世私は男子だったら、絶対にあなた達と同じようにしない——私はきっと一人の太る女の人を求め、纏足、1日中にずっと彼女と遊ぶ。』」

「『あなたはまた妄言を言っているね。』」

「『莫須有先生が名前を忘れた人、あなたはそうだと思わないの？』」

「『はい、そうだ。』」

「『To be or not to be, that is out of the question.』」

「魚お姉さんはほとんど人も馬も倒れそうとしているが、急にまた椅子をしっかりと座つ



た。」

「『魚子、あなたは酔っ払った。』

「『人が結婚してはいけない。結婚した人は自分の奥さんの世話をするだけだと知っている。』

「『しまった、魚お姉さん、私は本当に少しくらした。』

「『ナシを食べなさい——あなたに削ってあげる。』

「『□君、私達の魚お姉さんはいつでもそんなに豪華で、品位があるね。』

「『あなた達はすべて成長したから、まだあなた達の魚お姉さんになるともう恥ずかしいわ——ね、ね、ナシだ！』

「『魚お姉さんは私にナシをくれるのだ。びっくりされた。灯りがきらめいて、私は本当にくらくらしている。とてももうろうとしている中に、魚お姉さんはもう一回私をはっきり見たようだった。すべてのことは私にとってほとんどひとつが逆さまにするものだ。魚お姉さんの目はいままでずっとそんなに狂暴のような目である。だが、このトラはまた本当に子供とゲームをするのを招くことができるね。』

「よく分からないが私は□君のソファでもうしばらく寝た。私は目を開いて、この酔っ払った後の現実世界に本当に珍しくするね。どうして世界が来るのがこんなに苦勞しないかと考えた。明らかに今なのに、過去もまだ存在しているなんて、それで確かに将来がまだなさそうである。その当時の情景はまだ目の前にあるようだったね。』

「『魚お姉さん、どうして□君を見えないの？』

「『客間の中で客に会っている。』

「魚お姉さんはそこに編み物、縫い物のようなことをしている。

「『少し寝たからよく治ってきたでしょう』

「『私は本当に役に立たない人だね、こんなに少しだけの酒なのにもう酔っ払った。』

「『あなたは何年間梅山に帰っていないよね、あなたの父方の叔母さんは今どのようなか知っているか？彼女の状況は恐らくよくないようだ。』

「歯で糸を切ると、縫い物をそばに置いた。

「『魚お姉さん、あなたはこのような縫い物でもできるのだ。』

「『あなたは今日やっと知っていたか？いつか魚お姉さんはあなたにひとペアの靴を作ってあげて、さらに花を刺繍される枕も作ってあげるね。あなたに誕生日のプレゼントにしよう、いいかい？』

「『あまり私を笑わないでください。』

「『誰があなたを笑っているの、私はあなたを笑う理由くらいがないでしょう。』

「『一人で寝ることは本当におもしろい事だ。不覚知有我、安知物為貴、（私がいることを知らずうちに知っていたあとに、その物が貴重なことをようやく気づいた。）たとえば、さっきほど私が横になったらすぐに寝ちゃって、あなた達は私について何をしゃべっていたか私がよく知らないことと同じだ。』

「『私達はあなたのことを言っていなかったよ、私の一人だけでここでずっと縫い物をしていた。』

「『魚お姉さん、私は今までやっと貞操の大事さをもっと深く感じた。それはまあこの

世に負けないといえるね、これからはもっと進歩できるかもしれない。』

「『私から見ると、あなたはよりずいぶん聡明になったようだね、昔少し馬鹿だったね、万事に対してすべてまじめすぎたから、周りの人に息をしにくくさせられたよ、本当に。』

「『あなたの言い方はどんなことでもすべて網羅できるような感じで、実は——』

「『何ですか？あなたはまた私と言い争いますか？話があると言うべきだよ。』

「『私が突然1つの（ことを思い出した）——それは肝胆楚越の感じだといえるかなあ。ある画題はThe Expulsion From Edenだというのでしょうか？私は私の自身でその画題を書きたいと思う——（しかし）私の意味はその意味とまったく違う。』

「『私はこれでやっと私の上のあの天井板の白さがとても変だと気づいた、見ても見てもまるで私の目が白さをよく知らないようだ。』

「『あなたはお茶を飲まないか？』

「『時はもう早くないでしょう、私はそろそろ失礼する——』」

言葉がまだすでに終わらなさそうだが、莫須有先生はもう倒れちゃった。どうしたの、長談がずっと続いて、もう少し話してもだめなのか？眠るか。これから今後、やむを得ないときにならないと、二度と多く話をしない。苦しんでも自分に苦しみを残す。楽しんでも自分楽しさを残す。惜しむといわれてもいいし、贅沢だといわれても倍に蔑視する。あなた達は私が見聞を広めないと思ってはいけない。ほら見て、これは雲や霧に乗って自由に去来する海の中でとんぼ返り返すものではないか良いですか？それはよいなのか。突然頭をもたげて、私の大家さんはもうどこかに行っていなくなった。どうしたの、もう中に入ったの？さっき私が話した話は、いったいあなたと話していたのではないか、あるいはやはり自分で夢を見ていたか？あ、しまった、明日の朝になるとたぶん少しも覚えていない。」

### 第十三章 この章は不思議まで言う

太陽が空に輝き、春風が暖かい、人生には寒暖を交換する年がいくつがあるか、莫須有先生はどこに行ってきたか分からない。今回彼はステッキを忘れて持っていなかった、しかし一人の近視のようにもったいぶって、誰にも挨拶しない。大きい道に、形と影は競歩していて、しかも歩けば歩くほど早くなる。当てにならないうわさをよくいう人はすべてこういうふうに言う：「莫須有先生は今日がどんな事があるの？こんなに早く歩いていて、まったくおれらを軽蔑しているじゃないの！石は足に当たってそれで倒れて鼻をぺちゃんこになることに気をつけないとね！」 実は莫須有先生がその人を見る才能は一番測れないほどすごいところだ。たとえ道路で歩いて、10歩以外の道としても大体見えるようなすごさを持っている。含んでまじめな顔になって、一人言を言って一人で笑っている。こちらに向かって来るのは大家さんではないか、まさにそのとおりだ。僕はいつも彼女が優雅な人だと笑っている、彼女が頭によく花を挿すのが好きな人だから、よく「大娘」だと呼ばれる者だ。ここで私は声明しなければいけない、それは以上の話について少しの考証だ。

山東済南府でたぶんほとんど老媽子だと言われている。しかしこの言い方について参考できる本が一冊もない。ある嚴冬、甫下車、天下に二人の親しい友人から引き伸ばされて大明湖に行った。ほとんど凍死されるに近い。一つオーバーをはおっていて、それがトラやヒョウの皮なのに、犬や羊の皮のように見える。まるで一人獵師は武松のことをまったく分からなくて、元気に満ち活力にあふれているようである感じだ。われわれは両目を鼻汁の上で生き生きとして出したばかりのとき、「李白問那家好」看板を見かけた。それは居酒屋だ——万戸には春聯を貼っていてまさかもう新年になったの？吾達はまだ外で駆け回っているなんて！居酒屋の隣はきっと看板だ、「保薦大娘」、別な話を言う必要がなくこれは老媽子のことを言っているのではないか。これは大娘に対して始まった興味だ。必要なきになるときと典故としてそれを使いたいのだ。ハッハッ、向こうからこちらに一人のおばさんが歩いている、彼女が莫須有先生を見たら少し恥ずかしくなるように見える。腰には何かものを入れていたみたいで、それはきっと主人が防備していないうちに盗まれた米だ。あるいはただ女の子が肌につける汗衫だけかもしれないのだ。しまった、ようやく休暇を取って逃げ隠れて家に帰ろうとしている彼女は、私に見られちゃって、おそらく彼女の事をほかの人に教えると心配しているのではないか。しかし私がどうしてあなたのことを訴えて行く必要があるか？あなたは尋ねに行きなさい（私、莫須有先生はどんな人なのか）！林姑娘は怒るのも無理はない。私はその余計なお節介をしない、私はツルのような足踏みで早く前へ進んだほうがいい。そうしよう、このように歩いていくと、たぶん結構遠くまで離れちゃったかもしれない。莫須有先生は独りぼっちで歩いて、誰にも頼まなくて、でも往々にしていざこざを引き起こす。どうしたの、彼女はぶつぶつと何を言っているの？私の鼻を笑っているの？「石は足に当たってそれで倒れて鼻をぺちゃんこになることに気をつけないとね！」これは確かに憎むべきであることだが、幸いに莫須有先生はこれらのような欠点に気にしていない。覚えているのはある子、誰の子供かよく覚えていないが、私にインド人というあだ名を作ってくれた。意味は私の高い鼻と黒い皮膚によって作られたものだ。さらに感謝するのは、彼女がまた魂の上の問題にも言及した、それは私が歩くときの影が美しいという話だ。しかし莫須有先生はその話を聞こえなかったらいいけど、もし聞こえたらどうしてもほっとすることができない。体や皮膚などすべて両親から受け継ぐものだからなんともしようがないものだ！そうすると、どうして怒ることになり、しかも怒ったらまた自分で説明する必要がある。人が時々怒るのは必要なものだ。まっすぐな道で歩いていくと、直をもって恨みに報いると同じようなものだ。もともとのようにそのままにしよう、けちする必要がある、だから吾夫子不見孺悲、文王は怒ったら天下を安定した、そこで自動車がゆっくりと行って、私が止まるまで待っている、私は人をののしりたいのだ！すると急いで背の向きを変えて風向きに走っていく——

「ね、そのおばあさん、こっち来て、あなたと話がある！あなたはどうして私を風刺するか？あなた——あなただったらどうしたの？どうしてまた戻っていくの？」

「莫須有先生、やばい、私のhandkerchiefを風で吹き飛ばされた、あそこ、その木の枝の上でしっかり掛けている。お願い、あなたは拾ってくれていいかしら。」

「その白色のものか？草コレニ風ヲ上フレバ必ずたおれる——あなたのものですか？さっき私はあなたがひとつのハンカチをポケットの口でつるしたと見たのではないか？」

「私のものだよ、うちのお嬢さんが私にくれたものだ。彼女の病気はもうそろそろ直るかもしれない。昨日おばあさんも山に登ってきて、しばらく経ったら市内へ引越しに行くと言った。うちのお嬢さんは私をも連れて一緒に行くと言った。」

それではあなたは雇用労働者として街へ行くことにするか。莫須有先生はひとまず高い所に登って一覽する。それでは彼女は疾病でこっちに来たわけで、私は勝業を自習するわけだ。心の中で、貧乏の人は幸せになるねと思って、天国が彼らのところだからだ！（按、ここに注釈によって言うと、この道路が山から下へ伸ばして、南のほうへも八大処があるそうである。）

「やばい、私の帽子も風で吹き飛ばされた——はやく！はやく！」

「大丈夫、大丈夫、私はそれを捉えよう！捉えよう！」

「ほら、見て、これは確かに私自分のものをなくしたもので、まったくどうしたらよいか分からない、考えをすべて失った。私は1つのストーリーを思い出した。昔の者は維摩詰室といい、即以天華散諸菩薩大弟子上、華至諸菩薩即皆墮落、至大弟子便着不墮、仁者自生分別想耳。私のような人はこれからどこへ行くか、どのような人になるかあまり分からないもんだ？あなたにお願い、はやく！はやく！そろそろ援助する手を出そうね！」

「お婆さん、私は一足でそれを踏んだ！」

一歩でそれを踏まれなかった、そしてたぶん五十や百歩の間で踏んだが、しかし莫須有先生が側で怒っている、すぐに口をふくらまし始めた、ひと言も言わずに、科頭で彼の世の中の人を見る。又却是、風吹髪（意味はたぶん、風でまた髪を吹かれただと思ふ）。

「苦しんでうなって、これはあなたを責めることわけではない、仁者自生分別想耳。しかしそのペンを挟む人は憎らしくて、お姉さんはあなたが知らないが、彼はあなたが小便したいと言って、按嫂溺援之手、溺、《説文》水名、従水、弱声、現代人は人が小便の尿という字を使う。

「あなたはあまりいい人ではない、これからあなたと話したくない——私のタオルを返してください！」

さっそく一つのバイクがこちらに来て、莫須有先生はさまよった。唐僧は念仏を唱え、化け物なんて、いやだいやだ、といった。塵埃のために命をかけても、目をさめたら、世の中に只一人だけいるのだ。だから、私は何ものをも恐れない精神を持って先行したほうがいい。

さてこの道には、山の上で八大処までぐるぐる回って、跡を言うと莫須有先生が一番多い人だ。それは本当に朝雲暮雨、打傘騎驢、何でもある。（この跡によって、）その毎日授業で出席をとり、メモを取り、女の学生さんをチラッと見るやつらを痛快で教訓を与えた。これは（下此の意味は分からない。）東交民巷のバイクだ。これはともかく齋瞎子だといえる。夫で齋瞎子だということ、只一人の目が見えない占い人に過ぎない。山の北の土着の人なのに、山の南へ人の占いに行くなんて（良し悪しを知らない、身の程を知らない）。時々、莫須有先生は彼が闇夜に星を伴って手探りで前へ進むのを見える。そのときは、実は、莫須有先生はあそこの望夫石の上に座って嫦娥を吊るしている。その占いは今日の商売がきつとよかったらうね。莫須有先生は彼と挨拶しようとしたがなかなかしない、それは、本来に莫須有先生が孤独を探すためにここへ来たわけだから、その盲人と挨拶す

る必要がないのではないか？あるいは彼が「自然」とだにしよう。莫須有先生、あなたはあなたのおごり高ぶりをしてください、あなたも実は蛍と同じでぜんぜん見えない人だ。その話が終わったら、莫須有先生ははははと笑っていた、あくまで批評家としてやってきたね、（彼を叱らなければならない）彼をののしった。しかし、これは後の話だ、とりあえず言わない。莫須有先生はその車の後ろ影を望んだら、またすぐにしょんぼりになった。時間を無駄にしないでください、私はもう三ヶ月ずっと頭が鈍感であったよ。話すうちにその一重山と二重山を全部登った。再びその方法を変えるところに着くと自然に角を曲がることができるようになる。いつか君がここを寄ることを分かると、もし信じられなかったらお茶屋さんが証明となろう、莫須有先生に訪ねたいと、そのお茶屋さんの店長に聞けばよい。「ね、店長、すいませんが、ここには莫須有先生がいるか？」と聞くと、彼が絶対にうれしい。いるとあなたに返事し、しかも住むところの番号が十四番で、その入り口に四つ槐があるところだ。ときどきに女の店長になる。しかし彼女はよくあなたの詳しい事情を尋問するかもしれない。あなたはどこから市内に来たの？どこで働いている？もしあなたは大学から卒業したという、彼女はそれが言いか悪いか絶対に知らない。それは、彼女にあるおひ子が警官大学から卒業したが今までまだ大隊長になっていないからだ。なので、莫須有先生はいつも怒りすぎて怨みを生まれた。まるで、大家さんの目の前で大きい声で、「あなたたちのような旗人！男は軍人になり、女はみんな女中になる！ええ、私たちはまったく理解できないのだ！（私たちはどこから理解できるのか！）」とののしる。このお茶屋さん以外にはもう一つ記念できるものがある。それは私達のこの没落した家がそれぞれな戸ずつ少しお金を出して買った新しい縄で、深い所まで届けるものだ。（縄が長いという意味だと思う。）さてこの柳影の奥に、露井桃辺（露天の井のそばの意味だと思う）、いつもつるべを置きっぱなしにして、井のそばに座ったままで話をする人が何人かいる。莫須有先生は本当に彼女たちのような桃李精神やオウム舌を持つことにうらやましい。しかしただ黄河の北のほうのatmosphereだけだ。だから、すぐにふるさとを恋しく思うようになってきた。今はちょうどこの関所に来たから、さっそく飛んで逃げたいのだ。でも、（私がここにいるのを）もう彼女たちに見られた、ほら、彼女たちは今みんなひそひそ話しをしている、私のことを話しているのではないか？私のどんな話を言っているのかなあ？それに、莫須有先生は鶏鳴狗盜之計を施すしかない。さっそく馬を止まって、（いろいろな役に立つものを入っている）かばんを開いていたが、手をつかねて点検をしなかった。代わりに、思わず知らずに西施のように心をもち而（??）其里を学んで、すると皆さんの褒姒は一緒に烽火を見たように笑った。莫須有先生はこの場面で笑わせて顔を真っ赤にした。なぜか知らない、または知らないふりをしているみたい。その人たちの中の一人が足音をたてずにこちらに来て、莫須有先生はどんな本を読んでいるかと探し求めたいのだ。莫須有先生は同じ水平線によってその近視の視線を斜めに出して「あなたは字を読めるの？私はわざと逆に本を持っているよ！それは目や耳を隠すことを慰めるためなのだ。今日、出かけてきたのは完全にこの詩集に助けたね。」といった。でも、また急いで修正に言うと「話を間違え伝えるな！私はたいした近視じゃないよ。ほら、私はあなたたちを観察しているように見られるが、実はschoolmasaterが群強報を見ていることに笑っているよ。」この女中はまっすぐ匍匐に戻ったが、しかしたくさん得るところがあった。

莫須有先生は見送って言うと、あなたが戦争するのは一人でできるだけ来ないほうがよいよ。同時に水を汲むところの上でかあかあと音を立てて、人がそちらへ見させたくて、嘆息を呼びかけて、世界はどのように完全に激しい変化しているものか。これは私が失礼になることではないよ、これは必ずどこかの化粧台で着飾ってから水を汲んできたおごり高ぶる誰のお嬢さんだ。私はただその後ろ影を見るだけで足りない、嘆息を呼びかけて、何のものか、もし1つの古典派のように、世の中の仕事はただ淑女が飾ることにとどまらないことならば、春風もその制約の中になる。これだったら本当の自由だよ。動静の間（の風景を見られると）、物憂げな1枚の図画よりもっと人生に奮起させる。実は莫須有先生はたぶんまだ道のそばにいるから、この時ここで悲しんで思い慕うことをするのをどうして許せないものだ。そこで泊まっている鳥やカラスのようにすべてしばらく飛びたくなくなって、鶴のように木影の中に立て首を上げて一つ大きな機械に向いて

「これはねつるべ者ではない、引いたらうつむいて、捨てたらあお向けて、だが、女の子、あなたはしっかり立っている。うん、私のこの話は余計なことだけど、でも、春風で木の葉を下ろすわけがないよ。これはたぶんただ1つの姿だけだ。あなたは地の音だけ聞いたがまだ自然界の音を聞いていないね。」といった。

「莫須有先生、元気？散歩してきた？今日の天気が良いね。」

「お嬢さん、元気？そうね、この北の気候が本当に大好きだ。柳の新しい若葉をもう出てきたのにまださわやかな秋の天気で、まるで鹿がなっている声も聞こえ、春の松と秋の菊を同時に見えるような感じだね。しかし、私は江南の雲を見えないのがちょっと残念だと思う。しかもいつも雨の後の芳香草と夕日を見えないのが失望している。だから、私はよくその詩に懐かしくなる、『惟有相思似春色、江南江北送君帰』、もし私はこのとき（故郷）に戻ると、長江を渡ってすぐ青草が私について歩く感じになる、（意味は草がいっぱい、春の季節になる意味だと思う。）その感じはたぶん昔の女の子が歩くとき、一歩前進するごとにはずの花を伸ばると同じように面白いかもしれない。」

「莫須有先生、ここからあなたの故郷まで何千里くらいあるか？いつか舟を読んで私たちを連れて一緒に遊びに行こうか。私たちはみんなまだ船を見たことがないから、見聞を広めさせてくださいよ。」

莫須有先生は、女この話を聞いたら、たぶんまたさつきいざというときになって逃げを打った人が口を挟んでいると思った。今、彼女はあそこで風を描き、影を捕まえ、ひざを抱いて座っている。しだれている楊のように頭をかいていて、向こうへ振ってまたこちらに吹かれてきて、眉がもう少し憂えそうに見えるが、あなたがまだ私に返事してくれないか！しかし莫須有先生は気にとめなく、仕方がなく心配事があるから、ええ、世の中の予想事、目の前の人々、すべて光陰を早く経つようにすることだ、その上また交際し方を学ばなければならないのだ！そうしたら、誰でもその深さを測ることができなく、ただ皆さんが尊敬されるような態度で敬遠な言い方で、

「おばさん、あなたたちはここの広々とした野原でロバの車に乗って実家に帰ることもとても面白いと思うよ。十里や五里以内に誰も見えなくて、もし雨を降ったらさらに妙になる。舟なんて乗ることを考えなくてもいい。」といった。

「もう言わないでください、本当に人の息を詰まるものだ。」

「それは何でだろう？」

「聞く必要がないでしょう！」

「宇宙のことは私が知っているのは少ないが、でも時々推知するのが難しくないのよ。」

こうしたら、莫須有先生はとても知りたくてたまらない、その中で絶対何か理由があると思うから。そして見たら、きれいな少女、井上の人、おばさんの話を聞いたらとても恥ずかしくなって、顔が真っ赤になって笑っていた。

「私たちの竹のお嬢さんは明日、色彩の飾りつけた輿に乗って市内へ行くのよ、でも、三十里くらいあるからずいぶん抑えるものだね。」

「いやな感じ！」

竹のお嬢さんはなぜ笑いながらおばさんをののしるの？この二字というののしり用語について莫須有先生は長い間ずっと適当的に翻訳したかったが、結果がなかなかうまくいけない。ただその言葉の風格と趣（雰囲気、気持ち）だけ分かる。全部で二回がある、すべて少女の会話から聞いたものだ。かわいい若い娘さんよ、神様の音楽よ、園柳はよくさえずる小鳥に恋するよ、どんなことでも人間の力によってできることではない、私たちは口うつしに言うことができるものではない！え、まあ、まあ、私のふるさとのほうでも人に笑うことわざがある、それは「臨時籠に乗ろうとするとき、臨時小便をしたくなる」である。たぶんある若い娘から聞いた言葉じゃないのかな！すると、莫須有先生は世の中のことが本当に上品と俗っぽいという区別があるなあと思った。ではこれから私はどういうふうに仙人を求めかよく見てくださいよ！しかし私の意味はよく工夫をすることだと思う。

このときにある太鼓に揺れる人が来たが、莫須有先生はまだその人を見ていない。でも、竹のお嬢さんは遙かな音は指すと、

「太鼓に揺れる人、止まって！」

すると、雀躍而賭見軽、臨波而見歩陣、二人がお姉さんの手を携えて一斉に太鼓をたたく人てんびん棒を囲んでいて、何を買おうか、たぶんあめだろうと莫須有先生は思った、遠く立って、すごい眉間の様子だね、莫須有先生は知らず知らずお姉さんで教えてもらうことにした、低い声で

「何を買うの？」と聞いた。

「あなたは彼女たちに聞きなさいよ！」

「え、世の中に生きていて、辱めることを我慢するのが一番重要なことだ、でも、その中に人に尊重する気持ちを含むのが必要である。」

莫須有先生は自ら三步下げて、興ざめを自省した。

「莫須有先生、あなたは漢字をかけるのを聞いた、いつか私の扇子に何か書いてもらえる？」

第三者は突然口を開けた。

「莫須有先生、あなたはハエたたきを買って彼女に送れば。」

第四者はこう言った。

「そのおばさん、人を皮肉するなんかするなよ。仁や礼を心に込めることによって君子とする、そして、自ら反省し忠実するのも大事だ。そのあとは、横逆だ。私は今いつもこういうふう人間を痛ましくし、敬意を払っている。それに、自分を痛ましくし、敬意を

掛っている。いつも聖人の態度を愛していて、自分の過ちを言う。」

「莫須有先生、あなたは本当に気分を壊している！まるで婆のような口だ！うちらお姉さんたちは、暇で座ったままにしゃべるなんて、心配することはないでしょう！」

「莫須有先生、あなたはもう黙ってください、彼女は毎日家で姑の話を我慢できるよ。」

「私は知っている、どうしてそんなに気が小さいの？あなたに聞いてね、私は、北方の方言は言葉足りないと気づいている。たとえば、『言語』という二字は、あなたたちはもし『原因』と読むと、ある日、私は小人に聞くと、それが『言語』という発音の変化だとやっとわかってきた。私から見ると、この二字がよく多義があると思う。たとえば、さっきほど、あなたは私に黙れと言われて（言語しないで）、それが彼女たちに返事しないでくださいという意味か？そうね、あるとき、私は外にいて、大家さんは中から頭を出して『誰？ね、誰か？どうして返事しないの？（どうして言語しないの？）』と大きな声で叫ぶ。ここが確かに通信の意味だよ。あるときに、彼女は私に『莫須有先生、私は野菜とか全部用意したから、ご飯を食べたいとき教えてね（言語してね）。』といわれる（言語してくれる）。この言い方は、あとで彼女はたぶん暇がないから今早くご飯を食べたほうがいいよと催促してくれると思う。でも、こういうような言い方は失礼ではないと思うのでいいのだ。まあ、つまり、ここの言い方は言語のもう一つ使い方だ。あるときに、彼女はまた『莫須有先生、もしあなたはまた外に出かけると声を出してね。（言語してね。）ドアを開けたままにもう出かけたなんか市内でください！あなたのようないつも出かける人が見たことがない！』という。ここには言語のもう一つ使い方でしょう。お婆さん、私は一気にこんなふうにいっぱい話したが、でも、彼女の後ろに彼女の悪口を言うなんてないでしょう！もし悪口を言ったら私が悪いけど、彼女の人格はあなたたちの旗人の中で豪傑だといえると思う。ただ一つおだて言葉をつけ調子に乗る癖がある。しかも私と同じように自分を表すのが好きだ。」

「莫須有先生、話したい話があればいっぱい話さない、女みたいに（話がなかなか終わらない）ようにしないで、何か怖いことがあるの？」

「話して！」

皆さんは静かに聴こうと思っているところだ。しかも、莫須有先生がもっと話させようと思う。その中の第五名はさらに体を少しこっちに来て、隣の人と耳打ちしている――

「莫須有先生は面白い人だね。」

そして、また正面し抑圧された気持ちが開放されてよいにおいみたいな声で咳をした――

「咳。」

いるお婆さんたちはみんな聞こえないふりをして、莫須有先生葉一人で考えている――

「この方は私が知らないね。」

（この話を）聞いたら、この方の顔が急に赤くなって、莫須有先生はどうすればいいかわからなくなった。自動的にあくびをしながら伸びをした――

「莫須有先生、あなたはいつ来たの？元気？」

「ほら見て、私たちのこの阿呆お婆さんは、もうしばらく会ったのにまだ挨拶するなんて、これは後探補というのよ。早く座って莫須有先生の話聞きましょう！」



彼女の隣座っている人は、彼女を引っ張って座らせようとしたが、しかし、彼女は恥ずかしくしすぎて怒るようになった——

「どうして引き止るの？」

この春風をととても面白く笑わされて、私たちの竹のお嬢さんさえもこっちに来た。手には何か良い果物を持って、ある二番面の兄の妻を指して「おばさん、山里紅だよ、食べる？」といった。でも、言葉がまだ残っているうちに、え、お嬢さんの顔がもう紅くなったと見えた。それは二番目の兄の妻だけご馳走しようとしてほかのおばさんに声をかけなかったから顔が赤くなったか、または、私のような忠心を持つ召使に礼をしてなかったから失礼だと思っているから顔が赤くなったかよく分からないね！神様は、公評してください！私たちは、あなたたちの貞操はどんなに綺麗な花みたいなものだ！しばらくたったら、私は絶対に菩提木の下へ持っていこう。それは私の善果を証明するためだからだ。皆さんは笑うのをやめてください、どんなに大きな事業でも因縁がないわけがないよ。結果あるいは難細は解説されるものだ。

「竹のお嬢さん、私に一つをくれないか。」

竹のお嬢さんは、彼女に一つを上げた。彼女は一番大事なことが遊びとするものだ。

「竹のお嬢さん、一つ大子でいくつか買える？」

今話しているのは、莫須有先生は知ったばかりの人で、今話したばかりだ。人世万事はすべてやめることができるものだ。竹のお嬢さんは一つ大子で三つを買えると言って、そして、

「梅おばさん、あなたは食べる？」と聞いた。

「一つ頂戴——ええ、とてもすっぱい！」

莫須有先生はそばで彼女が本当に一人の徳のある方だとほめながら、一つすっぱい果物を食べている。その果物をかんでいるとき現れた善眼が本当に無邪気である。ええ、人世の色声香味にはそれぞれの魂を持っている。その魂をいいところで現れたら確かに不思議なものになるわね。

#### 第十四章 この章は耳が聞こえない人に言及する

竹のお嬢さんの肩で水を運んで離れちゃった、およそ天下之重荷を担う者は、往々にしてその飄々としているところによって素晴らしく美しくなるのだ。だが、莫須有先生は、桃李を言わず、自ら彼の影に立っている、なんとまるで一つ魂が飛び出せないようである。各位の賢い者たちは声をそろえて一緒にお辞儀をして、莫須有先生はあなたも少し休んでください、ここにお掛け下さい。しかし、莫須有先生は（その話を聞いたのに）まだそこで目をもてあそんでいる。目の中に何か虫が飛んで入ったみたいなので、どうしようもなく以下のように答えた、

「各位のお姉さん、しばらくお待ちください、私はあなた達の話しを聞くのがとても好

きだが、私の目の中で 1 匹の虫が飛んで入ったから、実は飛んで入ってこなかったかもしれない、ただ飛びかかっていただけで、でも、(そうだけでも) 私は安心できない。人はどんな事に対してもすべて気軽に対処するのがとても容易ではないと思う。それに私はまたあなた達のおばさん達から 1 つの根気と犠牲の美德を学ばなければならない。あなた達のような女たちだけは無名な英雄だからこそ、すべてのことは自己主義から始まらないと思う。」

「もしあなたは私達の目の前に泣いたら、顔をつぶすことになるよ。」

「そうすると、私はいささか女のようにじゃないのか。実はそうではない、どんなことでもあなた達はどうしても直接に承知しない、人に見せないと思う。ただ私だけが子供と同じように、いつかどこで急に詩を作れるようになる——は、見て、私はもんだらすぐ直ってきた。私は何を話したかすべて忘れた。私もかつて道家が丹薬精製炉の中で 1 回を精錬したことがあるので、邪悪を見抜く眼力があるといえる。その上また 1 つの話題 (画題) を加え、それが憂いを含んだ眉が青緑色を集め、春の煙が薄いというものだ。だからあのサル目が恐れている形があるのに身がない煙は私だがその煙を取って顔料にすることができる。」

「莫須有先生、あなたはそのような手紙を書く才能があるか？たとえば、ある女子がいる、まだ会ったことがない 2 人、あなたは、彼女が普段の生活ではないようなお茶もご飯も思い慕わない生活を送らせる手紙を書くことだ。」

「おばさん、私はあなたに聞いてね、あなたはどのように言ったら私がどこから答えればいいの？」

「そうだ、そうだ、莫須有先生、あなたは彼女とでたらめを言うなよ！」

茶々を入れたために、莫須有先生がさつき知り合った人は茶々を入れたのだ。以前の問だと、また遊ぶことが好きな者は上首者とする。残りは全部南から吹かれた凱風が眉を吹いて笑わせるものだ。

濃密な林の中にいるあちら方は、彼女の飾り立てはいささか上品につけたようだが、ただ一日中に最も話さない人であると莫須有先生は心で考えている。

「しかし私は私の志を言わなければならない。ええ、言葉がない志だと深く恥ずかしく感じている——おばさん、私はあなたに聞いてね、私が彼女に会う前に、世界は依然として世界であるが、その世界は不思議だ。空無是処だと言えるが、また亦無是処だ。人生の墓が同じの草に任せて想像することができるのとあまり比べられない。この境界は、これに何かある？あれに何かある？私は何によって尺牘の思いをわくか？しかし人生は萍水のようなもので、天地が変化せず、互いに一朝出会ったら、昔の私だと言う勇気がないが、あるいはもしかしたらそのような才能があったかもしれないが、誠にあなたの言うとおおり、暮らしらしくない日々を過ごす。当今、私は愛情がどんなものか甚だよく知っている。これは確かに容易ではないことだ。特に私のこの命をはたいて勝負にかける性格だからこそ (容易ではないことだと思う)。ええ、これも悲しいことだ。人生という笑うべきであり敬

うべきである幕で、自分を表すことだけを考えるとだめだと思っほかに、必ず幕の後ろに隠れても自分はそれが恥ずかしくないと感じなければならない。そうするとあなた自分を磨くことができる。或いはこの何もない郷で天国を一手ででっち上げることができるかもしれない。しかしこの造詣（高度）まで行くのは恐らくあなたたちのような婦人孺子が企及することではないと思う。それは一人前の男でなければならない。およそなにか天国のようなところであるが、自ら作られる楽な場所ではない。このように、あれはただ市場でのこそどろだけで、心労日拙（あれこれ謀略をめぐらせても事態はまずくなる一方である）、見るに値打ちがないと思えばよい。彼は地獄に向いても恐れることがない者でなければならない。いわゆる私が地獄に入らないと誰が地獄に入るか（という考えを持ち方）、それなら当然最も先々までの深い考えである。万事はすべてためらって話をすると、気に入りにくくなるが、要するに始終彼の人よりも一段優れている素質だと思う。（この人よりも一段優れている素質は一体、ためらって話すことだと指すか、どんなことにも恐れなく勇気を持つことを指すか、はっきり分からない。）

話しがここまで言うと、返事する人がいた、

「莫須有先生のこの話はなんと私を感動させた。人が世の中に生きるのはどんな意味があるか？一匹の蛇虫アリようにも匹敵できない、毎日いじめられて、蛇の虫のアリは恐らく人間からいじられるわけがないだろう？私は思えば思うほどおかしくなって、もっと怒る！ふん（苦しんでうなる）！

ふんというのは苦しんでいるときにうなる鼻音である。

「私の話はどこが賢い者を啓発したか？いつか、私は二人が小さな事のせいでけんかしたことが見たことがあるよ、たぶん——もしかしたらあなたは敗けた人ではないか？」

「そう、そう、私だった。少し髪をすく油のために——莫須有先生、私はあなたに礼を言うね、手数をかけて私のために何言を言ってもらった。」

「やめておいてもいいよ、あなた達のような旗人は本当に貧しくても礼を言うのが好きだね。それは私をうんざりさせる——あちらは本当に憎らしい人だ。今なお私がまだ憤りを残っている。幸いに彼女は今座席していない。もし座席するならば私はきっと彼女と絶交する！しかし、以前のことだから忘れたらいい、取り立てて言う必要がない。あなたの話しを聞いたら、私をなんとある程度に啓発された。すべてのことはどんな方面から観察するによって（結論が違うのだ）。古今を通じてたくさん詩人は一時の煙土披里純によって自然原始に向かっていくこともある。特に愛情に関することには（こういう現象がよく見える）。あなたは見て、あの木の上の小鳥、その蝴蝶、彼らはどんなに無邪気に飛んでいるか、それが自由だというものだね？しかし人間は万物の魂だというものだが、『無邪気』というもの、『自由』というものは、ただ私達のように生まれてから人間になるものだけで意識することができる。それはいわゆる私達の理想だというものだ。百有生というのは完全にただ本能の作用だけなことである。まるでその蝶々のようで、いつか自分の美しさを鑑賞することを知っているだろうか？我知之濠上也。（ホリの上にいることを知っている意味

か、誰がホリにいる意味かはっきり分からない。) たくさんの面倒に至っては、それは本当に仕方がないことだ。実は文化というものはここにあるものだ(文化の差別の意味かな?)。その原因も簡単ではないことはない。すると、良い男は突き進んで行って、改革を求め、幸福を求めるが、しかし私はこっそりとすべてのネットを自分の身に縫った。だからかなり入り混じるようになる。しかもまたその中から一つ涅槃を練習することもできる。以上のことから考えると、それが生存に適することや変化に長けていることが明らかであることは、依然として自然な通則である。それで、今日はまたこのようなよい機会で各位といっしょに話ができて、本当に極めて光栄に堪えないで、夫は何の言葉に回復すればいいか。」

「莫須有先生、あなたはこれで帰るの? もう少し座らないか?」

「そうね、私は帰りたい、早く帰って勉強しないとね、人はいつもこんなふうになんかにほれ込むなら、まだ俗を免ずることができないようだ。」

「私はただ一言だけ言っていい?」

またその遊ぶのがうまい人だ。

「言ってください!」

皆さんは、一緒に彼女を催促する。

「言って! 言ってよ! 言わないと莫須有先生は帰るよ!」

「もし二言を言ったら聞くの?」

莫須有先生は少し我慢できないみたい、ぷいと立った——

「あなたはわざと時間をもったいないでしょう! 私はいつも千載一時にたてまえを悟れる!」

すると、彼女は士気を奮い起こして、瑟をたたいて曰くと——

「莫須有先生、そう、あなたは私たちに天国があると教えてくれた、そう、もしあなたはその中へ歩いていったら、もちろんあなたの魂が高貴である。私たちのような婦人儒子は身分が違うので遠慮するが、しかし、莫須有先生、私は至誠を悟ることができた、私は——私——皆さんの前にどう言えばいいのかなあ? 私はその魂にうらやましい! その魂に尊敬する! だが、私は自分で知っている、天国には私がない、私は見えないのだ。私たちのような女はどうしてこんなにかわいそうなの? どうしてこんなにちっぽけであるの? どうして自分を持ち上げることができないの?」

言い終わったら、周りがしゃくり泣きをし、駟不及舌、取り戻せない。莫須有先生はまだそれが冗談だと思っているが、本当にわれを忘れすぎたね、彼は思わず声を出しちゃった、

「おばさん、私はあなたを聞いてね、もし本当に天上だというところがあるとしたら、私は自分で知っている、神様から私にくれたものではない、私は神様と知り合いではない、そう——そう——私はどういけばいいの? 私はウソをつく勇気がない、ある女子から私にくれたものだ! 彼女は私を済度したよ。ここで非常に感激を言うのが、人生よりもっと敬重することだと言えない。愛情の中に、彼女は自分の身の上を忘れて、彼女の志が高尚

であるが、しかし、彼女は自分で人生を探しに行かなければ鳴らない。私は鬼のわけであるが、でも私は昇天した。私はなぜこんなふうになげくの？ 偶像は以下のように言った、すべての衆生を度（済度）する、衆生は（　　この意味は分からない　　）」　　？？

サンザシを食べてすっぱいと怪しむ者はなだめて言うと、

「やめてやめて、皆さんはこんな程度までに騒がないでください。私に苦しくさせるから、莫須有先生、これを持って……持って……」

隣の人はいいたくてたまらない、

「莫須有先生、早く彼女に感謝しなさい！ 彼女は彼女のハンカチを使ってあなたの涙を拭いてください意味だよ！」

「ええ、誰がその話を言ったの？ 誰が？ 私は自分のハンカチがほかの人に上げるなんて？（そういうようなことがないよ。）」

「ふん、恥ずかしくないで！」

「あなたたち二人の姉妹はどうしたの、こんな小さなことのせいで騒いだの？」

莫須有先生は心配事があるから、全て見えないようにしている。自分の手をポケットに突っ込んだりして、字を書いている紙を取り出した。ふだん彼とよく付き合う人は彼が突然またお金があつて何か質草を請け出そうとして、いつかに過ぎたかどうか確認すると思うかもしれない。彼とあまり知らない人は莫須有先生の大家さんがお茶を包む紙に油や塩の勘定書を莫須有先生に見せると思うかもしれない。だが、両方ともない、莫須有先生は自分で文壇を定めるものだ、言葉が一同を驚嘆させた、ではかれ自分の報告を聞いてください——

「見て、見て、私は詩を作ったよ！」

「見る！」

「見る！」

「あまり一緒にしないでよ！」

すると、莫須有先生は鼻を覆って歌を曰く、この娘はその娘ではない、髪にモクセイの油をすいた。

ただ独りだけこっちに来るのがうれしくなく、遠く離れて膝を抱いて言うと、

「私は、莫須有先生が自分で私たちに読んでくれればいいと思う！」

莫須有先生は注意深い推敲して、さっき彼が言った「我説」というのはたぶん Hello だという意味だ！ そしてあたかも戒尺を出すようで、皆さんにびっくりさせた。皆さんは頭を上げて、

「そう、そう、あなたは私たちに読んでください。」

「もしあなたたちは私がよくできていないといわれたらどうする？」

「いいえ、いいえ、大丈夫だから、読んでください。」

莫須有先生はしょうがなく読みはじまった、

## 詩略

我坐我坐下此石頭、ここまで読んできて終わったかどうか知らないが、莫須有先生はなぜか頭を下げて話さなくなった。

「ばかお姉さん、どうして話さないの？」

「なぜ話さないの！」

「この娘さんはすごいね。」

やはり莫須有先生は自分で静かを打破した——

「あなたたち、皆さんは（この詩）が良い詩だといわないから、きつとうまく作られた物じゃないでしょう。」

「たくさん鳥獣草木の名前は北京人がよく知らない、たとえば、杜鵑があなたは本当に綺麗に咲いているねという文章（を聞くときに）、『杜鵑があなたは本当に綺麗に咲いているね』の意味は何？」

「お姉さん、あなたは本当に詩のことがよく知らないね。（詩というのは）心はその意（雰囲気、意図など）を理解すればよいものだ。莫須有先生、あなたは怒らないで。」

莫須有先生は怒らないよ。彼は想像の馬に乗って彼がしばらく遺失したある杜鵑山へ走っていくのだ。その途中に会う道を行く人たちはまるで深く悲しむ形容を持っている魂のようだ。突然頭を上げて、言いつけると、

「あなたたちはみんな帰ってください、もう早くないから。もし遅く帰ったら姑から怒られるとよくないだろう。」

すると、みなさんは解散して、靴を履いたり、服を整理したり、肩を触れ合いかかとを接して、各自のてんびん棒を持って帰ろうとしている。その中の第一位はしばらく伸びをして、他人の肩にかけて、だるくて笑うと、

「あなたは私を背負って一緒に帰ってください。」

「あなたは怠けすぎて、私は背負えない。」

莫須有先生は彼女のような農村の娘はこのような良い詩を作れることに驚かされた。一人の美人を非常に美しく書かれるのだ。

「莫須有先生、私たちはもう帰る、さよなら。」

そして、莫須有先生は自分の歌を歌いながらゆっくり彼がしばらく離れた家へ歩いていく。入り口に入ると、この空き部屋は格別に感情があるところだと非常に感じられて、しかし声を出そうとするところに、まったく静かだと感じて、ええ、人の一生というのは完全に招待される客ではない。ドアに入るとそれぞれにこびるようになって、誰が相手の話を信じられるか、黄鵠が四海へ飛んでいて、中路将安帰（中路は山西省の地方劇だという意味もある）、ぷっと笑っていた。誰でも私のこのぷっと笑っていた声が知らないのだ。しかも、確かに誰にも見られないのだ。これは熱狂的な演劇ファンだという。中国第一第一中国のある有名な少女の役柄に真似して「ぷっと！あなたは奴を殺したのに恥ずかしくし

ないで！」私は読んだ『四書五経』はどこに行っちゃったかぜんぜん分からない（この意味は忘れた意味だと思う。）私の大家さんはどこに行ったか？きっと私がないときを利用して誰かの家へ遊びに行った！彼女はいつも私が何日間市内へ行ってほしくてたまらない！そうすると、彼女は姉さんか妹かと一緒にお茶を飲むと誘って、しかしその後に残ってご飯を食べるのを誘わないのだ。私のこと大切に育てられてひ弱である呼び名辱めるね！その中に四十二歳になってまだ結婚していない二妹妹がいる、その二人は最も実力が伯仲していて、弁舌がよどみない、「お姉さん、いつも心配させてごめん！」まるで二妹妹の歯が痛いようだ。「お姉さん、私はあなたに礼を言うね！」すべて割鶏のことだ。（割鶏の意味が良くわからない。）「二妹妹、あなたは夜に来てね！」まるでお客を見送るようだ。「二妹妹、明日また来てね！」まるで真夜中に客を送るようだ。翌日の朝、彼女は昨夜に騒いで莫須有先生に起こしてしまったと分かった。しかも、もし騒いで莫須有先生に起こしてしまったら釈然が少しもできないので、チャンスを見つけて必ず詫びを入れる。自分も本当に疲れている、寝不足だし、そして、いっぱい残った皿をまだ洗っていない。すべて自分でやらなければならない！たぶんあなたのように、夜中で人の家へおしゃべりに来る暇がある人がいない！そして見ると、莫須有先生のカーテンから朝日の頭角を現れた。天下大事なことについて莫須有先生はいったい怒るか怒らないか聞きたい（と伝えて）、こういうふうになれば話を出せるようになった——

「莫須有先生、ええ、本当にしょうがないね、ほら、昨夜私の時間をたくさんつぶしたから、きっと莫須有先生が寝るのに邪魔したでしょう。知り合いが来たらかまわないわけがないでしょう。私もうんざりしているよ——あら、うちのこの花は今年本当によく咲いたね、昨夜に莫須有先生は花に水をやったでしょう？」

顔をまだ洗っていないのに、また顔を思わずほころんで彼女の棚に載せてかけている桃の花は今年うまく咲いたのを見ていた。すると、急いで前につまんで行った。

「見て、なかなか面白いね。」

莫須有先生は顔をまだ洗っていない。でも、その棚に載せてかけている桃の花は今日本当に真っ赤に咲いているので、打ち沈んだ表情で声を呑んで——

「綺麗だね。」と言った。

「莫須有先生、私のその従妹は、人があまりかわいくないが、頭がすごく賢いよ。どんなことでもうまくできる。縫い物も良くできるし、本当に珍しい良い娘だ。いつでも両親たちに恨みごとを言わないし、自分がこんな年になってもあまり一言を言わない、簡単に自分の気持ちを表さない——莫須有先生、あなたはよく知らない、うちのようなところにこういう話を言うと笑われるのだ！私のおばさんのせいで、来た仲人があまり気に入らない。（いつも断ると）その後、仲人がもうなかなか来なくなった。もしおばさんが死んだら、娘が誰かに渡すかまったく知らないね！」

急に話がやめた、莫須有先生があそこで白い目をしていると見たから。ようやく両方が各自のよろいと兵器を撤回した。莫須有先生は顔を洗い、口をすすぎながらたぶん怒って

いる、ささやき声だったから。部屋を仕切る壁の向こうの人は盗み聞きしている。あそこはたぶん公衆の台所だ。「何を話しているの？彼が話しているのをはつきり聞こえない！関係ないからどんなでもいい！」すると、頭を下げ一心に蕪をはく。このようなことは、たくさんある。面白い、面白いが、一つずつ思い出せる暇がない。ただ人はそのような父母之邦（国）にいとどう生きてくるか（問題である）？

公平な話を一言言うと、莫須有先生はこちらへいらっしやってから、莫須有先生の大家さんはよく気をつけてあまり出かけない。彼女は別なことが言わずただ莫須有先生のこと印だけ大事なものだといっている。その印が面白い大事なものだ。この手元に置いている！もし子供はここに遊びに来て持ち帰ったらどうする？だから、一日二十四時間、もし莫須有先生一人で出かけると、しかも彼女も正当な理由で出かけなければならなかったら、必ず彼女のある兄に頼んで留守番してもらおう。その人はただ耳が聞こえないおじいさんだけだけど、目がすごく強い人で、まるで、莫須有先生が今日どんな事を考えているかということでも見えるようだ。その考えていることは心配事か、うれしいことか、または憤慨することか、一時怒ることか、彼と話してもいいか、話さないほうがいいのか、あなたと怒るかどうか、すべて形があるものに至って、不良な人、および隠そうとしてかえってばれてしまうことは（全部分かる）。あなたはもちろん来ないので、私はただ耳を覆って鈴を盗めばいいのだ。このとき、莫須有先生は掉歌して帰ってくるところで、ちょうどこの人が家にいる。突然さびしく感じられて、さびしくなったら不平たらたらする。不平たらたら言いたかったら大きい声で叫ぶ、

「私はまたあなたと話すね！」

すると、自分が一つ石を選んで座っていた。

「彼女は出かけて何をしにいったかあなたに教えた？」

また自らおかしく感じて、大きい声で笑っていた。私はまたあなたと話したね！莫須有先生はたぶんいつも彼と話す。また自らおかしく感じて「私はまたあなたと話したね！」といった。隣の聴衆を全部笑われた。莫須有先生は此中人と仲間になる習慣はたぶんまだ浅い。

そして莫須有先生は庭でのその三十歳の棗木の下でしゃがんで地を書く（画地の意味は地面で土を使って何か書く意味だと思う。）。彼は何か字を書くか、花を書くか、または十字を書く。あるいは地を地獄と書く。あるいは地球に一大為天之天と書く。何を書くか私たちは分からない。要するに少し上品である。まるでその遊ぶにうまい哀れむ子は地母の墓の前に行って、黄昏思想して、沈黙させることだ。その耳が聞こえない人は、彼は意外にもこちらに来た。莫須有先生は突然親しい感じをしていた。彼にあるすまなく思っているようである。たぶんいつも彼にそっけなくしたところがあったかもしれない。しかもなぜか知らないが彼は今日苦しんでいる顔をしている。莫須有先生と何か話があるみたいのだ。



## 第十五章 『莫須有先生』に添付される丙

さてあちらの耳が遠い人はようやく莫須有先生にむせび泣かせてなかなか言い出せなくなった。莫須有先生はもう天下にはきつと生・老・病・死があるという前兆を感じた。これで私が元気を奮い起こして少し冷静にしないといけない。私は人生に対していったいどんな態度を持っているのでしょうか。私はある女が泣いて叫んだと聞いたら、同じくように少し恐れ子怖がれざるをえない人だ。まるで人に従って悲しみ憤って歌うようである。実は私はきめ細かく考えるとあれが完全に1つのエキサイティングな作用だと思う。私はべつに心を動かしていない。そうね、私がおぎゃあと生まれ落ちてからこのようである。生きているのにいつも死に対して好奇心がある。すべてのことの中に私の厭世感を最も変わらないのは死に違いないのだ。たぶんこれは一番想像したい境域かもしれない。しかし一度思索したことがないけど、ただ大ざっぱに物事の表面だけを見ただけだ。そして棺を見ることも好きではない、その感じは棺を見たらすぐ怖くなる友達と違うが、ただそれが一つ見苦しい器物だと思う。私が考えている死というのはたぶんただ一つの想像で、経験の一筆画だ——そうであるか、そうではないか？私は一人の少女が死ぬことを恋しく思ってみたことがある。それは人生に対して家に寄るが入らないというべきである。本当に一つの不思議な空白だね！しかし死という服が娘にそっとかけて、すべてのことがいまだかつて手についたことがないが、だがこの花園はもともと自ら思うにするものだ。千載一遇で、また何がひとつの不思議な際限がない色相の夜だ！莫須有先生はたぶん普段にこんなふう自分で千万遍が死んだことがあったのではないか。突然頭をもたげて人生がああ明かりがまさに尽きようとするところから（また始まっていると）！その目は、本当に静かにすると処女といえるが動くとき脱兎といえるね。嘆息を呼びかけて、このわずかな境地はもしかしたら一生の誇りになるに違いない。彼がただ一人の目が見えない人だけでどうしても天地の間を妨げる人になれないだろう？たとえば世の中にひとつの傘があるとすると、傘というものは往々にして私の想像を支えるものだから、すごく美しいと思う。そして絶世之人は行雲行雨、粉白黛緑、羅襪生塵、一蓋之天下、天下之雨、雨の中に更に朝雲の濃淡の様子は、すべてあの傘をめぐる自然になるものだ（ここの造化というのは自然の意味か、果報、幸せの意味かはっきり分からない）——あなたたちはたくさん大自然を征服する術士がいる。だらだらとしている北京の人力車を引き延ばす人、私だってどうして忘れるとだめなのか？恐らく莫須有先生が夢でもわけもない死体を積み上げることができないだろう、それは彼がとてもけちで、造物主のような大きい度量ほどを持っていないからだ。一人の聖人を降誕するとまた自分の目で十字架を打たれることを見られる。莫須有先生はただ一人の有名な詩が書いたものの中からある女王が醉生夢死を見たことがある。時には彼は確かに自分が人の銃で打ち殺したことが見えるが、目が目覚められることはちょうど自分がまだとても焦りの人だという証拠だ。心の中はどきどきと跳んで、このような一つ

恐怖の夢をしたなんて（考えられないことだ）。

「莫——莫——莫須有先生、私——私の姪は今朝死んだ！」

「これは——これはどんな話なのか？」

「昨夜に病気になったばかりなのに、まだ一日を過ごしていないが子供がもういなくなつた！」

この話を聞いたら莫須有先生はやっとバックの中から跳んで来て、速くて迫って呼吸して、早速にとんぼ返りが始まった。でも大きい太鼓をすりつぶしても反響してくれると気づいているが、バックの下にいる大学教授達は喝采しているようである。この道化役者はあなたが時間を無駄使いしないで、私達が見たいのは芸術家の楊小楼だよ！読者の皆さん、世の中の事は説くことができない。この一瞬はその一瞬ではない、一言を聞くと狂うことができる、1通のラブレターだったらまた運命を継続することができる。莫須有先生は急いで忙しい中に暇を見つけて、言っではいけない・言っではいけない境地まで思索しちやつた。本当に生死の岸までに何度も行って来たが、まったく届ける場所がない。それから文字を記号にするほかがない、彼女か？彼女か？彼女か？私と彼女は一面識の間柄があつたのに、なくしちやつたなんて？この話はどのように理解すればいい！私は自然がどのように明日の花になるかということにどうしても見えないが、しかし私は本当に昨日の明るい目から1つの人生を書いてはいけないね、美しい女の子は、言わんとするところ私はもう1つの終身の遺憾であることだ——どうしたの、ただ1人の耳が聞こえない人から私にひと言を言われたからか？言語と文字は何を代表するか？世の中の事はすべて1つの縁のことだ！ハッハッ、私は得るところがる！悟ることがある！これはどうしたの！これはどうしたの！あなた達は騒がないでください騒がないでください！私はきっと参禅する可能性を持っている！しばらく目を閉じさせて……

「莫須有先生、あの娘は本当に賢く生まれた子だ、賢い子はいつも命が短い！」

「私はもうあなた達の話の聞かない・聞かない、耳が聞こえないおじいさんはあなたが泣かないで・泣かないで、私の世界は何か増減するところがあるか？あなた達のこの無名の女の子がいる前に私が私の世界を持っていた、あなた達のこの名を持つ女の子がなくなった後に私の世界がまだ私がいるのだ——しばらくもう少し観察させてください——そうだ、世界はちょうど一人の記憶と同じぐらい大きさである。（その世界の大きさは）かわいそう莫須有先生がいつか死んだら1つの穴を空いて何かものを棄てられるのができない。「我的」というのは何？むしろ私のこの字を書くペンは私のものだと言ったほうがいいかもしれない！私は瑠璃廠で買ってきたものだ！私が死んだら持って一緒に行く！ある古人の夢の中でペンをなくした！張翰松江雨をしようと思ひ、屏風に画いて鮑昭へ送ろうとする。しかし私のこの解脱された体はまた私に従って一緒に行くので、思わずに私の彼岸之涙が方向を変えてくる、風蕭々兮易水寒、確実に泣いて分かれようとする、もう一度認識しよう、そうすると私はやっと本当に最も愛させる私になる、是非を転倒し、敵を味方と取り間違え、孤独で訪ねる人がいない、ずっと俗世の言い方で「莫須有先生の真価は死後

に定まれたのだ」(と言うとこれで終わるのだ)。人はこれから死んだと認められる。今日、彼女、彼女、彼女、美しい女の子、まるで私が書いた絵のような、私の自慢な作ね、私に狂喜させ、寂しくさせ、自分のことをよく理解させ、宇宙を思索させ、もともと物が一つもなかったが、ただ顔料の順列をよく並べるだけだ。時間を侵食されるのは当然なことだが、それもただ顔料の変化だけだ。すべて、すべて、これはすべてであろう、もしあなた達はこの言葉の確かさを感じられなかったら、それはあなた達のはっきり感じていないから、それはあなた達の生活が不十分だから！ハッハッ、それから私は空っぽなにぎやかを書こう、そうすると私の生活がとても面白くなれる、千輪花でも万輪花でもこれだけは本当の意味があるものだ、詩が曰くとトビが飛んで、魚が淵から飛び込んでくる、あなたは見て、もう飛んできた・飛んできた、私のドアの前に飛んできた、ハッハッ、女の子のオウムなのだ、オウムは、女の子は現在もういなくなった、あなた、あなた、ええ、ええ、思わず私の心から理由がない涙をこぼした、こぼした、花の枝にこぼしたのはすべて私のひどく後悔なのだ……

これで莫須有先生の両目を開いて、金色の光をたいへん放して、白昼でも変化しないようである。どうしたの私はまさか自分で目覚めるのを催させたの？夢だったか？どんな寝言を言ったか？誰かに聞こえたのか？後ほど人は私が恋愛の中から生死に解脱してきたと言われると困るね！私の大家さんはまだ帰っていないね、耳が聞こえないおじいさんは彼がまだここで悲しみがあるようである——耳が聞こえないおじいさん、私は何を言ったか？おかしいね私はまたあなたと話すなんて！これでは莫須有先生はたいへん驚いた、今日の私は完全に昨日の私ではない、明鏡はどこに至ってもその認識を使わないところがない、10年間がずっと信じることもできなくて解くこともできない道を突然通曉したら、私はどうすればよいのか？まだ普通のように日々を送るでしょうか？私がいる地球はきつといつもと同じだ、それでは生きとし生けるものたちの中に一人が格外に奇抜であるとそんなに退屈なことじゃないでしょう、こんなふうに工夫する値打ちがあるのだ、そうしないと私が兄弟子であり、あなたが弟弟子である、出かけて買い物をしに行つて、顔を合わせると拱手して礼を言う、あるいはまた太平の世に当たつて、？帽やコート、元旦に新年の挨拶をして、おめでとうおめでとう、金持ちになるのを祈り、そうするとどんな世界になるのでしょうか？実は、私はただ私たちのこと社会がある合理的な社会になってほしい、人々がみんなお互いに台無しにしないでほしい、その動物よりよく見られればよい。とにかく北京の公園のようで、皆さんは暇があつて、青年男女、鳥がさえずり・花が香り、一緒に生きの楽しい音楽を演奏すればいい。私は、ようやくこんなふうに来ちゃつて、棄てることを惜しまない。私はまだ私であり、ただ一つの万物之魂になり、お高く人生の塔の上に立って、笑つて涙をこぼす。しかし、私は以上のような考えは全て居眠りをしているかと心配している。それはこのような境界がきつと寝ない眠りの境界と比べられるだけだからだ。しかし、人生がもっともいいのはある精神を持つことだ。私はその精神を持つのが長く続けないと心配しているのだ。明日朝起きるときつとまた煩悶になるのだ。人と

会ったら嫌になる。あなたたちはどうしてそんなに愚かであるの？しかし今は私のこの造詣（お目にかかることか・造詣ということか、よく分からない）は確かなことだ。本来はその夢はすでに時間と空間を組み合わせたが、だから如来の口を開くと三世のことを見えるのだ、明日はどのようなになるか明日また見ればよいのだ。それはいわゆる日月至焉（もっといい日々がないという意味か？）ということだ。私はあなたに教えましょう、聖人は実は本当の凡人であり、経典もほとんど小説である。ただ私、この聖人ではなく法を持たない人だけは最も道理がよくわかっている。ごく小さな部屋のうちに、毎日ここに座って口先だけの計算をすると、まるで小さいころに読んだ寓言の中に書いている怠け者と同じではないか、横たなって・横になって、一步一步——私の瓶が蹴飛ばされて倒れたよ！しまった、破れた！切実に望んでその甌に気を配るに堪えない。耳をそばだて万籟寂として声なし、これはどういうことでしょうか？……

なんと莫須有先生はさっき独り言を言っていたが今はもう部屋に入ったのか。オンドルで横になって壁に向かって昼寝をしている。咫尺の間にこの人のためにはこんな大きいオンドルを用意されたから、残った隠居者の本とか、およびなんか瓶や絵、骨董などは、すべて置く場所がない。しょうがなくてこの没落した家の枕元をすばらしいもので飾るほかがないのだ。今年の雨は多いので、（部屋の）天井はあちこちからやや雨漏りしている。真夜中に雨漏りするかどうか心が安らかでない、にわか火を求め、一生のおもちゃでも不慮の災難があると心配している。もしこの小さい花瓶を言うならば、窓の近く隅っこに追いやれて置けばよい。今なおまだ花を入れていない。普陀山から来たある長老が贈ってもらった花瓶である。いわゆる建漆（福建省産の漆器）というものだ。莫須有先生はいつも驚かされて頭をもたげて、その小さい影に立つことを愛して、月夜ではなかったら、照明器の明るさだ。壁に影が出たばかりなのに、また邪魔だとすぐ言っちゃう——ははは、それは私が頭を下げて人を間違えに見たからだ。何が大きい影なものか！絶対私の影だ。すると手で影を触ろうとしたかったが、鏡に映る花・水に映る月だか自ら意見を出した。（ここの意味ははっきり分からない。）しかし今日・今日、私は・私は、まるで子供のように、この瓶を足で蹴飛ばして倒れ、破れたことがぜんぜん思ったことがなかった。したがって、小さいことなのになかなか許せない——いいえ、いいえ、あなたたちはよく知らない、よく知らない、私はこういうふうな人だ、私は常にしばらく心がいやになる。それはただ渡し自分だけ知っている。私は最も引き裂きたいのは明らかにかつて私の一つの良い詩なのに、私が何か凶悪なことをしたみたいで、今自業自得される。実は私はなんと偽善者のかもしれない。すべてのことはできるだけ自分と関係がないようにしたい。ニワトリを殺してキビのために食べられる、願意坊は料理人のためにさっぱりきれいに洗われる、私は君子の学校の人になると望んでいる、私は学校人の魚になると想像する、そこで言語道断人がわれわれの衆生たちは実は一つのものである、畜殺用の包丁を捨て、血流漂杵、豕が立って人が泣く、杯中の蛇影、漢朝にはあるブタ人がいた、姐がハッハッと大笑いして、そこで莫須有先生は気がふれて、孤鸞が鏡に向いて自ら踊り始まってなかなかとまらない、

すると疲れて死んだ……

そして頭をかいて何を言っているか良く分からない。首切り人は一刀で人の生命をもらえるが、生命之河は昼夜兼行で流れ、一生には気に入る話をひところも言ったこともない、ええ、凡人はみんな死にそうになるとしばらくはっきりしない時期がある、だからうわごとを言うのが避けられない。私は今日、どうしても少しこのような光景しているじゃないのか？……

「ええ、私は生命に忠実である。今日はこの生命を見たら無知である。」

そしてまた空いている山に人が見えないが、人の声を聞こえる——

『莫須有先生伝』は一口の金銭出納帳である、丙を添付される。」

すると、後ろを振り向いていまだに重く言うと、

「私は、まだ大家さんが戻ってきてから彼女に帰る必要があるのだ。」

また言うと、

「私は会えないと話せないわけではないが、それは完全に反応作用だけだ。まるで空間にはいつも反響があると同じだ。天下には奇跡がない。」

もう遅くなるから、莫須有先生の大家さんはもうお悔やみに行って戻ってきた。道の入り口のところに着いたら、三脚猫太太とであった、するとなかなか動けなくなった。三脚猫太太は今日も相変わらず忙しいが、彼女も動かなくなった。話し始まった、

「お姉さん、これはどんな話？ 楽子さんは死んだって！」

「三妹妹、ほら、うちの妹の命が本当に苦しいね、ただ一人の娘さんも彼女に残してあげないのだ！ 私は、彼女がまた良く考えないと心配している（がんばって続いてよく生きることができないと心配する意味だと思う）——ええ、私はもう疲れるんだ。真夜中から今までずっと起きていて——三妹妹、あなたも座って、うちらは少し話せばいいかもしれない。ここがいい、この石がいい。」

「あなたも座って座って——いい娘なのにこんなに簡単にいなくなったなんて（もったいない）！ どんな話か！」

「三妹妹！ 三妹妹！ どうしたの！ あなたが泣いたら私はもっとつらくなるよ。」

「ううう——姉さん、あなたは逆にして私を慰めないで、これはだめだよ！ ううう——姉さん、これから私は絶対に私の娘にたたかないよ！ 娘はいつも髪を切りたいと騒いでいるから、明日はお父さんに切ってもらおう！」

「そうよ！ 子供だからね、学校の女の子たちは髪を切ると見たら、彼女も切りたくなるでしょう。」

「姉さん、うちらのような家庭はいい相手をなかなか見つけられないよ！ 文明の家（身分が違う方）は遠慮するでしょう、ただこの農村の誰かを見つかるしかないでしょうね！ 脚をそのままにして、うちの娘をほしくないと恐れているでしょう！ 姉さん、ほら、今の市内の女子たちは、毛の抜けたしっぽ鶉のような頭だけではなく、脚もそのままにして何もはかないのよ！」

このとき莫須有先生は我慢できなくて孫悟空があそこに隠してぷっと笑っていた。それで三脚太太は一匹のスズメバチが彼の目の前に飛んできたと思ったら、スズメバチでも人に刺すのだと一声怒鳴りつけた。

「三妹妹はあなたがもし用事があれば帰っていいよ——また夜に来てね。」

「じゃ、また夜ね。」

莫須有先生の大家さんはある冷たい石に座って立たない。蒼茫を見回して、何も見えない。ただ自分の一生を見たようだった。人の一生はこんなに中身がないものだ。しかし老年になると仲を取り持つことができるようになる（随在）、独り言を言うと、

「私の銀児、銀児、ほかの人の娘よりもっとすっきりしている。両目、両目、まるで家の後ろの君子娘さんと同じような模様だ。莫須有先生はいつも君子娘さんが器量がよいと言っている。銀児、あなたも幸せな人じゃないね。病気になった日にも学校に行きたいって、本が好きだね、もしまだ生きてると今は莫須有先生と一緒に勉強すればいいでしょう！賢い子はいつも長生きできないのだ。その君子娘さんも（長生きできないね）、彼女のお母さんの代わりに心配しているね！」

このときの莫須有先生はすべて知りすべてでき、何か感じ事がある様子で、すると私は聞いて曰くと、

「ええ、ええ、親子之愛は近隣のねたむことだ。」

「莫須有先生はまだ戻ってきたか良く分からないね！私は彼の賢いところを見たらがんばって仕事をしたくてたまらない。もうこんなに遅くなって彼はおなかやすいたかしら？」

「大家さん、お帰り。私は本当にしばらくあなたと話していなかったよう泣きがする。」

「あら、莫須有先生、あなたは今日、どうしてこんな様子か？顔がやつれている。私が背後で何か話したことを聞いたら、あまり心配しないでね。」

「あなたはこの話を聞くと、私にあることを思い出させた。去年の今日には私は昔のある友達からある手紙をもらった。彼は私の近いうちに取った写真をももらった後に返事してくれた。彼は近年に私の文章を読んできて、元気いっぱい得意満面のような感じをしたが、しかし、近いうちに撮った写真を見たらなんと病気のような顔色かと思えるといった。この話を聞いたら私に感慨させた。しかし現在、私は世俗の言語であなたに最初教えたいのは生き別れと死に別れの話である。」

作は語りであるが、笑いながら涙をこぼす。

「どんな話？莫須有先生——莫須有先生！あなた、あなたはその怖そうな考えをしないで！私の勧めを聞きなさい！聞きなさい！あなたは断崖に臨んで馬の手綱を引き締める人だから、去年、あなたはある日の夜に山へ行っちゃった。私は大変心配して灯籠を持ってあちこちにあなたを探しに行ったが、ほとんどふとした間違いが一生の悔いを残そうとするところに、私はあなたをつれて帰ってきた。一年後にあなたはまたたくさん文章を作ったが、でも、この話を聞いた人がまだ第二人がいない。だから、今日は、あなたはあまりあれこれとくだらないことを思い巡らさないでください、私の話を聞きなさい！聞きなさい！」

い！」

「今日のことは、身を投げてトラにえさをするようであり、一つのアシだけで河を渡ろうとしている、完全に精神的な問題だ。」

「あら、本当だ、私もそのような感じをする、階の前になるとトラの心も善良になる、人には一つ怖い感じもさせないものだ。世の中のことはすべて面白く言うものだ——莫須有先生！莫須有先生！あなたはもう少し道理をわたしに教えてくれればいいのよ。そうすると、私でももっと進歩できるでしょう！」

「どんなことでも無理にするものではない。」

「どうしてそんなに短気であるの！ゆっくり考えて。」

「私は一生に短気な人である。だから今まで直るわけがないでしょう。私のために天下に話しを伝えてください、『莫須有先生伝』は麒麟のような絶筆をもらうことができる。これから、和気あいあいとしているようになる。この心が俗の情がなくなると人々に平安・幸福を心から願う。」

「そうすると、さよなら。」

「あなたに平安を心から願う！」

「あなたに平安を心から願う！」

## 废名研究资料目录索引

- 《竹林的故事》序/周作人//《语丝》1925年10月12日第48期。
- 《桃园》跋/周作人//《桃园》，上海开明书店1928年版。
- 关于废名《桃园》之批评/拙亭//《开明》1929年4月10日第1卷第10号。
- 《夫妇》篇附记/沈从文//《小说月报》1929年11月10日第20卷第11号。
- 《竹林的故事》和《桃园》/毛一波//《真善美》1929年12月16日第5卷第2号。
- 《枣》和《桥》的序/周作人//《莫须有先生传》，上海开明书店1932年版。
- 《桥》（书评）//《现代》1932年8月1日第1卷第4期。
- 评废名著《桥》/灌婴//《新月》1932年11月1日第4卷第5期。
- 废名所藏苦雨斋尺牍跋/周作人//《人世间》1934年5月20日第4期。
- 论冯文炳/沈从文//《沫沫集》，上海大东书局1934年版。
- 《中国新文学大系·小说二集》导言/鲁迅//《中国新文学大系》，上海良友图书公司1936年版。
- 一人一书——论鲁迅、知堂、蒋光慈、巴金、沈从文及废名的创作/施蛰存//《宇宙风》1936年1月1日第32期。
- 《画梦录》——何其芳先生作/刘西谓（李建吾）//《咀华集》，文化生活出版社1936年版。
- 《文学杂志》编后记/朱光潜//《文学杂志》（朱光潜主编）1937年6月第1卷第2期。
- 评《桥》/孟实（朱光潜）//《文学杂志》（朱光潜主编）1937年7月第1卷第3期。
- 势所必至，理由固然/鲁迅//《奔流新集》第一辑《直入》，奔流社1941年版。
- 冯文炳的小说/余拯；杨华之//《文坛史料》中华日报社1944年版。
- 《谈新诗》序/周作人//《谈新诗》，北平新民印书馆1944年版。
- 怀废名/药堂（周作人）//《谈新诗》，北平新民印书馆1944年版。
- 《谈新诗》跋/黄雨//《谈新诗》，北平新民印书馆1944年版。
- 《桥》/周作人//《书房一角》，北平新民印书馆1944年版。
- 随笔六则（六）/胡兰成//《天地》月刊1944年7月第10期。
- 关于废名/黄伯思//《文艺春秋副刊》1947年3月第1卷第3期。
- 佛教漫谭（四）/一盲//《世间解》1947年10月15日第4期。
- 记废名和徐盈/高翔//《论语》1948年2月16日第147期。
- 今日文学的方向——“方向社”第一次座谈会纪录//《大公报·星期文艺》1948年11月14日。
- 与冯君谈佛家种子义/熊十力//《十力语要初续》，香港东升印务局1949年版。
- 对于《杜甫写典型》一文的意见/乔象锺//《光明日报》1957年3月24日。
- 目前杜诗研究中存在的问题——评《杜甫诗论》和《杜甫写典型》/吴代芳//《文史哲》1957年第1期。



迎接大放大鸣的春天——访长春的几位作家/沛德//《文艺报》1957年第11期。

论冯文炳先生的《杜诗讲稿》/郭士山//《光明日报》1958年11月2日第6版。

就《阿Q正传》的几个主要问题和冯文炳教授商榷/刘中恕//《吉林大学人文科学学报》1957年第2期。

对冯文炳教授《阿Q正传》一文的意见/庐湘//《吉林大学人文科学学报》1959年第2期。

一副引人的剪影——重读《跟青年谈鲁迅》/杨扬//《人民日报》1961年9月28日。

也谈杜甫的《登楼》/翰逢//《吉林日报》1961年12月29日。

论美学及其科学的研究途径——谈冯文炳先生《美是客观存在和美学》的几点意见/金恩晖//《吉林大学社会科学学报》1962年第4期。

对《谈艺术形式》一文的意见/刘柏青//《吉林大学社会科学学报》1963年第2期。

略论艺术形式的历史规律——读冯文炳同志《谈艺术形式》一文的几点意见/韩凌//《吉林大学社会科学学报》1963年第2期。

发现一个小说家——废名研究资料初编/罗青//台湾《书评书目》1974年第1期。

冯文炳/陈敬之//《畅流》1975年第51卷第12期，第52卷第1期。

从《桃园》看废名艺术风格的得失/凌宇//《十月》1981年第1期。

悲凉冷酷生活的写照/党秀臣//《小说鉴赏文库·现代文学卷》，山西人民出版社1981年版。

中国新文学研究纲要/朱自清//《文艺论丛》1981年第14辑。

《论卞之琳的诗》后记/冯健男//《诗探索》1981年第4期。

关于鲁迅从“五四”到一九二七年的思想（致《鲁迅研究》作者冯文炳同志的信）/邵荃麟//《图书馆杂志》1982年第1期。

废名小说的田园风味/杨义//《中国现代文学研究丛刊》1982年第1辑。

四十年代中期的上海文学/唐弢//《文学评论》1983年第3期。

废名/黄裳//《大公报》（香港）1982年6月30日；7月1日。

不断进取 有所作为——怀念冯文炳先生/金训敏//《吉林大学学报》1982年第6期。

废名遗嘱亟待整理/吴小如//《文汇报》（香港）1983年1月16日。

冯文炳小传/陈振国//《新文学史料》1983年第4期。

废名传略/陈振国//《文教资料》1983年第5期。

废名年谱/陈振国//《文教资料》1983年第5期。

废名作品系年/陈振国//《文教资料》1983年第5期。

《冯文炳[废名]选集》序/卞之琳//《新文学史料》1984年第2期，《当代》2000年第5期。

说废名的生平/冯健男//《新文学史料》1984年第2期。

废名诗论遗著的发现/陈振国//《文汇报》（香港）1984年3月13日。

《冯文炳选集》编后记/冯健男//《冯文炳选集》，人民文学出版社1985年版。

略谈废名的小说/倪墨炎//《语文学习》1985年第4期。

谈废名的小说创作/冯健男//《中国现代文学研究丛刊》1985年第4期。

废名诗《街头》欣赏/周良沛//《名作欣赏》1986年第1期。

废名：一支平淡而朴素的笔/燕平//《现代作家四十人》，上海人民出版社 1986 年版。

废名：从冲谈、古朴到晦涩、神秘/金宏达//《走向世界的文学》，湖南文艺出版社 1986 年版。

一位具有独特风格的作家——《废名选集》代序/马良春//《惴惴集》，海峡文艺出版社 1986 年版。

莫须有先生传/金训敏//《中国现代百部中篇小说论析》，吉林大学出版社 1986 年版。

废名/张中行//《负暄琐话》，黑龙江人民出版社 1986 年版。

鲁迅与废名/吴作桥//《江汉论坛》1986 年第 10 期。

怀废名/鹤西//《新文学史料》1987 年第 3 期。

废名：挥洒自如 涩如青果/张以英；诸天寅；完颜戎//《中国现代散文一百二十家札记》(上)，漓江出版社 1987 年版。

废名艺术精神双层面初探/肖平//《江西社会科学》1988 年第 3 期。

废名——杰出的散文家/冯健男//《江汉论坛》1988 年第 6 期。

废名与禅宗/李俊国//《江汉论坛》1988 年第 6 期。

废名和沈从文的文化情致/杨义//《文化冲突与审美选择》，人民文学出版社 1988 年版。

“梦之使者”——析废名小说的审美方式兼谈三十年代“京派”乡土文学审美倾向/李俊国//《湖北作家论丛》1988 年第 2 期。

《海》赏析/陈振国//《中国新诗鉴赏大辞典》(吴奔星主编)，江苏文艺出版社 1988 年版。

《街头》赏析/陈振国//《中国新诗鉴赏大辞典》(吴奔星主编)，江苏文艺出版社 1988 年版。

《冬雪》赏析/张俊山//《中国新诗鉴赏大辞典》(吴奔星主编)，江苏文艺出版社 1988 年版。

独有趣味的罕见追求——废名与他的《桃园》/崔明芬//《中文自修》1989 年第 7 期。

简评废名论诗/潘颂德//《上饶师专学报》1989 年第 1 期。

废名诗歌解读/蒋成渝//《中国现代文学研究丛刊》1989 年第 1 期。

幽美·孤峭·自然——从《菱荡》析废名/马伟//《淮阴师专学报》1989 年第 3 期。

别具风格的废名小说/倪墨炎//《现代文坛随笔》，上海人民出版社 1989 年版。

废名在战后的北大/冯健男//《新文学史料》1990 年第 1 期。

从《竹林的故事》创作特色看乡土文学的另一角度/惠转宁//《青海教育学院学报》1990 年第 1 期。

论废名和沈从文的小说创作——兼谈中国现代抒情小说的特征/殷卫星//《徐州师范学院学报》1990 年第 4 期。

废名的《河上柳》/树严//《江淮论坛》1990 年第 5 期。

水的情致 诗的意趣——读废名《竹林的故事》/陈方竞//《名作欣赏》1990 年第 6 期。

“我是梦中传彩笔”——废名略识/孟买//《读书》1990 年第 10 期。

花将长在你的海里——析废名的《海》/叶之蓁//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学

出版社 1990 版。

直面人生永恒的悲哀——析废名的《掐花》/肖建国//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

创造的人生是永远的美丽——读废名的《妆台》/孙玉石//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

爱与死冷静的歌吟——析废名的《小园》/聂金森//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

轻松中浸着悲凉与沉重——浅析废名的《理发店》/孙玉石//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

一盏寂寞的灯——读废名的《灯》有感/陈广斌//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

和老子“相晤一室”——读废名的《灯》有感谢颐城//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

我感到梦的真实与美——废名的《星》读后/黄尧//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

思想是一个每人——读废名的《十二月十九夜》/孙玉石//《中国现代诗导读 1917-1938》，北京大学出版社 1990 版。

《街头》鉴赏/张新//《新诗鉴赏辞典》，上海辞书出版社 1991 年版。

《星》鉴赏/张新//《新诗鉴赏辞典》，上海辞书出版社 1991 年版。

《十二月十九夜》鉴赏/潘颂德//《新诗鉴赏辞典》，上海辞书出版社 1991 年版。

试论废名小说的语言和意境/何本伟//《集美师专学报》1991 年第 1 期。

中国现代堂·吉诃德的“归来”：《莫须有先生传》、《莫须有先生坐飞机以后》简论/钱理群//《云梦学刊》1991 年第 1 期。

废名小说的美与晦及其深层关联之谜/金训敏//《文艺争鸣》1991 年第 1 期。

废名与胡适/冯健男//《新文学史料》1991 年第 2 期。

废名小说的禅学底蕴/姜云飞//《浙江师大学报》1991 年第 3 期。

废名谈诗和小说/冯健男//《河北师大学报》1991 年第 3 期。

瞬间的人生顿悟——废名的小诗《理发店》赏析//《语文月刊》1991 年第 3 期。

温馨柔美的人性世界的“梦之使者”——废名小说《浣衣母》论析/李俊国//《名作欣赏》1991 年第 5 期。

废名小说的禅道投影/胡绍华//《东北师大学报》1991 年第 6 期。

废名的艺术风格与审美理想/叶昌前//《山西教育学院学报》1991 年第 7 期。

绿色世界的生命形态和审美形态——对废名《菱荡》的体悟/杨义//《语文学习》1991 年第 7 期。

周作人与俞平伯、废名——师生之间/钱理群//《周作人论》，上海人民出版社 1991 年版。

冯文炳研究资料/陈振国//海峡文艺出版社 1991 年版。

- 废名的《桥》与禅/罗成琰//《中国现代文学研究丛刊》1992年第1期。
- 解放前废名研究述评/刘秉仁//《社会科学动态》1992年第1期。
- 废名小说的意境结构分析/徐文谋//《山东师大学报》1992年第2期。
- 略论废名小说的庄禅意趣/孙基林;柳磊//《山东社会科学》1992年第2期。
- 禅化的自然:废名小说自然描写的艺术方式/刘海军//《北京大学研究生学刊》1992年第3期。
- 论废名小说的文体特征/朱亚宁//《四川师范大学学报》1992年第4期。
- 近十年废名研究述评/刘秉仁//《中国现代文学研究丛刊》1992年第4期。
- 试论废名抒情小说的风格演化/肖平//《江西社会科学》1992年第4期。
- 思索生命——废名小说意象读解/饶新冬//《上海大学学报》1992年第5期。
- 废名小说四组意向系列/饶岬//《中文自学指导》1992年第9期。
- 《桥》:在禅境中构筑/杜秀华//《辽宁大学学报》1993年第1期。
- 废名研究在台湾/陈振国//《文教资料》1993年第2期。
- 废名与家乡的文学因缘/冯健男//《黄冈师专学报》1993年第3期。
- 童年经验与东西文学传统的契合:废名小说意象探源/饶岬//《福建论坛》1993年第4期。
- 废名:走着独殊的自己的艺术之路——周作人论废名简评/陈明刚//《黄冈师专学报》1993年第4期。
- 《废名田园小说》序/吴忠杰//《废名田园小说》,上海文艺出版社1993年版。
- 废名的诗与禅/王泽龙//《江汉论坛》1993年第6期。
- 是“诗化”不是“散文化”:废名研究之三/饶新冬//《上海大学学报》1994年第1期。
- 废名:传统中的现代/[美]史书美;岳耀钦//《殷都学刊》1994年第4期。
- 略论废名小说的审美意蕴与艺术表现/李文平//《贵州社会科学》1994年第5期。
- 从追踪鲁迅到走向周作人——冯文炳乡土文学的创作路向/杨剑龙//《学术研究》1994年第5期。
- “言志派”的渊源与流向——周作人、俞平伯、废名合论/刘绪源//《解读周作人》,上海文艺出版社1994年版。
- 废名与周作人/郭济访//《名人传记》1994年第11期。
- 论笔禅趣写田园:废名及其对现代抒情小说的影响/杜秀华//《文学论》1995年第1期。
- 初读废名/摩罗//《黄冈日报》1995年2月26日第4版。
- 废名与熊十力/陈建军//《黄冈日报》1995年3月19日第4版。
- 人静山空见一灯:废名诗探/冯健男//《文学评论》1995年第4期。
- 废名小说创作简论/王才路//《烟台大学学报》1995年第4期。
- 废名在战乱中的黄梅/陈建军//《黄冈日报》1995年5月14日第4版。
- 论废名的诗学/王家康//《河南教育学院学报》1995年第4期。
- 废名审美意识的心理机制/徐春枝//《荆门职业技术学院学报》1995年第5期。
- 废名的文章/吴小如//《书廊信步》,辽宁教育出版社1995年版。

我和废名师的最后一面/吴小如//《书廊信步》，辽宁教育出版社 1995 年版。

文明冲突的抉择——“五四”时期鲁迅、废名小说创作价值取向之比较/朱晓江//《杭州师范大学学报》1995 年第 5 期。

交响东西方传统，走向世界文学——废名综合论/饶岷//《福建论坛》1996 年第 1 期。

《废名小说选集》代序/王曾祺//《中国文化》1996 年第 1 期。

序《废名小说选集》/严家炎//《中国文化》1996 年第 1 期。

树荫下与驴背上——论废名创作的两个时期/张可喜//《河北学刊》1996 年第 2 期。

新发现的废名四篇著作/[韩]吉贞杏//《中国现代文学研究丛刊》1996 年第 2 期。

废名小说论/李关元；葛红兵//《海南师院学报》1996 年第 3 期。

梦的真实与美——读郭济访著《废名传》/杜颖梅//《徐州师范大学学报》1996 年第 4 期。

二十年代废名（冯文炳）乡土小说的民俗倾向/张永//《镇江师专学报》1996 年第 4 期。

论废名的田园小说/马从正//《江苏教育学院学报》1996 年第 4 期。

废名的新诗观/孙玉石//《野草》（日本“中国文艺研究会”会刊）1996 年 8 月第 58 号。

“废名”就是名——鲁迅与冯文炳/方向东//《鲁迅与他“骂”过的人》，上海书店出版社 1996 年版。

废名：现代堂吉诃德的归来/钱理群//《精神的炼狱——中国现代文学从“五四”到抗战的历程》，广西教育出版社 1996 年版。

废名小说晦涩之因探析/陈建军//《黄冈师专学报》1997 年第 2 期。

“画梦”与“写实”的艰难选择——废名小说创作的困惑/李文平//《重庆师院学报》1997 年第 2 期。

对中国传统诗现代性的呼唤——废名关于新诗本质及其与传统关系的思考/孙玉石//《烟台大学学报》1997 年第 2 期。

哀愁·田园·梦：对废名前期小说的一种解读/贺昱//《西藏民族学院学报》1997 年第 2 期。

道境与禅境：沈从文、废名小说意蕴比较/杨厚钧//《云梦学刊》1997 年第 2 期。

废名的小说艺术/冯健男//《文艺理论研究》1997 年第 3 期。

论废名小说《桥》的诗化特征/吴晓东//《中国文学报》1997 年 4 月。

废名的乡土小说特点/赵跃鸣//《镇江师专学报》1997 年第 4 期。

废名的几副对联/陈建军//《黄冈日报》1997 年 9 月 4 日第 4 版。

简论废名艺术个性的形成/李文平//《江汉论坛》1997 年第 6 期。

废名的“儿童心态”/刘绪源//《冬夜小札——刘绪源书话》，浙江人民出版社 1997 年版。

万寿宫丁丁响——代序/王曾祺//《废名短篇小说集》湖南文艺出版社 1997 年版。

废名小说艺术随想/严家炎//《废名短篇小说集》湖南文艺出版社 1997 年版。

《废名短篇小说集》编后记/冯思纯//《废名短篇小说集》湖南文艺出版社 1997 年版。

《纺纸记》序/鹤西//《纺纸记》，珠海出版社 1997 年版。

《纺纸记》编后记/倪伟//《纺纸记》，珠海出版社 1997 年版。

梦中彩笔创新奇——废名的文学生涯和小说艺术/冯健男//《废名小说》（上），安徽文艺出

版社 1997 年版。

《废名小说》编后记/艾以//《废名小说》(下),安徽文艺出版社 1997 年版。

《海》赏析/云惟利//《20 世纪中国新诗辞典》(辛笛主编),汉语大词典出版社 1997 年版。

《掐花》赏析/云惟利//《20 世纪中国新诗辞典》(辛笛主编),汉语大词典出版社 1997 年版。

遥远的钟声——记冯文炳老师/郑启幕//《人民日报》(海外版)1998 年 1 月 27 日。

《冯文炳著作年表》补遗/陈建军//《黄冈师专学报》1998 年第 1 版。

圈子里的姜文/曹文轩//《文学世界》1998 年第 1 期。

废名与黄梅乡村/赵跃鸣//《江苏社会科学》1998 年第 1 期。

纯朴自然 空灵超脱——沈从文、废名小说意境比较/闫继承//《沈阳大学学报》1998 年第 1 期。

新发现的废名佚诗 40 首/吴晓东//《中国现代文学研究丛刊》1998 年第 1 期。

生命哲学:废名小说艺术关照的底蕴/彭松乔//《武汉教育学院学报》1998 年第 1 期。

论废名小说中的诗与禅/朱晶//《娄底师专学报》1998 年第 1 期。

新诗的散文美——读冯文炳《谈新诗》札记/左文华//《辽宁师专学报》1999 年第 1 期。

论卞之琳诗文中的废名影响/江弱水//《南大语言文化学报》(新加坡)1998 年第 3 卷第 2 期。

论废名早期小说的美学特征/张可喜//《河北学刊》1998 年第 3 期。

废名小说的禅意与佛性/陈国恩//《四川三峡学院学报》1998 年第 3 期。

废名研究资料目录索引/陈建军//《鄂州大学学报》1998 年第 3 期。

废名小说的诗与真/冯健男//《河北师范大学学报》1998 年第 4 期。

略论废名诗歌的哲理境界/赵彬//《荆州师专学报》1998 年第 6 期。

废名佚文考/止庵//《文汇读书周报》1998 年 7 月 4 日。

本书说明/陈子善//《论新诗及其他》,辽宁教育出版社 1998 年版。

《竹林的故事》及其他/唐弢//《晦庵书话》三联书店 1998 年版。

《废名集》序/查振科//《废名集》,沈阳出版社 1998 年版。

废名年谱/程光炜;王丽丽//《废名集》,沈阳出版社 1998 年版。

独特的审美取向及艺术追求:对废名诗歌的再认识/孔占奎//《攀枝花大学学报》1999 年第 1 期。

浅论废名乡土小说的奇僻晦涩及其成因/顾锦春//《南通教育学院学报》1999 年第 1 期。

拂尘即净的梦中之梦——论废名前期的禅化创作/杨厚钧//《武汉科技大学学报》1999 年第 1 期。

新诗的散文美——读冯文炳《谈新诗》札记/左文华//《辽宁师专学报》1999 年第 1 期。

“俗”的回归与超越——论废名后期的禅化创作/杨厚钧//《武汉科技大学学报》1999 年第 1 期。

- 冯文炳的三个笔名/陈建军//《文教资料》1999年第2期。
- 废名的叙事策略与宗教情怀/王青//《南京社会科学》1999年第2期。
- 迷人而难启的“黑箱”：评废名的诗/罗振亚//《中国现代文学研究丛刊》1999年第2期。
- 脱俗与自审：卞之琳、废名诗歌中的“镜子”意象/[韩国]崔允暄//《中外诗歌研究》1999年第2期。
- 废名乡土小说隐含的反现代性主题及其叙事策略/逢增玉//《东北师大学报》1999年第3期。
- 废名创作中禅意的形成与嬗变/杨厚钧//《湘潭大学学报》1999年第3期。
- 略论禅宗对废名小说的影响/丁小萍//《上海交通大学学报》1999年第4期。
- 禅趣写田园，楚运绘边城：废名、沈从文小说创作之比较/郁纛纛//《抚州师专学报》1999年第4期。
- 梦中的田园——论废名、沈从文小说的人性美母题/杜秀华等//《沈阳师范学院学报》1999年第6期。
- 《五祖寺》（《莫须有先生坐飞机以后》之一章）里的佛教色彩/[韩国]吉贞杏//《对话与漫游——四十年代小说研读》，上海文艺出版社1999年版。
- 关于《废名文集》/止庵//《博览群书》2000年第1期。
- 废名佚文续考/止庵//《文汇读书周报》2000年2月19日。
- 冲淡平和的人间牧歌/王凯//《广西师范大学学报》2000年第2期。
- 挣不脱的脐带：废名小说与中国传统文化/罗昌智//《江汉论坛》2000年第3期。
- 废名《谈新诗》之我见/张健//《锦州师范学院学报》2000年第3期。
- 废名乡土小说晦涩之风及其成因/顾金春//《南通师范学院学报》2000年第3期。
- 废名谈玄/哈尔克//《中国现代文学研究丛刊》2000年第3期。
- 论废名小说中的诗与禅/朱晶//《韩山师范学院学报》2000年第3期。
- 试论废名小说的美学风格/陈茜//《江西师范大学学报》2000年第4期。
- 废名向李大钊忏悔？/刘慕冰//《中华读书报》2000年4月19日。
- 我看见墙上我的影子/郑勇//《刘汇读书周报》2000年5月27日。
- 试论废名小说的文体特征/陈茜//《江西社会科学》2000年第6期。
- 入口微涩，余味久长：浅谈废名小说的语言艺术/于宝娟//《语文学刊》2000年第6期。
- 废名纺织的花毡/赵武平//《中华读书报》2000年9月23日。
- 有关废名的几件事/孙玉蓉//《文汇读书周报》2000年9月23日。
- 卞之琳与徐志摩、闻一多、废名/江弱水//《光明日报》2000年12月14日。
- 废名的意义/格非//《文艺理论研究》2001年第1期。
- 背着“语言的筏子”——废名小说《桥》的诗学解读/吴晓东//《中国现代文学研究丛刊》2001年第1期。
- 废名佚文小辑/姜德明//《新文学史料》2001年第1期。
- 废名小说与佛禅精神/陈国恩//《贵州社会科学》2001年第1期。
- 废名诗话小说简论/王凯//《广西梧州师范高等专科学校学报》2001年第1期。

玄思的诗意：论废名之诗及其诗学观/王捷//《乐山师范学院学报》2001年第1期。

儒道佛思想对废名的影响综论/刘年辉//《长沙大学学报》2001年第1期。

禅宗：废名小说的审美向度/张永//《文学评论丛刊》2001年第2期。

意念与心象——废名小说《桥》的诗学研读/吴晓东//《文学评论》2001年第2期。

废名小说的时间与空间/刘勇//《当代作家评论》2001年第2期。

废名作品中的讲述人与倾听者/徐彦利//《石家庄师范专科学校学报》2001年第3期。

幻美的乌托邦：读废名的《桥》/刘年辉，谢泽勇//《株洲师范高等专科学校学报》2001年第3期。

寄情林泉：废名小说中隐士原型的变形/金昌庆//《南京理工大学学报》2001年第3期。

童心与佛理契合的世界/李松//《广西师院学报》2001年第3期。

桥这边的风景：废名《桥》中的物于风景的世界/马俊江//《河北大学学报》2001年第3期。

往者难追/孙郁//《读书》2001年第4期。

《莫须有先生坐飞机以后》：漫漶的“水”/陈建军//《黄冈师范学院学报》2001年第4期。

论废名《桥》的闺阁情趣/夏元明//《黄冈师范学院学报》2001年第4期。

废名小说《桥》的意境美/查长莲//《安庆师范学院》2001年第4期。

废名的魅力//《文艺理论与研究》2001年第4期。

“小人物”的画谱：谈契诃夫小说对废名小说的影响/杨莉；随桂月//《天中学刊》2001年第4期。

为人父，止于慈——纪念父亲废名诞辰100周年/冯思纯//《新文学史料》2001年第4期。

《桥》：诗意写作的文本/黄英//《阅读与欣赏》2001年第5期。

从造境到纪实：废名禅意小说艺术的嬗变/夏元明//《云南师范大学学报》2001年第5期。

洋山芋叶上的螳螂——重读废名/车前子//《文汇报》2001年6月4日。

论废名乡土小说的审美价值取向/蓝天//《淮北师院学报》2001年第6期。

从《竹林的故事》看废名早期小说的艺术特色/王万鹏//《甘肃教育学院学报》2002年第1期。

废名对初期新诗三条实验路径的论析/李卫涛//《黔东南民族师专学报》2002年第1期。

物镜相似，情感迥异：沈从文、废名小说意境比较/蔡荷芳；杜冬梅//《池州师专学报》2002年第1期。

《莫须有先生传》晦涩原因新探/李光曼//《温州师范学院学报》2002年第1期。

告诉你一个你不熟悉的三姑娘：对废名《竹林的故事》的一种解读/邵金峰//《宜宾学院学报》2002年第1期。

不一样的图景：兼论《祝福》和《浣衣母》的对华性叙事/李光曼//《安顺师专学报》2002年第1期。

聋乎？哑乎？——废名小说《菱荡》的当代透视/龚云普//《惠州大学学报》2002年第2期。

废名的诗集/止庵//《新文学史料》2002年第2期。

废名：走向古典艺术精神的深处/徐肖楠//《文学评论丛刊》2002年第2期。



废名：遗世而独立，微笑以拈花/哈迎飞//《“五四”作家与佛教文化》，上海三联书店 2002 年版。

论废名的文章观和后期小说创作之关系/杨志//《海南师范学院学报》2002 年第 3 期。

废名小说的“审丑”/夏元明//《韩山师范学院学报》2002 年第 3 期。

试论废名的小说风格/黄连平//《商丘师范学院学报》2002 年第 3 期。

天下众生皆存于心：废名《莫须有先生传》的现实性/郭岚芬//《语文学刊》2002 年第 3 期。

抗战期间废名避难黄梅生活与创作系年/陈建军；张吉兵//《黄冈师范学院学报》2002 年第 4 期。

文化情致上的不同取向——废名、沈从文乡土小说之比较/许兴苗//《浙江树人大学学报》2002 年第 4 期。

竟陵派与废名的散文创作/周荷初//《船山学刊》2002 年第 4 期。

废名散文化小说的叙事艺术/钱秀琴//《河西学院学报》2002 年第 4 期。

论废名与 20 年代“乡土小说”作家的差异/刘宇凡//《石家庄经济学院学报》2002 年第 4 期。

废名小说中的黄梅方言成分/汪化云；夏元明//《黄冈师范学院学报》2002 年第 5 期。

废名研究综述（1981-2001）/陈建军//《黄冈师范学院学报》2002 年第 5 期。

爱人生而不留恋人生：论废名小说的审美情怀/陈茜//《学术研究》2002 年第 5 期。

略论废名小说的接受与影响/陈茜//《江西社会科学》2002 年第 5 期。

熊十力撰《黄梅冯府君墓志》发微/张吉兵//《黄冈师范学院学报》2002 年第 5 期。

柳凤竹韵自有荫：论废名小说的创作价值/郭岚芬//《语文学刊》2002 年第 5 期。

云游诗僧与唐吉诃德：谈废名小说内在情趣/孔喆//《济宁师范专科学校学报》2002 年第 5 期。

现代抒情小说的开拓与发展——废名、汪曾祺小说比较论/董建雄//《绍兴文理学院学报》2002 年第 5 期。

论废名小说的追寻与失落/管兴平//《沙洋师范高等专科学校学报》2002 年第 5 期。

论《莫须有先生传》的用典/夏元明//《贵州社会科学》2002 年第 6 期。

独特的人生关注——论佛禅文化思想对废名小说创作的影响/郭岚芬//《内蒙古大学学报》2002 年第 6 期。

废名小说《桥》中的意境与风景世界/董连平//《中州学刊》2002 年第 6 期。

废名小说的叙事研究：树/格非//《小说叙事研究》，清华大学出版社 2002 年版。

真人“废名”/汤一介//《万象》2002 年第 11 期。

莫非熊冯二先生又打了一架？/张际会//《万象》2002 年第 11 期。

读止庵编《废名文集》琐记/吴小如//《文史知识》2002 年第 12 期。

废名先生/黄梅文史资料第 11 辑。

难忘废名先生/乐黛云//《万象》2003 年第 11 期。

“破天荒的作品”——论废名的小说/吴晓东//《莫须有先生传》，广西师范大学出版社 2003

年版。

读《莫须有先生传》止庵//《黄冈师范学院学报》2003年第1期。

生命感伤体验的诗化表达：王统照、郁达夫、废名小说合论/阎浩岗//《天津师范大学学报》2002年第1期。

境内的禅境，境外的人生：浅谈废名诗歌创作中佛禅思想的影响/张鑫//《重庆社会科学》2003年第1期。

试论废名二十年代的现代乡土小说/李柏青//《琼州大学学报》2003年第1期。

《废名小说》前言/格非//《废名小说》，浙江文艺出版社2003年版。

论诗化小说的艺术特质——以沈从文、废名小说创作为例/卢红敏；周光明//《石油大学学报》2003年第2期。

用瞻风采：废名小说中的阿尼玛原型/金昌庆//《宁夏社会科学》2003年第3期。

幻美的哀歌：读废名《桃园》/徐妍//《中文自学指导》2003年第2期。

唐吉诃德、桑丘、莫须有先生和房东太太/止庵//《中国文化报》2003年4月24日。

略论废名小说的诗意构成及其文化意蕴/吴薇//《人文杂志》2003年第4期。

文化意向及其生命体悟：废名小说创作探微/林锡潜//《福建教育学院学报》2003年第4期。

述评：1981年以来的废名小说研究/陈建军//《贵州社会科学》2003年第5期。

寻找精神家园：废名小说的原型母题/金昌庆//《广西社会科学》2003年第6期。

废名：一颗不损坏的飞尘/冷霜//《南方都市报》2003年7月26日。

“弃文就武”释义/陈建军//《鲁迅研究月刊》2003年第10期。

镜花水月的世界——废名《桥》的诗学研读/吴晓东//广西教育出版社2003年版。